

## 解題

五山堂詩話 十卷 收三四五六之四卷 菊池桐孫著

本書の解題及び著者の小傳は、本書第九卷にあり。

# 五山堂詩話卷三

娛菴居士著

柴栗山先生、經術文章爲一代泰斗、海內學者趨之如鶩、余於先生爲三世通家、在京之日、追隨絳帳、日得仰瞻風采、先生雖不專詩、音節天然、自不可掩、長篇大作多在初年、排冪則贈韓客百八十韻、沈鬱則天台山百韻、皆可謂巨匠摩天之手矣、迨幕府登庸之後、詩風亦變、多莊重雄大之作、今特抄余所記其中年詩、嵯峨夜歸云、酒氣花香滿面蒸、暮鐘催客別山僧、妙心寺畔烟初暗、如意峰頭月未升、野竹韻遙風勢細、村橋影暗水聲崩、

五山堂詩話卷三

柴栗山先生は、經術文章一代の泰斗たり、海内の學者之れに趨くこと驚の如し、余、先生に於ける三世の通家たり、京に在るの日、絳帳に追隨し、日に風采を仰瞻することを得たり、先生詩を專にせずと雖、音節天然、自ら掩ふ可からず、長篇大作、多くは初年に在り、排冪は則韓客に贈る百八十韻、沈鬱は則天台山の百韻、皆巨匠、天を摩するの手と謂ふ可し、幕府登庸の後に迨んで、詩風も亦變ず、莊重雄大の作多し、今特に余が記する所の其中年の詩を抄す、嵯峨の夜歸に云ふ「酒氣花香滿面蒸」暮鐘客を催して山僧に別る、妙心寺畔烟初めて暗く、如意峰頭月未だ升らず、野竹韻遙にして風勢細に、村橋形暗くして水聲崩る、郭門の夜市應に遠きに非るべし、點々林を隔て、數燈を見る、晝景に云ふ「清江一曲、林を抱いて流る、林外の小村未だ收らず、細徑人歸りて夕陽赤し、群

一

郭門夜市應非遠、點點隔林見、數燈畫景云、  
清江一曲抱林流、林外小村禾未收、細徑人  
歸夕陽赤、群鴉亂噪野風秋、梅花雖雜圖云、  
穀穀相呼鑽破籬、羈縻落梅時、秦關一  
別無消息、不記當年炊、屢屢清麗却可喜、晚  
年不爲此種詩、亦不屑爲也。

先生嘗作填浦懷古云、黑鼠餐牛丹水乾、六  
龍西幸海漫漫、簪纓滿地當時恨、獨有陶真  
曲裡彈、以示洪園、洪園憶黑鼠丹水出處、不  
得、沉吟數會、先生晒曰、洪園大才目窮萬卷、  
一椿小故事如何不曉得、洪園曰、老夫實不  
知、先生曰、不是祕書出於野馬臺詩、二人拍  
掌大笑、余方弱齡竊自屏後窺之、當時以爲  
天仙之會。

鴉亂れ噪く野風の秋、梅花雖雜の圖に云ふ、數々相呼ん  
で破籬を鑽す、羈縻侶を戀ふ落梅の時、秦關一別消息な  
し、記せず當年屢屢を炊しを、清麗却て喜ぶ可し、晩年此  
種の詩を爲らず、亦、爲ることを屑とせざるなり。

先生嘗て填浦懷古を作りて云ふ、黑鼠牛を餐ふて丹水  
乾く、六龍西に幸して海漫漫、簪纓滿地當時の恨、獨、陶真  
の曲裡に彈する有り」と、以て洪園に示す、洪園、黑鼠丹水  
の出處を憶ふて得ず、沉吟數會す、先生晒て曰、洪園大才、  
目、萬卷を窮む、一椿の小故事、如何んぞ曉り得ざると、洪  
園曰、老夫實に知らず、先生曰、是れ祕書ならず、野馬臺の  
詩に出づと、二人掌を拍つて大に笑ふ、余方に弱齡、竊に  
屏後より之れを窺ふ、當時以て天仙の會と爲す。

余曩過遠州、旅壁有先生題云、鳳曆天明第八年、維正月、吉涉龍川、東風挾雨、川雲黑、知是天龍飛上天、蓋春、檄赴召之日、所口號也。後十年、余再經此、見題一詩于後、云、天龍川上天、龍躍龍已升、天雲不從、至竟天龍成底事、江湖只合作、潛龍不知何人所作、尾署君梅二字、似是作者之字。

先生東下後、寄淇園一絕云、成齋仙去赤松歸、洛汭風流今伴誰、誰識簿書期會外、此心別與白雲期、淇園答云、成齋仙去赤松歸、不識風流今伴誰、唯有北山猿鶴侶、十年空望白雲期、西依成齋赤松滄洲、共二先生舊友也。

壬子冬先生奉使入大和、行經神武陵、一律

余曩に遠州を過ぐ、旅壁に先生の題する有り、云ふ、鳳曆天明第八年、維れ正月の吉、龍川を渉る、東風、雨を挾んで川雲黒し、知る是れ天龍の飛んで天に上るをと、蓋、檄を奉じて召に赴くの日、口號する所なり、後十年、余再び此を經、一詩を後に題するを見る、云ふ、天龍川上天龍躍る、龍已に天に升りて雲從はず、至竟天龍、底事を成す、江湖只、合さに潛龍と作るべきにと、何人の作る所なるを知らず、尾に君梅の二字を署す、是れ作者の字なるに似たり。

先生東下の後、淇園に寄する一絶に云ふ、成齋は仙去し、赤松は歸る、洛汭の風流今誰にか伴ふ、誰か識らん簿書期會の外、此心別に白雲と期す、淇園答へて云ふ、成齋は仙去し、赤松は歸る、識らず風流今誰にか伴ふ、唯、北山猿鶴の侶ありて、十年空しく望む白雲の期と、西依成齋赤松滄洲、共に二先生の舊友なり。

壬子の冬、先生使を奉じて大和に入り、行、神武陵を經る、

云、遺陵才向里民求、半死孤松數畝丘、非有  
 聖神開帝統、誰教品庶脫夷流、廐王像設專  
 金閣、藤相墳、瑩層玉樓、百代本支麗不億、幾  
 人來、此一回頭、其懷古傷廢、深情如揭矣。

浪華有祖仙者、善畫獼猴、先生有贈畫生祖  
 仙歌、云、祖仙所祖抑何仙、猿狙描法誰處傳、  
 揚州中管嫌尙蠢、手縛秋毫更尖圓、日日掃  
 來百數幅、突目噉口愁胡顰、長絹矮紙無不  
 可、大類踰兔小類拳、千態生動欲脫紙、如聞  
 清嘯落耳邊、君不見衆狙昔被狙公憐、朝三  
 暮四呆胸然、獨有老黠不受欺、別服靈砂飛  
 上天、長風吹落瀛海東、浪華城外受一塵、記  
 得昔日游侶態、寫向市人戲、換錢自愧蟲質  
 非人類、托言祖系出倭倭、有識致疑時相詰、

一律に云ふ、遺陵才に里民に向つて求む、半死の孤松數  
 畝の丘、聖神、帝統を開く有るに非ずんば、誰か品庶をし  
 て夷流を脱せしめん、廐王の像設、金閣を專にし、藤相の  
 墳、玉樓を層す、百代の本支麗徳のみならず、幾人か此  
 に來りて一たび頭を回すと、其古を懷ひ廢を傷む、深情  
 掲ぐるが如し。

浪華に祖仙といふ者あり、善く獼猴を畫く、先生畫生祖  
 仙に贈る歌あり、云ふ、祖仙の祖とする所は抑、何の仙ぞ、  
 猿狙の描法誰が處より傳ふ、揚州の中管、尙ほ蠢なるを  
 嫌ひ、手づから秋毫を縛して更に尖圓、日々掃ひ來る百  
 數幅、突目噉口愁胡の顰、長絹矮紙不可なる無し、大は踰  
 兔に類し、小は拳に類す、千態生動紙を脱せんと欲す、聞  
 くが如し、清嘯の耳邊に落つるを、君見ずや衆狙昔狙公に  
 憐まる、朝三暮四呆として胸然、獨老黠の欺を受けざる  
 あり、別に靈砂を服して飛んで天に上る、長風吹き落とす  
 瀛海の東、浪華城外に一塵を受く、記し得たり昔、日游侶  
 の態、寫して市人に向つて戲に錢に換ふ、自ら愧つ蟲質、  
 人類に非ざるを、托し言ふ祖系、倭倭に出づと、有識、疑を  
 致して時に相詰る、形を逃れ辭を遁る、玄又玄、粟翁雙眼  
 爛として電の如し、一睨々破す、繆系纏、祖仙抵頓して諱

逃形遁辭玄又玄、栗翁雙眼爛如電、一睨睨  
破繆系纏祖仙抵賴諱不得、承認狙仙非祖  
仙、諧語爛熳、可以當一部西遊記。

先生題盧生園云、一熟黃梁五十年、幾場榮  
耀枕中天、滿城富貴功名客、不識真身何處  
眠、未三月、先生竟歸道山、方知一時偶作、未  
嘗非識。

南涯戶川君諱安悌、好文愛客、余屢蒙款接、  
辱吐茵之愛、君有中川舟行十絕、茲錄其五、  
云、藍水浸秋潮、欲回汀洲一望盡、詩材、颯然  
蘆荻無風動、忽有輕舟移棹來、竹塢柳橋通  
野堤、漁家三兩架清溪、昏鐘斷後何聽取、處  
處秋蟬盡、豈啼、黯淡癡雲乍又晴、垂綸不覺  
夕陽傾、渡頭老樹蔭江曠、時聽鶉鳩呼侶聲、

み得ず、承認す狙仙にして祖仙に非ざるを」と、諧語爛熳  
以て一部の西遊記に當つ可し。

先生盧生の園に題して云ふ、「一熟黃梁五十年、幾場の榮  
耀枕中の天、滿城の富貴功名の客、識らず真身の處に  
か眠るを」と、未だ三月ならずして、先生、竟に道山に歸る、  
方に知る一時の偶作、未だ嘗て識に非ずんばあらざる  
を。

南涯戶川君、諱は安悌、文を好み客を愛す、余屢、款接せ  
られ、吐茵の愛を辱くす、君中川の舟行十絶あり、茲に其  
五を録す、云ふ、藍水秋を浸して潮回らんと欲す、汀洲一  
望盡く詩材、颯然として蘆荻風無くして動く、忽、輕舟の  
棹を移し來り有り、竹塢柳橋野堤に通ず、漁家三兩清溪  
に架す、昏鐘断えて後何をか聽取す、處々の秋蟬意を盡  
して啼く、黯淡たる癡雲乍ち又晴る、垂綸覺えず夕陽の  
傾くを、渡頭の老樹江に臨んで暗し、時に聽く鶉鳩の侶  
を呼ぶ聲、「風急にして平沙雁群噪ぐ、釣絲捲き得て動無  
らんと欲す、秋晴忽變じて秋陰合す、南浦の雲は交る北

風急平沙噪雁群、釣絲捲得欲無動、秋晴忽  
 變秋陰合、南浦雲交北渚雲、月黑江邊白鷺  
 飛、天涼風露濕蓑衣、還從賈舶乞燈火、答答  
 有魚分與歸、風流瀟酒可以槩其爲人矣。  
 余竹枝之作在十年前、好事舐草、一時抄傳、  
 遂至有災梨以行者、刊本有二、其一爲京槩、  
 附以洪園栲亭二跋、其一爲伊勢紀某所資、  
 刊去冬病瘧有間、偶取追讀、瑕疵百出、隨筆  
 加竄、自覺比初差勝、今錄改本以洗前陋、詞  
 云、江口連檣盡似麻、夕陽紅歇送歸鴉、佳期  
 別在水雲裡、一葉扁舟盪猪牙、結隊紅妝入、  
 畫樓、大娘押尾小當頭、對筵竝坐嬌無語、偏  
 爲生人要學羞、凌晨姊妹兩相攜、社下燒香  
 鬢髻低、小步階陰閑處立、手拋玉粒餵神鷄、

渚の雲、月黒くして江邊白鷺飛ぶ、天涼ふして風露蓑衣  
 を濕す、還て賈船に従つて燈火を乞ふ、答答に魚あり分  
 與して歸る、風流瀟酒以て其の人と爲りを概すべし。

余竹枝の作、十年前に在り、好事、草を舐し、一時抄傳し、  
 遂に梨に災して以て行ふ者有るに至る、刊本二あり、其  
 一は京槩と爲す、附するに洪園栲亭の二跋を以てす、其  
 一は伊勢紀某の資刊する所と爲す、去冬、瘧を病んで間あ  
 り、偶、取りて追讀す、瑕疵百出、筆に隨つて竄を加ふ、自  
 ら初に比すれば差勝るを覺ゆ、今改本を録して以て前  
 陋を洗ふ、詞に云ふ、江口の連檣盡にして麻に似たり、夕  
 陽紅歇んで歸鴉を送る、佳期は別に水雲の裡に在り、一  
 葉の扁舟猪牙を盪かす、隊を結んで紅妝、畫樓に入る、大  
 娘は押尾小は當頭、對筵竝び坐して嬌として語無し、偏  
 に生人の爲に羞を學ばんと要す、凌晨姊妹兩に相携ふ、  
 社下香を燒いて鬢髻低る、小步階陰閑處に立つ、手に玉  
 粒を抛て神雞に餵す、紅橋翠陌香塵を蔭らす、簾幙家々  
 春を管領す、舊日門前調馬の地、珊瑚鞭遺卻、今人に屬す、輕

紅橋翠陌。蕙香塵、離幙家家管。領春、舊日門前調馬地。珊瑚鞭遺却。屬今人。輕寒輕暖。暮春風、開遍山園。儘踏紅、多半遊人歸較晚。畫船未擺彩輿空。芳蹊宛轉。傍池通。士女遊嬉約略同。芍藥叢邊相見笑。海棠花下笑相逢。水光激灩景初頽。酒散旗亭人未回。還是黃昏門早掩。鐘聲催得出山來。細草新裙相映宜。妙音宮畔踏青時。蘆芽一寸巧堪管。玉指摘來從口吹。駢闐搥鼓賽江神。船上氍毹展。取春、衆裡拾頭成一笑。儂家認是比鄰人。穿過灣橋曲曲通。來舟斗與去舟逢。隔簾香霧難明了。纔認語聲輕喚儂。淺水蘆邊涼似秋。小姑學釣在船頭。玉纖未慣抬竿速。只道癡魚不上釣。新秋露氣濕涼階。雲淡玻璃淨似揩。

寒輕暖暮春の風、山園を開遍して儂、踏紅、多半の遊人歸ること較、晚し、畫船未だ擺せず彩輿空し、「芳蹊宛轉池に傍ふて通ず、士女の遊嬉約略同じ、芍藥叢邊相見て笑ふ、海棠花下笑つて相逢ふ、水光激灩として景初て頽る、酒散じて旗亭人未だ回らず、還是れ黃昏門早く掩ふ、鐘聲備し得て山を出で來る、細草新裙相映じて宜し、妙音宮畔青を踏む時、蘆芽一寸巧に管に堪ふ、玉指摘み來りて口に從せて吹く、駢闐たる搥鼓江神に賽す、船上の氍毹、奈を展取す、衆裡頭を拾て一笑を成す、儂家認む是れ比鄰の人、灣橋を穿ち過ぎて曲々通ず、來舟斗ち去舟と逢ふ、簾を隔て、香霧明了なり難し、纔に語聲を認め、儂を輕喚す、淺水蘆邊、涼秋に似たり、小姑釣を學んで船頭に在り、玉纖未だ慣はず竿を抬るの速なるに、只、道ふ癡魚釣に上らず」と、新秋の露氣涼階を濕ほす、雲淡くして玻璃淨ふして措ふに似たり、拜月人は歸る四更の後、莎庭拾ひ得たり小金釵、社頭の賽會中秋に値ふ、戸々の珠簾夜收らず、清光一天の月を開却して、滿街紅は映



拜月人歸四更後、莎庭拾得小金釵、社頭賽會值中秋、戶戶珠簾夜不收、閑却清光一天月、蒲街紅映萬星毯、月華燈彩鬪玲瓏、樓閣重重紅霧中、著得霓裳人似玉、居然身入廣寒宮、青尊燭下晚嬉俱、羅縠衣裳薄欲無、兩把心情相說與、傍人難道不糺糊、要聽當筵歌一場、就中品第略相量、笑他兒女看年少、不付何哉付順郎、月落江頭半夜潮、船家艤艇候、歸棹女奴扶得醉人上、先點絳燈照樓橋、繁絃急曲送仙舟、不信人間自有愁、却到回時轉惆悵、子規啼過夜雲稠、歡去春寒慄、五更鸞衾獨自睡、難成、招同姊妹閉相語、早到山鐘第一聲、香鬢新洗翠如流、雨後巫山雲未收、底事兒郎傳喚急、累人謾縮去登樓、

予萬星毯、月華燈彩玲瓏を鬪はず、樓閣重々紅霧の中、霓裳を著け得たる人、玉に似たり、居然として身は廣漢宮に入る、青尊燭下晚嬉俱にす、羅縠の衣裳薄ふして無らんと欲す、兩に心情を把りて相說與す、傍人難道糺糊たらざらん、當筵歌一場を聽かんと要す、中に就て品第略、相量る、笑ふ他の兒女年少を看る、何哉に付せずして順郎に付す、月は落つ江頭半夜の潮、船家艇を糺して歸棹を候つ、女奴、醉人を扶け得て上る、先づ絳燈を點じて樓橋を照らす、繁絃急曲、仙舟を送る、信せず人間自ら愁あるを、却て回る時に到て轉た惆悵す、子規啼き過ぎて夜雲稠し、歡去りて春寒、五更慄たり、鸞衾、獨自ら睡成り難し、姊妹を招同して閑に相語る、早く到る山鐘の第一聲、香鬢新に洗ふて翠流るゝが如し、雨後の巫山雲未だ收らず、底事ぞ兒郎傳喚急なる、人を舅して謾縮して去りて樓に登る、各、菱花に對して晚妝を卸す、盈々たる衣帶春を趁ふて香し、阿儂酒を病んで潑在なし、眉山を蹙損して、獨、房を閉づ、陌頭の楊柳、輕絲を長む、

各對菱花卸晚妝、盈盈衣帶趁春香、阿儂病  
 酒無憑在、蹙損眉山、獨閉房、陌頭楊柳鼻輕  
 絲、東惹西牽風競吹、有約不來春日晚、從他  
 偷得折閑枝、趁著東風看牡丹、絳羅人已護  
 春寒、縱饒乞得能來伴、香雨一過無奈殘、夜  
 深兩兩宿鴛鴦、屏掩春雲夢正香、知否眼前  
 秋冷淡、漁簪月白滿天霜、江上人家重女兒、  
 苧蘿自解出西施、垂髻學曲饒嬌貴、留待明  
 珠酬價時、本是西來賣錦人、一年城裡度紅  
 塵、自從誤識蕭娘面、只愛春風不愛身、淺畫  
 蛾眉、縮鬢烏紅妝、執綺趁歡娛、相逢總說青  
 春好、不道羅敷自有夫、或云、竹枝雖曰紀風  
 俗、恐不免淫靡之誚、余曰、贈芍探蘭、聖人何  
 以不刪、其人無以答。

東惹西牽風競ひ吹く、約ありて來らず春日晩る、從かす  
 他の偷み得て閑枝を折るに「東風を趁著して牡丹を看  
 る、絳羅人已に春寒を護す、縱饒乞ひ得て能く來り伴ふ  
 も、香雨一過殘するを奈ともするなし」、夜深けて兩々鴛  
 鴦宿す、屏、春雲を掩ふて夢正に香し、知るや否や眼前秋  
 冷淡、漁簪月は白し滿天の霜、江上の人家女兒を重んず、  
 苧蘿自ら解く西施を出だす、垂髻、曲を學んで嬌貴饒し、  
 留めて待つ明珠、價に酬いるの時、本と是れ西來錦を賣  
 るの人、一年城裡、紅塵を渡る、誤りて蕭娘の面を識りし  
 より、只、春風を愛して身を愛せず、淺く、蛾眉を畫いて  
 鬢烏を縮ツグね、紅妝執綺歡娛を趁ふ、相逢ふて總べて説く  
 青春好しと、道はず羅敷自ら夫ありと、或ひと云ふ、竹枝  
 は風俗を紀すと曰ふと雖、恐らくは淫靡の誚を免れず  
 と、余曰く、贈芍探蘭、聖人何を以てか刪らざると、其の人  
 以て答ふる無し。

今歲戊辰、寬齋先生六旬生辰、醵之、會者如雲、宴罷各預詩扇一柄、詩寫福祿壽三絕、福云、三男五女二孫兒、婿婦相將勸壽、一飲須傾十數酒、健腸恐不易支持、祿云、不養蠶絲不荷鋤、一家衣食有贏餘、君恩許大無由報、又爲兒孫添買書、壽云、六十人生足自多、龜齡鶴算奈頑何、心情未老身猶健、花則狂顛月則哦、一時賀章亦哀然成集、今不及備載、獨愛島梅外一聯、云、才容小杜今僧孺、詩補全唐後女媧、僧孺女媧、真活對也、先生嘗指唐詩逸存于我者、編成三卷、淇園目爲全唐詩女媧氏、島語本此、小杜蓋指余而言。

先生初不甚嗜酒、余相隨二十年餘、未嘗見

今歲戊辰、寬齋先生六旬の生辰、醵を擧ぐるの日、會する者雲の如し、宴罷んで各、詩扇一柄を頒つ、詩福祿壽の三絶を寫す、福に云ふ、三男五女二孫兒、婿婦相將て壽屆を勸む、一飲須らく十數酒を傾くべし、健腸恐らくは支持し易からざらん、祿に云ふ、蠶絲を養はず鋤を荷はず、一家の衣食贏餘あり、君恩許のごとく大にして報するに由なし、又、兒孫の爲に書を添え買ふ、壽に云ふ、六十人生自ら多とするに足る、龜齡鶴算、頑を奈何ん、心情未だ老いず身猶健、花には則狂顛し月には則哦す、一時賀章亦哀然として集を成す、今備載するに及ばず、獨、島梅外の一聯を愛す、云ふ、才、小杜を容る今の僧孺詩、全唐を補ふ後の女媧、と僧孺女媧、真に活對なり、先生嘗て唐詩の逸して我に存する者を指して、編して三卷と成す、淇園目して全唐詩の女媧氏と爲す、島が語此に本づく、小杜は、蓋、余を指して言ふ。

先生初め、酒を嗜まず、余相隨ふこと二十年餘、未だ嘗

其倒一蕉葉、近日便能蕪飲、引滿數次、玉山不頹、此亦奇矣、先生有詩云、人間富貴似雲浮、唯我榮華別有謀、開國醉鄉三萬戶、年過六十始封侯、一日先生醉倒、諸人尙且相強不償、余曰、今日先生封除矣、明日須更待、自効而復之、一座大笑。

先生學精金石、加以耽古癖、家藏古鏡數十枚、度關陳几、摩玩度日、令人吃吃欲笑、余草堂、例以月望爲詩會、今茲九月、當夜月蝕、卽以月蝕爲題、詩佛詩先成云、月如古鏡看矚、銅色纔存隱隱中、青綠朱砂誰辨得、座無好事半江翁、諸人絕倒、爲之擱筆。

字麗卿名嘉充、舊稱江湖社作者、寬齋先生書與如亭書云、秋水似足下、麗卿似無絃、意

て其一蕉葉を倒すを見ず、近日便ち能く蕪飲す、引滿數次、玉山頹れず、此れ亦奇なり、先生詩あり云ふ、人間の富貴、雲の浮ぶに似たり、唯我が榮華別に謀あり、開國醉郷三萬戶、年六十を過ぎて始めて侯に封ぜらる、一日先生醉倒す、諸人尙且相強いて置かず、余曰、今日先生封除す、明日須らく更に自ら効すを待ちて而して之れを復すべしと、一座大に笑ふ。

先生、學、金石に精し、加ふるに耽古の癖を以てす、家に古鏡數十枚を藏す、閑に度し几に陳し、摩玩して日を度る、人をして吃々として笑はんと欲せしむ、余が草堂、例に月望を以て詩會を爲す、今茲九月、當夜月蝕、卽月蝕を以て題と爲す、詩佛詩先づ成る云ふ、月は古鏡の如く看て、矚麗銅色纔に存す隱々の中、青綠朱砂誰か辨じ得ん、座に好事の半江翁なしと、諸人絶倒し、之れが爲に筆を擱す。

字麗卿名は嘉充、舊と、江湖社作者と稱す、寬齋先生嘗て如亭に與ふる書に云ふ、秋水は足下に似たり、麗卿は無絃に似たりと、意深く二子の成立を希ふなり、今、秋水逝

深希二子之成立也、今秋水逝矣、龍卿又困于風塵、天之厄詩人如此、可勝歎哉、偶得龍卿舊稿、摘出一二、梅雨云、十日梅天只睡過、懶窮更懶可如何、芭蕉新展窓前葉、近枕雨聲聽漸多、郊行云、青帘小颺午風輕、綠擁人家、霽色明、步履沿流城外路、樹初高處著、蟬聲、警句云、潮來橋脚短、木落塔頭長、秋老風還力、雨休雲尙忙、又、月新題ノ字、五字亦佳、余於西駿得知己二人焉、一藤枝冢荷溪、碧字風曉、才調獨絕、畫能詩、戊午秋、余流落將西、始過其居、欣然款接、延留半月、臨去亦蒙周濟、七八年後、重訪則余當時詩文、裝潢成卷、著在座右、見愛如此、不覺感歎、荷溪於詩、意期上乘、是以生平所作、多不嫌己意、撕

く、龍卿、又風塵に困す、天の詩人を厄する此の如し、勝けて歎ず可けんや、偶、龍卿の舊稿を得たり、一二を摘出す、梅雨に云ふ、十日の梅天只睡過す、懶窮まりて更に懶如何んすべき、芭蕉新に展ぶ窓前の葉、枕に近づく雨聲聽いて漸く多し、郊行に云ふ、青帘小く颺りて午風輕し、緑、人家を擁して、霽色明かなり、步履流れに沿ふ城外の路、樹初めて高き處蟬聲を著く、警句に云ふ、潮來りて橋脚短く、木落ちて塔頭長し、秋老いて風還つて力あり、雨休んで雲尙忙し、又、月新にしてノ字を題すと、五字亦佳なり。

余、西駿に於て知己二人を得たり、一は藤枝の冢荷溪、碧字は風曉、才調獨絶、畫に工に詩を能くす、戊午の秋、余流落して將に西せんとす、始めて其居に過ぎる、欣然として款接し、延留すること半月、去るに臨みて、頗亦周濟を蒙る、七八年の後、重ねて訪へば、則余が當時の詩文、裝潢して卷を成し、著けて座右に在り、愛せらるること此の如し、覺えず、感歎す、荷溪、詩に於て、意、上乘を期す、是を以て生平の所作、多く己が意に嫌らず、撕毀摧燒し、留

毀摧燒留者無幾、余無從、竟得、竟齋先生亦  
 嘗宿其家、余從先生得、其郊行一絕、云、烟淡  
 風恬、放午晴、春衫適得一身輕、半堤野燒痕  
 如墨、早有筆頭追步生、清新可喜、

其二、島田桑苾堂瑞、字公圭、書法嫺雅、兼通  
 音律、其人溫厚謙恪、一望而知爲君子、余屢  
 主其家、極盡東道之誼、又以詩見問、余賞其  
 畫、睡云、樹暗村圍、梅子黃、午時成、例睡、山房、  
 采桑兒女歸來、聒夢破、西窓無夕陽、風雪、  
 歸云、蹒跚醉履碎、銀沙、風雪前、頭勢更加、夜  
 半歸、家人已寢、戶前自掃一身花、一日、拉余  
 遊白岩寺、家人攜酒、踵至、山上藉草同飲、醉  
 後吹笛、聲振林木、是日朗晴、頭上富士、宛然  
 似向、我一笑、今日追憶、形神欲往、遊山有詩、

むる者幾も無し、余覺め得るに従<sup>じ</sup>なし、竟齋先生も亦嘗  
 て其家に宿す、余、先生に従つて其郊行の一絶を得たり、  
 云ふ、烟淡く風恬にして午晴を放つ、春衫適し得て一身  
 輕し、半堤の野燒、痕墨の如し、早く筆頭の歩を追ふて生  
 ずる有り」と、清新喜ぶ可し、

其二は島田の桑苾堂、瑞、字は公圭、書法嫺雅、兼ねて音律  
 に通ず、其人溫厚謙恪、一望して而して君子たるを知る、  
 余屢、其家を主とす、極めて東道の誼を盡す、又詩を以て  
 問はる、余、賞す、其畫睡に云ふ、樹暗くして村圍、梅子黃な  
 り、午時例を成して山房に睡る、桑を采る兒女歸り來り  
 て、聒し、夢破れて西窓夕陽無し、風雪夜歸に云ふ、蹒跚た  
 る醉履、銀沙を碎く、風雪前頭勢更に加ふ、夜半家に歸り  
 て、人已に寢ぬ、戸前自ら掃ふ一身の花、一日余を拉へて  
 白岩寺に遊ぶ、家人、酒を攜へて踵いで至る、山上に草を  
 藉いて同じく飲す、醉後笛を吹き、聲林木に振ふ、是の日  
 朗晴、頭上の富士、宛然として我に向つて一笑するに似  
 たり、今日追憶するも、形神往かんと欲す、遊山詩あり、今  
 全く之れを忘る、

今全忘之。

如亭遊富士山、半腹値雨、遂宿山中石室、雨連三日、糧盡飢憊、比霽不能復攀絕巔、悵然而返、余調以三絕句云、昌黎詩句昔開雲、雨闕名山今有君、不解老天何意思、却教通塞判然分、昨向銷金窩裡宿、不知衣上污胭脂、無端忽被瑤妃妬、肯許攀來近雪肌、短視先生憑几時、熒熒三寸紙相離、而今誤用看書法、不道看山遠自宜。

余久客伊勢、前後入社者殆數十人、歸都之後、杳無消息、獨迪齋原生、吟筒往來、至今不絕、近日如亭遊其地、重結詩社、所交者皆青年輩、余未曾及見、其能詩者、如亭就中舉、尤者三人、吉雄、宇鳳、奴、杜鞠、宇佳友、宇芋、宇草

如亭、富士山に遊び、半腹にして雨に値ひ、遂に山中の石室に宿す。雨、三日に連なる、糧盡きて飢憊し、霽るゝに比んで復た絶巔を攀づること能はず、悵然として返る、余調するに三絶句を以てして云ふ、昌黎の詩句、昔、雲を開く、雨、名山を闕さず、今、君あり、解せず、老天何の意思ぞ、却て通塞をして判然として分たしむ、昨、銷金窩裡に向つて宿す、知らず衣上胭脂に汚るを、端なく、忽ち瑤妃に妬まる、肯て許さんや攀ち來りて雪肌に近づくことを、短視先生几に憑る時、熒々たる三寸紙と相離る、而今誤りて書を見るの法を用ふ、道はず山を見る速き自ら宜しと。

余久しく伊勢に客たり、前後、社に入る者殆んど數十人、都に歸るの後、杳として消息なし、獨、迪齋原生、吟筒往來し、今に至るまで絶えず、近日如亭其地に遊び、重ねて詩社を結ぶ、交る所の者皆青年輩、余未曾て會て其詩を能するを見るに及ばざる者、如亭、中に就いて尤なる者三人を擧ぐ、吉雄、宇は鳳、奴、杜鞠、宇は佳友、宇芋、宇は草池、爲に數章を抄して、余に寄せて、詩話中に入れんことを求

池爲抄數章、寄余求入詩話中、因摘其佳者  
 各一、吉、掃庭云、一番掃去一番翻、手把青鸞  
 不憚煩、也是顛風來作惡、墜紅如雨撲黃昏、  
 杜、冬夜云、深夜殘燈綴玉蟲、凍雲釀雪月朦  
 朧、布衾如鐵肌如水、臥聽籬頭鷓鴣築風宇、新  
 秋云、清晨風露飽牽牛、嬌花柔蔓一籬秋、  
 怕紅暎來迫殺、自將碧傘覆梢頭、余答如亭  
 札尾署七字云、盡是劉郎去後栽、

迪齋詩筆最雋、余嘗爲其序、絕句集、津津道  
 之、今錄近藝中可觀者、如秋夜云、疎雨過時  
 欲二更、松窓月白驟涼生、紗燈一點人無寐、  
 滿院清風蚯蚓聲、新寒云、惻惻霜威入薄裘、  
 柳枯蕉敗不禁風、小楓解作防寒計、滿臉今  
 朝潮辭紅、冬日雜題云、八尺身材曲似弓、怯

む、因て其の佳なる者各一を摘す、吉の庭を掃ふに云ふ、  
 「一番掃ひ去りて一番翻る、手に青鸞を把りて煩を憚ら  
 ず、也た是れ顛風來りて惡を作す、墜紅雨の如く黃昏に  
 撲つ、杜の冬夜に云ふ、深夜の殘燈玉蟲を綴る凍雲雪を  
 釀して月朦朧、布衾鐵の如く、肌水の如し、臥して聽く籬  
 頭鷓鴣の風、宇の新秋に云ふ、清晨の風露牽牛を飽しむ  
 嬌花柔蔓一籬の秋、應に紅暎の來りて迫殺するを怕るゝ  
 なるべし、自ら碧傘を將て梢頭を覆ふ、余、如亭に答ふる  
 札尾に七字を署して云ふ、盡く是れ劉郎去りて後に栽  
 う」と。

迪齋詩筆最高なり、余嘗て其の爲に絶句集に序し、津々  
 として之れを道ふ、今、近藝中、觀る可き者を録す、秋夜に  
 云ふ、疎雨過る時二更ならんと欲す、松窓月白くして驟  
 涼生ず、紗燈一點人寐る無し、滿院の清風蚯蚓の聲、新寒  
 に云ふ、惻々たる霜威薄裘に入る、柳は枯れ蕉は敗れて  
 風に禁へず、小楓解く寒を防ぐの計を作す、滿臉、今朝辭  
 紅を潮す、冬日雜題に云ふ、八尺の身材曲けて弓に似た  
 り、寒を怯れて側臥す小齋の中、怪生す窓々窓を隔てゝ



寒側臥小齋中、怪生簌簌隔窓響、一樹棕櫚  
簸雪風皆不愧才人吐屬。

如亭近日學書極爲超脫、有詩云、行路讀書  
吾輩事、風裁何必減前賢、老來學畫君休笑、  
若較金翁少十年、蓋以清金壽門年五十餘、  
始從事於畫也、其題畫詩極多、今錄三絕云、  
巖頭草閣幽人宅、一局殘棋坐晚晴、窗外斜  
陽無限好、復招鄰叟決輸贏、山上陰雲向晚  
開、寒霖漸作暖風回、鳧羅忽破青盤現、托出  
黃綿襖子來、無限征途信一鞭、馬蹄塵裡過  
年年、誰家醉後身無事、山雨溪風閉戶眠、清  
麗綿芊雜之唐解元諸作中、恐未易辨也。

如亭入京、歲晚題僑居壁二律云、僑居遠向  
帝城留、邈矣山河隔十州、一縷炊烟新買婢、

響くを、一樹の棕櫚雪風に簸するの如き、皆才人の吐屬  
に愧ぢず。

如亭、近日、畫を學ぶ、極めて超脫と爲す、詩あり云ふ、行  
路讀書吾輩の事、風裁何ぞ必しも前賢に減ぜん、老來畫  
を學ぶ君、笑ふを休めよ、若し金翁に較すれば十年少し  
と、蓋、清の金壽門年五十餘、始めて畫に従事するを以て  
なり、其題畫の詩極めて多し、今三絶を錄す、云ふ、巖頭  
の草閣幽人の宅、一局の殘棋、晚晴に坐す、窓外の斜陽限  
りなく好し、復、鄰叟を招いて輸贏を決す、山上の陰雲、  
晚に向つて開く、寒霖漸く暖風となりて回る、鳧羅忽ち  
破れて青盤現す、黃綿襖子を托出し來る、限り無き征途  
一鞭に信かす、馬蹄塵裡年々を過ぐ、誰家か醉後身無事、  
山雨溪風に戸を閉ちて眠る、清麗綿芊、之れを唐解元の  
諸作中に雜ふとも、恐らくは未だ辨じ易からざるなり。

如亭、京に入り、歲晚僑居の壁に題する二律に云ふ、僑居  
遠く帝城に向つて留る、邈たり山河十州を隔つ、一縷の  
炊烟新に買ひし婢、三間の敗屋舊隨ひし衰、暫く燈影と

三間敗屋舊隨裘暫同燈影相言笑更與瓶  
梅作獻酬不歎蕭然歲云暮待春醉遍有花  
樓人人見說春遊好濟勝無憂我必先掃地  
焚香權且坐揜扉就枕復何眠思馳梅谷吳  
綾裡神往桃山蜀錦邊曆尾看看餘半紙一  
雙辦屐送殘年其尤可憐者於寓絕句云自  
笑身似箠上雁往來只是信人移恰似勾欄  
典身人之語

帶魚一名刀魚形如刀見八閩通志此際俗  
亦稱大刀魚如亭有詩云吶喊聲銷天日麗  
波濤海靜太平初折刀百萬沉沙去一夜東  
風盡作魚尖新殊極

海青陵阜鶴詩文宗韓嘗爲余誦其秋夕一  
聯云細視星成字靜聽蟲誦書只此十字的

同じく相言笑し、更に瓶梅と獻酬を作す、歎せず蕭然歲云暮、待春醉を遍有るの樓に、云に暮るゝを、春を待つて酔ひ過ふせん花有るの樓に、人々説くを見る春遊好しと、濟勝憂ひ無し我必先ず、地を掃ひ香を焚きて權に且く坐し、扉を揜ふて枕に就く復何ぞ眠らん、思は馳す梅谷吳綾の裡、神は往く桃山蜀錦の邊、曆尾看々半紙を餘す、一雙、屐を辦じて殘年を送ると、其尤も憐む可き者は旅寓の絶句に云ふ、自ら笑ふ身は箠上の雁に似たり、往來只、是れ人に信せて移ると、恰勾欄典身人の語に似たり。

帶魚、一名は刀魚、形、刀の如し、八閩通志に見ゆ、此際の俗、亦大刀魚オウワと稱す、如亭詩あり云ふ、吶喊聲銷して天日麗なり、波濤海靜なり太平の初、折刀百萬沙に沉んで去る、一夜東風盡く魚と作る、尖新殊に極まる。

海青陵阜鶴詩文宗韓とす、嘗て余の爲に其秋夕の一聯を誦す、云ふ、細に視れば星、字を成し、靜に聽けば蟲、書を誦すと、只、此の十字、的に是れ昌黎。

## 是昌黎

京人島棕軒者、咏秋後竹夫人云、北窓曾是待羲皇、風月空餘舊嫁裝、清節息交應倍冷、虛心受妬也何妨、經年別若雙星約、末路歎因一味涼、不獨這般悲薄命、前身泣露立瀟湘、可謂空前絕後矣、有才如此而不知流落何所、亦可惜也。

寬齋先生題赤壁圖云、孤舟月上水雲長、崖樹秋寒古戰場、一自風流屬坡老、功名不復畫周郎、此作尤膾炙人口、偶讀文待詔詩云、秋清山水夜蒼蒼、月出波平斷岸長、千古高情蘇子賦、東風誰更說周郎、抑何相似之甚、余道文詩雖佳、烹煉之功却不如先生之至也、孰謂今人不如古人耶。

京人島棕軒といふ者、秋後の竹夫人を咏じて云ふ、北窓會て是れ羲皇に待す、風月空く餘す舊嫁裝、清節交を息めて應に倍、冷なるべし、虛心妬を受くるも也た何ぞ妨げん、經年の別は雙星の約の若し、末路の歎は一味の涼に因る、獨り這般、薄命を悲むのみにあらず、前身露に泣いて瀟湘に立つと、空前絶後と謂ふ可し、才あること此の如にして、而も何の所に流落するを知らず、亦惜む可きなり。

寬齋先生、赤壁の圖に題して云ふ、孤舟月上りて水雲長し、崖樹秋寒し古戰場、一たび風流の坡老に屬せし自り、功名復た周郎を畫かずと、此作尤人口に膾炙す、偶、文待詔の詩を讀むに、云ふ、秋清くして山水夜蒼々、月出で波平にして斷岸長し、千古高情蘇子の賦、東風誰か更に周郎を説かんと、抑、何ぞ相似たるの甚しき、余、道ふ、文が詩佳と雖も、烹煉の功は卻て先生の至れるに如かざるなり、孰か今人古人に如かずと謂ふや。

待詔有乞猫詩云、珍重從君乞小狸、女郎先  
已辨麩、自緣夜榻思高枕、端要山房護舊  
書、遣聘自將鹽裏、策勳莫道食無魚、花陰  
滿地春堪戲、正是蠶眠二月初、余嘗作嫁猫  
詩云、女奴稍長太嬌柔、早被東家懇聘求、紅  
索當襦親自結、金鈴爲佩任他摸、入廚莫慕  
魚腥美、守室須防鼠竊憂、想料明年將子日、  
薄荷香穢綠陰稠、雖風趣太遜、以類駢書、亦  
自覺倚玉之醜。

古稱隨陸無武、絳灌無文、如此間戰國時信  
謙二公、皆能臨陣賦詩、殆有曹孟德之風、國  
初則仙臺黃門貞山公、英武之資、兼及詞藻、  
馬上少年一絕、胸襟氣象、今尙可想、片倉氏  
應運佐公、勳業巍巍、子孫世爲柱石、治白石

待詔猫を乞ふ時あり、云ふ、珍重君に從つて小狸を乞ふ、  
女郎先に已に麩を辨す、自ら夜榻に高枕を思ふに縁  
りて、端に要す山房舊書を護せんと、聘を遣して、自ら鹽  
を將て鹽を裏み、勳を策して道ふ莫れ食に魚無しと、花  
陰滿地、春、戯るに堪へたり、正に是れ蠶眠、二月初と、余  
嘗て猫を嫁する詩を作りて云ふ、女奴稍長じて太だ嬌  
柔、早く東家に懇に聘求せらる、紅索、襦に當て、親ら自  
ら結び、金鈴佩と爲して他の摸くに任す、厨に入りて慕  
ふこと莫れ魚腥の美、室を守りて須く防ぐべし鼠竊の  
憂、想料す明年子を將ゆるの日、薄荷香穢にして綠陰稠  
しと、風趣太だ遜づると雖、類を以て駢書す、亦自ら倚玉  
の醜を覺ゆ。

古に稱す、隨陸武無く、絳灌文無しと、此の間戰國の時、信  
謙二公の如き、皆能く陣に臨んで詩を賦す、殆んど曹孟  
德の風あり、國初は則仙臺黃門貞山公、英武の資、兼ねて  
詞藻に及ぶ、馬上少年の一絶、胸襟氣象、今尙想ふ可し、片  
倉氏、運に應じて公を佐け、勳業巍巍、子孫世、柱石と爲り  
て、白石城に治す、官、之れを、高の守に比す、今の白石の

城、官比之國高之守、今白石嗣君景貞、字子元、號醉月、韜鈴之餘、諷詠自娛、余從松井長民、得誦其詩、郊行云、清和時節、雨晴天、新綠家家濃似烟、聽得村民多吉語、蠶麤今歲小豐年、晚興云、誓書課輟到斜陽、閑趁微涼步小廊、滿腹經綸吾愛汝、獨看蛛絲補絲忙、其家人能詩者亦多、爲抄以傳世、柏貞宜、字叔通、號夢江、早秋云、秋淺莎蛩未解鳴、孤牀只覺睡思輕、窓風何敢驚幽夢、微觸簷鈴細細聲、夜意云、一味新涼雨後天、二更人定月方妍、不知孤影成、山聳、早有詩思上半肩、高成然、字俊民、號月庭、春雨云、塵纖細雨濕簾櫳、粧點春光、這箇中看到、牆桃偏著力、今朝打出上番紅、村居雜咏云、場圃泥乾下種遲、甜

嗣君景貞、字は子元、醉月と號す、韜鈴之餘、諷詠自ら娛む、余、松井長民に従つて、其詩を誦するを得たり、郊行に云ふ、清和の時節雨晴る、天、新緑家々濃烟に似たり、聽き得たり、村民の吉語多きを、蠶麤今歲小豐年、晚興に云ふ、誓書課輟んで斜陽に到る、閑に微涼を趁ふて小廊に歩す、滿腹の經綸吾汝を愛す、獨看る蛛子の絲を補ふて忙しきを、其の家人詩を能くする者亦多し、爲に抄して以て世に傳ふ、柏貞宜字は叔通、夢江と號す、早秋に云ふ、秋淺くして莎蛩未だ鳴くを解せず、孤牀只、覺ゆ睡思の輕きを、窓風何ぞ敢て幽夢を驚かさん、微に簷鈴に觸る細々の聲、夜意に云ふ、一味の新涼雨後の天、二更人定まりて月方に妍なり、知らず孤影の山を成して聳ゆるを、早く詩思の半肩に上るあり、高成然字は俊民、月庭と號す、春雨に云ふ、塵纖の細雨、簾櫳を濕す、春光を粧點す、這箇の中、看て牆桃に到りて偏に力を著く、今朝打し出だす上番の紅、村居の雜咏に云ふ、場圃泥乾いて種を下だすこと遲し、甜瓜蘿蔔時に遠ふことを恐る、明朝雨あり須

瓜蘿蔔恐違時、明朝有雨須看事、蟻蝶一團  
 春水涓、野乙朝、字惠甫、春草云、又值春風魂  
 見招、漫山連蕩綠迢迢、只將消長換人眼、不  
 似從前野火燒、佐義近、字恭夫、晚秋舟行云、  
 灣頭一帶暮烟交、水落短篙分葦梢、無數蠅  
 兒沙上聚、波搖鷺走入寒巢。

非唯家人能之也、治下詩流亦復不尠、道士  
 則有清商號、箏湖、才尤超著、首夏云、茅齋無  
 事晝如年、正是清和御袂天、芍藥花殘初褪  
 粉、芭蕉葉長漸舒箋、詩篇和睡曾無味、棋手  
 關心猶未圓、早見葦絲來上擔、饒腸對此口  
 流涎、釋子則有大疑、住速藏寺、晚步云、疎鐘  
 聲裡夕陽收、步出山門暮色幽、松影模糊看  
 在地、一痕眉月逗峰頭、闍媛則有橋氏春琴、

らく事を見るべし、蟻蝶一團水涓に春く、野乙朝、字は惠甫、春草に云ふ、又春風に値ふて、魂招かる、漫山連蕩緑迢々、只消長を替つて人眼を換ふ、似ず從前野火の燒しに、佐義近、字は恭夫、晚秋の舟行云に云ふ、灣頭一帶暮烟交る、水落ちて短篙葦梢を分つ、無數の蠅兒沙上に聚る、波搖いて鷺走して寒巢に入る。

唯、家人之れを能くするのみに非ざるなり、治下の詩流も亦復尠からず、道士には、則、清商あり、箏湖と號す、才尤も超著、首夏に云ふ、茅齋無事、晝年の如し、正に是れ清和袂を御すの天、芍藥花殘して初めて粉を褪し、芭蕉葉長じて漸く箋を舒ぶ、詩篇睡に和して會て味無く、棋手心に關して猶未だ圓ならず、早く見る葦絲の來りて擔に上るを、饒腸此に對して、口、涎を流す、釋子には、則、大疑あり、速藏寺に住す、晚歩に云ふ、疎鐘聲裡夕陽收まる、歩して山門を出づれば暮色幽なり、松影模糊看て地に在り、一痕の眉月峰頭に逗る、闍媛には、則、橋氏春琴あり、

爲高俊民妻。晝倦云、春陰黯淡鎖窓櫺、烟裏  
 沉爐細細風、倦倚綉牀無藉在、桃梢數盡落  
 殘紅、又有布衣乾子節者、年已耆矣、春日雜  
 咏云、蛛絲欲掃還停手、看渠得失忽關情、妨  
 碍小蟲元不分、網羅落葉可憐生、皆不凡也。  
 金雞道人賣藥爲業、忽而大廈重茵、忽而窮  
 巷殮糶、亦奇士也、生平好作詼諧俚文、人多  
 藐之、然其秋初詩云、枕上風涼團扇休、蟲音  
 微奏竹窓幽、短檠影透紗櫺裡、檢曆今宵是  
 立秋、殊爲清雅、後竟落魄、已而病亡、其婦霧  
 鬢風髻、春秋未老、乃能自負骨函、問關數程、  
 歸葬上毛、余感其烈操、作詩云、杞婦哭夫城  
 便崩、聞風千載幾人興、素顏猶是存桃李、清  
 操還能凌雪冰、踏地山河身踟躕、號天風雨

高俊民の妻たり、晝倦に云ふ、春陰黯淡、窓櫺を鎖さず、烟  
 は長む、沉爐細々の風、倦んで綉牀に倚りて藉在無し、桃  
 梢數へ盡くす、落殘の紅、又、布衣乾子節といふ者あり、年  
 已に耆なり、春日雜咏に云ふ、蛛絲掃はんと欲して還た  
 手を停む、渠が得失を見て忽ち情に關す、小蟲を妨碍す  
 る元不分、落葉を網羅する可憐生、皆凡ならざるなり。

金雞道人、藥を賣りて業と爲す、忽にして大廈重茵、忽に  
 して窮巷殮糶、亦奇士なり、生平好んで詼諧俚文を作る  
 人多く之を藐す、然れども其の秋初の詩に云ふ、枕上風  
 涼くして團扇休す、蟲音微奏竹窓幽なり、短檠影は透る  
 紗櫺の裡、曆を檢すれば今宵是れ立秋、殊に清雅と爲す  
 後、竟に落魄し、已にして病んで亡す、其婦霧鬢風髻、春秋  
 未だ老いず、乃能く自ら骨函を負ふて問關數程、上毛に  
 歸葬す、余其の烈操に感じて詩を作りて云ふ、杞婦、夫を  
 哭して城便ち崩る、風を聞いて千載幾人か興る、素顏猶  
 是れ桃李を存す、清操還て能く雪氷を凌ぐ、地を踏む山  
 河身踟躕、天に號ぶ風雨意猶奮、骨函、背に在り何ぞ重き  
 を辭せん、綱常を扶起す力自ら勝ゆ。

意翫嘗骨函在背何辭重扶起綱常力自勝」  
 木芙蓉谷文晁俱以畫名今代谷從無題咏  
 木名雍字文熙題赤壁圖云山風江月壬戌  
 秋壺觴與客醉扁舟黃州赤壁高千仞不及  
 坡公賦此遊頗似鍾譚其子恭字遠恥以父  
 別號老蓮故自號小蓮俊邁不群自幼耽文  
 墨癸亥夏甫二十五病麻疹而亡惜哉小蓮  
 殘香集二卷稍足不朽偶得集外詩書以補  
 逸夜泝澗水云寓攝已三月欲去嗟我窮盈  
 盈澗川水一身寄短篷舟人爭挽恣魚貫夜  
 烟中孤村燈隱隱遠郭鼓逢逢岸暗枯蒲裡  
 燐火滅還紅布衾寒似鐵沽酒薄無功鯨鯨  
 不能寐萬感集心胸明朝皇京近坐待初日  
 曠梅溪探春云一溪梅樹未全春點點疎花

木芙蓉谷文晁俱以畫名以て今代に名あり、谷は從より  
 題咏なし、木名は雍、字は文熙、赤壁の圖に題して云ふ、  
 『山風江月壬戌の秋、壺觴客と扁舟に酔ふ、黃州の赤壁高  
 きこと千仞、及ばず坡公の此の遊を賦するに、頗、鍾譚に  
 似たり、其子恭、字は遠恥、父の別號老蓮なるを以て、故に  
 自ら小蓮と號す、俊邁不群幼より文墨に耽る、癸亥の夏、  
 甫めて二十五、麻疹を病んで而して亡す、惜いかな、小蓮  
 殘香集二卷稍、不朽に足る、偶、集外の詩を得たり、書し  
 て以て逸を補ふ、夜、澗水に泝るに云ふ、攝に寓すること  
 已に三月、去らんと欲して我が窮を嗟す、盈々たり澗川  
 の水、一身、短篷に寄す、舟人争ふて恣を挽く、魚貫す夜烟  
 の中、孤村燈隱々、遠郭鼓逢々、岸は暗し枯蒲の裡、燐火滅  
 して這た紅なり、布衾寒、鐵に似たり、沽酒薄くして功無  
 し、鯨々、寐ること能はず、萬感、心胸に集る、明朝皇京近  
 し、坐して待つ初日の曠たるを梅溪春を探るに云ふ、一  
 溪の梅樹未だ全く春ならず、點々の疎花自ら人に可なり、  
 綿帽寒を衝く、吾計を得たり、才に幾日を過ぐれば塵  
 に堪へず。」



自可人、綿帽衝寒吾得計、才過幾日不堪塵、  
淡齋絕句、近已經刊、人盡服其清妍、不知律  
詩亦自深造、今特錄數首、以示該通、咏蝶云、  
一生心事著何忙、粉翅翩翩自在狂、對舞有  
時追柳絮、雙栖那處宿、花房池塘低度東風  
急、簾幙輕颺白日長、似共黃蜂作雙使、爭傳  
天詔、齊群芳燕云、故國飄零不作家、羈栖半  
歲在天涯、難逢十二度圓月、偏管三千里外  
花、畫閣語稀春欲盡、雕梁睡足日初斜、輕盈  
如汝應無比、舞雪佳人莫謾誇、初夏村居云、  
映門山色屬啼鶻、輕暖今朝已卸綿、春盡詩  
猶負清債、日長眠儘得閑、權貯風舍北千竿  
竹、斂雨溪南十畝田、別有吾家新富貴、滿池  
荷葉萬青錢、新造遊舫云、新造扁舟輕似梭、

淡齋絕句、近ごろ已に刊を經たり、人盡く其の清妍に服す、知らず律詩も亦自ら深造なるを、今特に數首を録して以て該通を示す、蝶を咏するに云ふ、「一生の心事何の忙を著けん、粉翅翩翩自在に狂す、對舞時ありて柳絮を追ひ雙栖那の處か花房に宿す、池塘低く度りて東風急に、簾幙輕く颺りて白日長し、黃蜂と共に雙使と作りて、爭ふて天詔を傳へて群芳を督するに似たり、燕に云ふ、故國飄零家を作さず、羈栖半歲、天涯に在り、遙ひ難し十二度の圓月、偏に管す三千里外の花、畫閣語稀にして春盡きんと欲し、雕梁睡足りて日初めて斜なり、輕盈汝の如き應に比無かるべし、舞雪の佳人謾に誇ると莫れ、初夏の村居に云ふ、「門に映する山色啼鶻に屬す、輕暖今朝已に綿を卸す、春盡きて詩猶清債を負ふ、日長うして眠儘、閑權を得たり、風を貯ふ舍北千竿の竹、雨を斂むる溪南十畝の田、別に吾が家の新富貴あり、滿地の荷葉萬青錢、新に遊舫を造るに云ふ、「新に扁舟を造りて輕きこと梭に似たり、茶厨漁具多きを須ひず、蘆花水淺くして穿ち將ち去る、楊柳橋低くして撐へ得て過ぐ、月を迎へて杯

茶厨漁具不須多、蘆花水淺穿將去、楊柳橋  
低撐得過、迎月杯尊三李白、照波衣帽百東  
坡、清閑且與沙鷗伍、一丈紅塵奈我何。

奥山脊號寄亭、與淡齋同里、頃托榕齋見投  
其詩、余尤愛其冬景、云、黯淡寒雲粘地低、凍  
禽求食眼將迷、籬邊忽認南天竺、含得紅珠  
磔磔啼、山村云、山村吹葉五更風、埋盡寒溪  
亂石中、一道潺湲流不轉、水車亦自有窮通。  
有一士子、祿仕不遂、將還鄉、以餬口於醫、因  
是贈以一絕、云、米囊花落客東歸、身向人間  
事盡非、採藥故山今得計、一村雞犬自依依、  
頗寓醒世之意。

阮光祿云、正索解人亦不得、所謂解人者、另  
具一種天分聰穎、一指便悟、今日余所得者、

尊三李白、波を照らす衣帽百東坡、清閑且つ沙鷗と伍す、  
一丈の紅塵我を奈何ん。

奥山脊、寄亭と號す、淡齋と同里、頃榕齋に托して其詩  
を投ぜらる、余尤も其冬景を愛す、云ふ、黯淡たる寒雲地  
に粘して低る、凍禽食を求めて、眼將に迷はんとす、籬邊  
忽ち認む南天竺、紅珠を含み得て磔々として啼く、山村  
に云ふ、山村葉を吹く五更の風、埋み盡くす寒溪亂石の  
中、一道の潺湲流れて轉ぜず、水車も亦自ら窮通あり。

一士子あり、祿仕遂げず、將に郷に還りて以て口を醫に  
糊せんとす、因是、贈るに一絶を以てして云ふ、米囊花落  
ちて客東に歸る、身は人間に向つて事盡く非なり、藥を  
故山に採る、今、計を得たり、一村の雞犬自ら依々」と、頗、  
醒世の意を寓す。

阮光祿云ふ、正に索解人も亦得ずと、謂はゆる解人なる  
者は、另に一種の天分聰穎を具す、一指して便ち悟る、今  
日余が得る所の者は、其れ獨、平春海翁か、翁病中、余、屢

其獨平春海翁乎、翁病中、余屢至、牀前論詩、翁亦以余言作陳琳之檄、翁已以國歌爲一代宗工、而兼深文學、此所以其徒一不能、雲梯仰攻也、頃見示偶題一絕、云、篇似髯蘇元博大、詞如老陸自豪雄、近人學宋成、何語、病婦喘言氣力空、語雖率易、亦可以當今詩頂上一針矣。

相傳平城朝、有一采女、容色都麗、人莫不屬意、帝一召幸、尋不復問、采女夜潛出宮、赴水而死、帝聞感愴、明日抵池上、弔之事、載大和物語、余嘗作采女怨、云、蓬山路遠更難通、月墜珠沈夜色空、回聲明朝如有問、君恩妾命葉相同、夜夢嚴裝女子來、見曰、妾以賤軀、認奉枕席、聖恩已過重、但惓惓之情、須臾不忘、

牀前に至りて詩を論ず、翁も亦余が言を以て陳琳の檄と作す、翁已に國歌を以て一代の宗工たり、而して兼ねて文學に深し、此れ其徒一も雲梯仰いで攻むること能はざる所以なり、頃、偶題の一絶を示さる云、篇、髯蘇に似たるは元、博大、詞、老陸の如きは自ら豪雄、近人、宋を學ぶ何の語を成す、病婦の喘言氣力空しと、語、率易と雖も亦以て今詩の頂上一針に當つ可し。

相傳ふ平城の朝、一采女あり、容色都麗、人意を屬せざるはなし、帝一たび召して幸す、尋いで復た問はず、采女、夜潛、宮を出で、水に赴きて死す、帝聞いて感愴し、明日池上に抵りて之を弔す、事は大和物語に載す、余、嘗て采女怨を作りて云ふ、蓬山路遠くして更に通じ難し、月墜も珠沈んで夜色空し、回聲明朝如問ふ有らば、君恩妾命葉相同じと、夜夢む嚴装の女子來り見て曰、妾、賤軀を以て認りて枕席を奉ず、聖恩已に過重、但、惓々之情、須臾も忘れず、自ら惜まざる所以の者は、竊に一たび宸襟を動かし、遺踪を追悼する事有らんを望む、則、猶、再び天日

所以不自惜者、竊望有一動宸襟、追悼遺踪、則猶如再覩天日也、豈敢以君恩爲薄哉、余驚而寤、遂改二句云、縱使明朝回鞏、問太陽那得照幽宮。

越後館機、字樞卿、號柳灣、卷大任、字致遠、號弘齋、一號菱湖、二人同宗、中晚、而小異、其趣、柳灣仕爲小吏、半世爲風塵所累、然吟咏不絕、和雅醞藉、詩似其人、讀農書云、歸田賦未成、代耕愧微祿、年年爲農吏、時把農書讀、湖鄉論葑田、林野說樵牧、徒將種藝術、緣飾案頭牘、安得脫塵鞅、故丘營茅屋、腰間一雙刀、可換牛與犢、兩夜宿小坂驛、云、衝雨過山橋、投宿小坂口、蕭蕭驛舍中、愁坐與誰偶、寒燈抱孤影、呻吟夜已久、明朝渚村津、舟楫得渡

を觀るが如きなり、豈敢て君恩を以て薄しと爲さん、余驚いて寤む、遂に二句を改めて云ふ、縱使明朝鞏を回らして問はしむるとも、太陽那ぞ幽宮を照らすことを得ん。

越後の館機、字は樞卿、柳灣と號す、卷大任、字は致遠、弘齋と號す、一に菱湖と號す、二人同じく中晚を宗として、而して小く其趣を異にす、柳灣仕へて小吏と爲る、半世、風塵に累はさる、然れども吟咏絶えず、和雅醞藉詩、其人に似たり、農書を讀むに云ふ、歸田賦未だ成らず、什耕微祿を愧づ、年々農吏と爲る、時に農書を把りて讀む、湖郷葑田を論じ、林野、樵牧を説く、徒に種藝の術を將つて、緣飾す案頭の牘、安んか塵鞅を脱することを得て、故丘に茅屋を營せん、腰間の一雙刀、牛と犢とに換ふ可し、兩夜小坂驛に宿するに云ふ、雨を衝いて山橋を過ぐ、宿を投ず小坂の口、蕭々たり驛舎の中、愁坐誰と與に偶せん、寒燈孤影を抱く、呻吟、夜已に久し、明朝渚村の津、舟楫、渡を得るや否や、歸心炯として眠らず、溪聲瀝りて吼るが如し、手爐を咏するに云ふ、炭壘煙無くして紅未だ殘せず、温

否、歸心炯不眠、溪聲漲如吼、咏手爐云、炭甃無烟紅未殘、溫爐種火度、更闌、籬同、耽古磨、鐘鼎、不說學、仙燒玉丹、吟坐三冬、因汝熱客、居十歲笑、吾寒、先春漏、暖梅花孔、儲得陽和、氣一團、山村云、松棚草舍兩三椽、剝木編欄、護稗田、橡栗秋收無水旱、山村長占小豐年、高山竹枝云、牙梳月樣製來新、雲鬢當中出、半輪、清光剛道東山好、何似月梳能照人、弘齋於書、六書八體無所不該、殊爲有識所、推賞、詩自清雋、優入作者之域、栗熟云、霜風入小園、臥聞木葉脫、萩萩細聽取、吹墜新罇、栗、曉來籬落間、果然拾七八、輕輕摩、眉上、炮、之灰、頻撥、黃玉色、堪、恰、鬆脆香欲、咽、獨、顯勝、攀牛、攀尙勝、于、楔、野味適野性、自甘謀生拙、

爐火を種えて更の闌なるを度る、應に古に耽りて鐘鼎を摩するに同じかるべし、説かず仙を學んで玉丹を燒くを吟坐三冬、汝の熱に因る、客居十歲吾が寒を笑ふ、春に先だちて暖を漏らす梅花孔、儲へ得たり陽和の氣一團、山村に云ふ、松棚草舍兩三椽、木を剝り欄を編んで稗田を護す、橡栗秋收めて水旱無し、山村長く占む小豐年、高山竹枝に云ふ、牙梳月樣製し來りて新なり、雲鬢高中半輪を出だす、清光剛に道ふ東山好しと、何ぞ似ん月梳の能く人を照らすに、

弘齋、書に於いて、六書八體該ねざる所なし、殊に有識に推賞せらる、詩は、自ら清雋、優に作者の域に入る、栗熟するに云ふ、霜風小園に入る、臥して聞く木葉の脱するを、歌々細に聽取す、吹き墜す新罇の栗、曉來籬落の間、果然として七八を拾ふ、輕輕、眉上を摩し、之れを炮して灰、炮に撥す、黃玉色、恰むに堪へたり、鬆脆香、咽はんと欲す、獨顯學生に勝れり、攀は尙楔より勝れり、野味野性に適す、自ら甘んず生を謀る拙、一笑す今年の窺、窺猶未だ骨に

一笑今年癯、窮猶未透骨、秋柳云、弱質爭禁  
 霜露清、一株憔悴已堪驚、幾曾眉黛遭人學、  
 近日腰肢難自撐、芳草飛花猶入夢、疎烟殘  
 照最關情、不須往事頻回首、腸斷風前暮笛  
 聲、題畫云、新綠陰濃雲不開、紗窓乍冷夢魂  
 回、殘陽才照前山頂、又被鳴鳩喚雨來、其同  
 鄉吳榕堂其遠、爲穆翁浚明之孫、余未識、其  
 詩、僅得送弘齋一絕、云、江碧又山青、儘且堪  
 終老、如何清高客、不住家山好、極爲雅健。

七月中元日爲孟蘭盆節、前後懸燈連夕、兒  
 女袂服結隊、舞踏以達旦、京畿以下諸州皆  
 然、弘齋夜自寶珠津歸、柳原村途中卽目云、  
 幾隊花燈挂半空、歌聲笑語月明中、勝頭古  
 墓無人祭、一點秋螢照露叢、余讀之、擊節不

透らず、秋柳に云ふ、弱質争でか禁へん霞露の清に、一株  
 憔悴已に驚くに堪へたり、幾曾の眉黛人に學べる、近日  
 腰肢自ら撐へ難し、芳草飛花猶夢に入り、疎烟殘照、最  
 情に關す、須ひず往事頻に首を回らすを、腸は斷ゆ風前  
 暮笛の聲、題畫に云ふ、新綠陰濃にして雲開かず、紗窓乍  
 ち冷にして夢魂回る、殘陽才かに照らす前山の頂、又鳴  
 鳩に雨を喚び來らる、其同郷吳榕堂其遠は、穆翁浚明の  
 孫たり、余未だ其詩を識らず、僅に弘齋を送る一絶を得  
 たり、云ふ、江碧に又山青し、儘、且終老に堪へたり、如何  
 んぞ清高の客、家山の好に住せざる、と、極めて雅健と爲  
 す。

七月中元の日を孟蘭盆節と爲す、前後、燈を懸くこと  
 連夕、兒女袂服して隊を結び、舞踏して以て旦に達す、京  
 畿以下諸州皆然り、弘齋、夜、寶珠津より柳原村に歸る途  
 中の卽目に云ふ、幾隊の花燈か半空に挂る、歌聲笑語月  
 明の中、勝頭の古墓人の祭る無し、一點の秋螢露叢を照  
 らす、余之れを讀んで、節を擊ちて已ます、或ひと云ふ、未  
 だ其佳を覺えずと、余云ふ、且、目を閉ぢて一想せよ。

已、或云、未覺其佳、余云且閉目一想。

余與詩佛綠陰諸人同結吟社、往來不絕、綠陰春遊六言云、吟身去領年華、踏遍山阿水涯、紵影隔橋、酒市濤聲、出竹茶家、多情遠趁、狂蝶、出意還逢、好花、歸路雲昏、頭上、前村、催雨啼蛙、人爭誦之、時有京客索余題扇者、余偶然書此詩以贈之、一日余家詩會、京客亦至、忽語余曰、昨所見書扇上題詩、風趣絕佳、定是唐宋名家之作、余座間指綠陰示曰、此卽濤聲出竹茶家先生矣、其人愕然、綠陰名謹字公行、北山先生之子也。

醉石袖、近作一冊來見示、余讀之、不衣自暖、春日遊日暮里、云春服已成後、出遊逢好晴、看花百憂散、趁蝶一身輕、酒氣旗亭近、茶香

余、詩佛綠陰の諸人と、同じく吟社を結び、往來絶えず、綠陰の春遊の六言に云ふ、吟身去りて年華を領す、踏み遍し山阿水涯、紵影橋を隔つる酒市、濤聲、竹を出づる茶家、多情遠く狂蝶を趁ふ、出意還て好花に逢ふ、歸路雲昏し頭上、前村雨を催す啼蛙と、人争ふて之れを誦す、時に京客余が題扇を索る者あり、余、偶然此詩を書して以て之れに贈る、一日余が家の詩會、京客亦至る、忽余に語けて曰、昨、書せらるゝ扇上の題詩、風趣絶はだ佳なり、定めて是れ唐宋名家の作ならんと、余座間に綠陰を指し示して曰、此れ卽「濤聲竹」を出る茶家の先生と、其人愕然たり、綠陰、名は謹、字は公行、北山先生の子なり。

醉石、近作一冊を袖にし來りて示さる、余之れを讀んで、衣せずして自ら暖なり、春日、日暮里に遊ぶに云ふ、春服已成る後、出遊好晴に逢ふ、花を見て百憂散じ、蝶を趁ふて一身輕し、酒氣旗亭近く、茶香竹院清し、城を離るゝ

竹院清離、城才十里、村落午雞聲、觀、蓮云、荷  
 氣、薰蒸拂曉風、小橋恰自、葉間通、欄干四面  
 層層碧、人在、瑠璃世界中、稍辨荷花映、碧漪、  
 曉雲銜、月色初微、一聲清磬湖心寺、早有、雙  
 雙水燕飛、雲錦平鋪鏡裡天、紅濃素澹不堪  
 妍、一年兩度到湖上、寒即梅花暑即蓮、又、山  
 收、白雨頭還佛、人入、清秋體欲仙、一聯極佳、  
 近日三州文事、吉田爲、盛、輪直字秋筠、才學  
 自佳、紀臣字國輔、頗善書法、俱秀、出班行、二  
 人皆以詩質、余、輪七夕云、妙思人間自有餘、  
 時新刺綉費工夫、竿頭五彩雲箋字、更就天  
 孫乞巧書、新涼云、雨洗清秋晚始收、新涼先  
 自入書樓、恩深燈火能知謝、拜殺西風不肯  
 休、紀曉坐池亭云、小亭曉景自清奇、涼動荷

才に十里、村落午雞の聲、蓮を觀るに云ふ、荷氣薰蒸す拂  
 曉の風、小橋恰も葉間より通す、欄干四面層々の碧人は  
 瑠璃世界の中に在り、稍く辨す荷花の碧漪に映するを、  
 曉雲月を銜んで色初めて微なり、一聲の清磬湖心の寺、  
 早く雙々水燕の飛ぶあり、雲錦平鋪す鏡裡の天、紅濃素  
 澹妍に堪へず、一年兩度湖上に到る、寒には即ち梅花暑  
 には即ち蓮、又、山は白雨を收めて頭還て佛、人は清秋に  
 入りて體、仙ならんと欲すの一聯極めて佳なり。

近尸三州の文事、吉田を盛と爲す、輪直字は秋筠、才學自  
 ら佳なり、紀臣字は國輔、頗る書法を善くす、俱に班行に  
 秀出す、二人皆詩を以て余に質す、輪の七夕に云ふ、妙思  
 人間自ら餘りあり、時新の刺綉工夫を費す、竿頭の五彩  
 雲箋の字、更に天孫に就いて巧書を乞ふ、新涼に云ふ、雨  
 は清秋を洗ふて晚始めて收まる、新涼先づ自ら書樓に入  
 る、恩深くして燈火能く謝するを知る、西風に拜殺して  
 肯て休せず、紀の曉池亭に坐するに云ふ、小亭の曉景自  
 ら清奇、涼動いて荷汀淡霧開く、激々たる方池鏡面の如  
 し、蜻蜓、影を照らして去りて還た來る、此外高遠龜壩の



汀淡霧開、激激方池如鏡面、蜻蜒、照影去還來、此外有高暹、龜遜諸人、余未得其詩。

奥平升字秀士、信州人、以詩來見、秋日道上云、一溪如玉瀉、寒流、紅樹雲遮野寺樓、馬上欲描無紙筆、滿胸貯得眼前秋、山村暮歸云、風吹短帽弄昏黃、幾箇寒鴉投暝忙、猶有夕陽收不了、丹楓一樹照前岡、頗得晚唐風味。

隨園詩話云、偶見晚唐人七律、前四句云、去遠知己住遠親、欲策羸驂屢逡巡、萬里家山歸養志、十年門館受恩身、讀之一往情深、必士君子中有至性者也、惜不能記其全首、與其姓名、余檢全唐詩、此黃滔下第東歸、留辭刑部鄭郎中詩也、後四句云、鶯聲歷歷秦城晚、柳色依依灞水春、明日藍田關外路、連天

諸人あり、余未だ其の詩を得ず。

奥平升、字は秀士、信州の人、詩を以て來り見る、秋日道上に云ふ、一溪、玉の如く寒流に瀉く、紅樹雲は遮る野寺の樓、馬上描かんと欲して紙筆なし、滿胸貯へ得たり、眼前の秋、山村暮歸に云ふ、風は短帽を吹いて、昏黃を弄す、幾箇の寒鴉、暝に投じて忙し、猶、夕陽の收め了らざる有り、丹楓一樹前岡を照らす、頗、晚唐の風味を得たり。

隨園詩話に云ふ、偶、晚唐人の七律を見る、前の四句に云ふ、去れば知己に遠ひ住まれば親に遠ふ、羸驂に策うたと欲して屢、逡巡す、萬里の家山歸養の志、十年門館恩を受けるの身と、之を讀みて一往情深し、必、士君子中、至性ある者なり、惜むらくは其全首と其姓名とを記すること能はずと、余、全唐詩を檢するに、此れ黃滔下第東歸、刑部鄭郎中に留辭する詩なり、後の四句に云ふ、鶯聲歷々たり秦城の晚、柳色依々たり灞水の春、明日藍田關外の路、天に連なる風雨、一行人、接するに、泊、初場第せず、乾寧中、始めて進士に擢んでらる、後遂に節度推官と爲る、史

風雨一行人、按、沿初場不第、乾寧中始擢進士、後遂爲節度推官、史稱、王審知據有全閩、而終身爲節將者、沿規正有功焉、隨園所謂有至性者、信矣。

曾占春語余云、秋雨亦可稱梅雨、按、全唐詩溫庭筠詩、三秋梅雨愁楓葉、一夜篷舟宿葦花、羅隱詩、村店酒旗沽竹葉、野橋梅雨泊蘆花、此皆其證。

近今之詩、蓋有七病焉、道學自居、妄意尊大、以詩爲小道、然亦不能割情於釣名、顧其所作、只是修飾理語、以掩己拙、一病也、略古喜新、自炫其奇、輒近諸集、素然過眼、措險摭僻、錯出殺陳、博則博矣、毫無意致、二病也、名利心躁、急張門戶、皮裡無詩、自愧乖謬、故昌言

に稱す、王審知、全閩を據有して、而して終身節將と爲る者は、沿規正功あり、隨園の謂はゆる至性ある者と、信なり。

曾占春余に語て云ふ、秋雨も亦梅雨と稱すべしと、按するに全唐詩溫庭筠の詩に、三秋の梅雨楓葉を愁ふ、一夜の蓬舟葦花に宿す、羅隱の詩に、村店の酒旗竹葉を沽ふ、野橋の梅雨、蘆花に泊すと、此れ皆其證なり。

近今の詩、蓋七病あり、道學自ら居り、妄意に尊大し、詩を以て小道と爲す、然れども亦情を名を釣るに割く能はず、其の作る所を顧るに、只是れ理語を修飾して以て己が拙を掩ふ、一の病なり、古を略し新を喜ひ、自ら其奇を炫す、輒近の諸集、素然として眼を過ぐ、險を措り僻を披ひ、錯出殺陳、博は則博なり、毫も意致なし、二の病なり、名利心躁に、門戸を張るに急なり、皮裡詩無し、自ら乖謬を愧ぢ、故に昌言詆訶して、以て人を恐嚇す、一二、古人執拗

詆訶以恐嚇人、一、二有古人執拗之論、獨以立已說、不知其間意義矛盾、貽笑大方、三病也、詩名稍立、人亦扇焰、應酬無備、苟且爲計、瑕疵非不知、弄而不顧、以爲欺、群賢是亦足矣、會無列古作者之志、四病也、才學淺謏、強擬名手、才下一筆、蘊底畢露、無字不啞、無句不謎、破碎滅裂、不成文理、五病也、虛而爲盈、才實非才、帳中有祕、以供蠶食、識日卑而膽日張、驟然曰、天下無詩、誑人欺己、視不知恥、六病也、鄙情俚語、率易成篇、滿口咳嗽、紛然吐出、人稱之才敏、自亦謂手滑、楮生何罪、日受其汚、七病也、外此七者、欲求真詩、吁亦難矣。

余已收白石諸人之作、尙有所遺、筆湖重寄、

の論あるを認して以て己が説を立つ、知らず其間、意義矛盾し、笑を大方に貽す、三の病なり、詩名稍く立ち、人亦焰を扇す、應酬、問無し、苟且、計を爲す、瑕疵知らざるに非ず、棄て、顧みず、以爲へらく、羶聲を欺くは是れ亦足れりと、會て古作者に列するの志なし、四の病なり、才學淺謏、強いて名手に擬す、才に一筆を下せば、蘊底畢く露はる、字の啞せざる無く、句の謎せざる無し、破碎滅裂、文理を成さず、五の病なり、虚にして盈と爲し、才實に才に非ず、帳中に祕あり、以て蠶食に供す、識、日に卑ふして、膽日に張る、驟然として曰、天下に詩なしと、人を誑し己を欺き、視として恥を知らず、六の病なり、鄙情俚語、率易に篇を成す、滿口の咳嗽、紛然として吐出す、人之れを才敏と稱し、自も亦手滑と謂ふ、楮生何の罪ぞ、日に其汚を受く、七の病なり、此七の者を外にして、眞詩を求めんと欲す、吁、亦難し。

余已に白石諸人の作を收む、尙、遺す所あり、筆湖重ねて

其詩求余摘錄故追錄于此藤員慎字子進  
 村景云籬落黃葵經雨凋村溝數尺僅通橋  
 澗魚童子無纏纒不怯如飴泥到腰鳥敬勝  
 字子禮山居雪後云雪後松梢日脚通忽然  
 顛落不因風寒鴉三五爭何事堆白看看蹴  
 欲空池乙鷺字久好醉歸圖云買醉歸來扶  
 小童芭蕉衫袖舞春風村西野竹斜斜路殘  
 照先偷滿面紅嗚呼有人彬彬如此余東遊  
 之日往還經其處而無一人會面寶山空手  
 爲之悵然。

其詩を寄せて余が摘録を求む故に追ふて此に録す藤  
 員慎字は子進村景に云ふ「籬落の黄葵、雨を経て凋む、  
 村溝數尺僅に橋を通ず、魚を澗する童子、纏纒なし、怯れ  
 ず飴の如き泥、腰に到るを、鳥敬勝、字は子禮、山居の雪後  
 に云ふ、雪後の松梢日脚通ず、忽然顛落す風に因らず、寒  
 鴉三五何事を争ふ、堆白看々蹴て空ならんと欲す、池乙  
 鷺字は久好、醉歸の圖に云ふ、醉を買ふて歸來小童に扶  
 けらる、芭蕉衫袖春風に舞ふ、村西の野竹斜々の路、殘照  
 先づ偷む滿面の紅、嗚呼、人ある彬々此の如し、余、東遊の  
 日、往還して其處を經、而して一人の會面なし、寶山空手、  
 之れが爲に悵然たり。

五山堂詩話卷三終

## 五山堂詩話卷四

娛菴居士著

杜韓蘇詩之如來也、范楊陸詩之菩薩也、李近天仙、白近地仙、黃則稍落魔道矣。

生平思詩、或隻句未妥、二三字未貼、困至此際、意趣消亡、百鍊無成、自謂三鼓才竭矣、迨明早、偶然落想、殆如自天外來、蓋平旦清爽之氣、自然所發、乃釋貫休有句云、乾坤有清氣、散入詩人脾、信矣。

大田覃字子紹、稱南畝先生、爲人淳樸古淡、而傲岸處不可磨滅、醉後談諧百出、一本于天真、對客揮毫、文不加點、但構思不能有加。

杜韓蘇は詩の如來なり、范楊陸は詩の菩薩なり、李は天仙に近く、白は地仙に近し、黄は稍く魔道に落つ。

生平詩を思ふ、或は隻句未だ安ならず、二三字未だ貼ならず、困して此際に至れば、意趣消亡し、百練成ることなし、自ら謂ふ三鼓才竭くと、明早に迨んで、偶然落想、殆んど天外より來るが如し、蓋、平旦清爽の氣、自然に發する所乃爾り、釋貫休、句あり云ふ、乾坤清氣あり、散じて詩人の脾に入る、と信なり。

大田覃字は子紹、南畝先生と稱す、人と爲り淳樸古淡、而して傲岸の處、磨滅すべからず、醉後談諧百出、一に天真に本づく、客に對して毫を揮ふ、文、點を加へず、但、構思するも速成に加ふること能はず、亦捷才なり、余其の否

于遠成亦捷才也。余訪其杏花園。出詩稿見示。擔歸爲加批圈。又抄其粹者。三月小盡偶感云。半百過八年。豔陽少一日。今春猶是健。明春未可必。日昃府中歸。二孫來就膝。解衣且偃牀。開縹又緜。映籬竹未抽。筍。園杏已結實。良時多愆期。佳會無真率。但使酒錢足。此生志願畢。夏日閑咏云。鄰寺蟬聲送夕陽。風搖高樹未回涼。撫牀偃塞南窓下。恰有奇峰起。一方苦熱云。蒸氣困人如執炊。徒看東北黑雲垂。西郊不度分龍雨。果否天公亦有私。郊行矚目云。水浸黃雲垂稻穗。園殘白雪老蒼花。村人跨馬過橋去。仄徑潛通三兩家。梅花胡孫圖云。脫却人間羈絆憂。野梅花下煖風柔。賜緋何羨孫供奉。作賦從他柳柳州。絕

二

花園を訪ふに、詩稿を出して示さる。携へ歸りて爲に批圈を加ふ。又其粹なる者を抄す。三月小盡偶感に云ふ。半百八年を過ぐ。豔陽一日少なり。今春猶是健。明春未だ必ずべからず。日昃いて府中より歸る。二孫來りて膝に就く。衣を解きて且牀に偃す。縹を開きて又映を緜く。籬竹未だ筍を抽かず。園杏已に實を結ぶ。良時多く期を愆る。佳會眞率なし。但、酒錢をして足らしめば。此の生志願畢る。夏日閑咏に云ふ。鄰寺の蟬聲。夕陽を送る。風、高樹に搖いて未だ涼を回さず。牀を撫して偃塞す。南窓の下。恰も奇峰の一方に起るあり。苦熱に云ふ。蒸氣人を困して炊を執るが如し。徒に看る東北黒雲の垂るゝを。西郊度らず分龍の雨。果して否や天公も亦私有りや。郊行矚目に云ふ。水は黄雲を浸して稻穗に垂る。園は白雪を殘して蒼花老ふ。村人、馬に跨りて橋を過ぎ去る。仄徑潛かに通ず三兩家。梅花胡孫の圖に云ふ。人間羈絆の憂を脱却して。野梅花下煖風柔なり。賜緋何ぞ羨まん孫供奉。作賦従かす他の柳々州。絶句に云ふ。茅舍千竿の竹。茶梅

句云、茅舍千竿竹、茶梅一樹花、陰雲將雨過、  
山脚夕陽斜。

鯉村名假字子載、南畝之子、樸誠過父、亦有  
詩酒癖、客去云、客去橋邊月、空堂夜二更、燈  
花初綴、粟爐火已殘、螢稚子啼纔止、吟身睡  
未成、林風吹墜粟、時聽打簷聲、村景云、竹塢  
松邱日欲斜、疎籬曲曲繞人家、小渠三尺水  
清淺、一片絲瓜流出花、他如蟬噪槐花落、蛙  
跳荷葉開、村春穿竹響、野燒隔林明、塔危雙  
鶴下、廊寂一僧歸、皆佳句也。

南畝長崎子役之日、有人贈寄居蟲者、南畝  
謝以一絕云、客攜寄居蟲、寄我寄居中、擁劍  
時出入、似類主人翁、雅譴殊可喜、或云、擁劍  
是蟹屬、與寄居蟲別、不宜混用、余云、梁何遜

一樹の花、陰雲雨を將て過ぐ、山脚夕陽斜なり。

鯉村名は假字は子載、南畝の子、樸誠、父に過ぐ、亦、詩酒  
の癖あり、客去るに云ふ、客は去る橋邊の月、空堂夜二更、  
燈花初めて粟を綴る、爐火已に殘螢、稚子啼纔に止む、吟  
身睡未だ成らず、林風、粟を吹き墜す、時に聽く簷を打つ  
聲、村景に云ふ、竹塢松邱日斜ならんと欲す、疎籬曲々人  
家を繞る、小渠三尺水清淺、一片の絲瓜流れ出る花、他、蟬  
噪いで、槐花落ち、蛙跳つて荷葉開く、村春竹を穿ちて響  
き、野燒林を隔て、明か、塔危うして雙鶴下り、廊寂にし  
て一僧歸るの如き、皆佳句なり。

南畝長崎子役の日、人寄居蟲を贈る者あり、南畝謝する  
に一絶を以てして云ふ、客携寄居蟲を携へて、我が寄居の  
中に寄す、劍を擁して時に出入す、主人翁に似類す、と、雅  
譴殊に喜ぶ可し、或ひと云ふ、擁劍は是れ蟹の屬、寄居蟲  
と別なり、混用すべからずと、余云ふ、梁の何遜の詩に、



詩、躍魚如擁劍、是不分魚蟹、況寄居蟲自有小蟹、不必相礙。

此方之俗、歲除、家家春餅以迎新、年、都下傭作者、相結爲夥、釜餽杵臼、悉皆搬載、了一家到一家、謂之賃春、南畝歲暮書懷云、家家乘餅夜春聲、傭作移來杵臼輕、相約比鄰因熟釜、童鴻滅竈是何情、亦紀小俗也。

人問詩文稱首何義、余曰、史田儋傳贊、勳通善爲長短說、論戰國之權變、爲八十一首、首名始于此、蓋標首之義、分段之辭、猶言、件也、揚雄曰、讀賦千首、乃能爲之、後世詩文遂以首稱、按、陳書宣紀、錦被裘各二百首、後世衣服亦有以件稱者、件首同義、可見。

老杜寄河南韋尹詩、有客傳河尹、逢人問孔

魚擁劍の如し」と、是れ魚蟹を分たず、況や寄居蟲自ら小蟹あり、必しも相礙はらず。

此方の俗、歲除に家々餅を吞いて新年を迎ふ、都下傭作者、相結んで夥を爲し、釜餽杵臼、悉皆搬載し、一家を了して一家に到る、之れを賃春と謂ふ、南畝歲暮書懷に云ふ、家々の乘餅夜春の聲、傭作移し來りて杵臼輕し、相約して比鄰熟釜に因る、童鴻滅を滅す是れ何の情ぞ」と、亦小俗を紀するなり。

人問ふ、詩文に首と稱するは何の義ぞと、余曰、史の田儋傳の贊に、勳通善く長短說を爲す、戰國の權變を論じて、八十一首と爲すと、首の名、此に始る、蓋、標首の義、段を分つ辭、猶、件と言ふがごとし、揚雄曰、賦千首を讀みて、乃能く之れを爲すと、後世、詩文遂に首を以て稱す、按ずるに陳書宣紀に、錦被裘、各二百首と、後世衣服も亦、件を以て稱する者あり、件首同義、見る可し。

老杜、河南の韋尹に寄する詩に、客あり河尹を傳ふ、人に

融、注稱河南尹爲河尹、殊可笑、按、後漢蔡邕光武濟陽宮碑云、小臣河尹璋來在濟陽、河尹之語久矣、岑參詩又云、河尹天明坐莫辭、不獨杜詩襲之也。

聯璧有二典、一則晉書岳湛故事、一則北史韋孝寬除浙陽太守、時獨孤信爲新野太守、政術俱美、吏人號爲聯璧、杜詩、能吏逢聯璧、此全用北史、注引岳湛誤矣。

王維詩注、謬誤極多、今舉一二、送封太守詩、忽解羊頭削、注、羊頭車名、削、韓也、騎鼓也、按、削、銷古字通用、生鐵也、淮南子、苗山之鋌、羊頭之銷、水斷龍髯、陸剽兕甲、則羊頭亦非車名、明矣、不遇咏、百人會中身不預、此用伏滔事、晉書、孝武嘗會於西堂、滔預坐、還下車呼

遙、て孔融を問ふと、注に、河南の尹を稱して河尹と爲す、殊に笑ふ可しと、按ずるに後漢の蔡邕が光武濟陽宮の碑に云ふ、小臣河尹璋來りて濟陽に在りと、河尹の語、久し、岑參の詩に又云ふ、河尹天明坐して辭すること莫れと、獨、杜詩之れを襲するのみならず。

聯璧に二典あり、一は則晉書岳湛の故事、一は則北史韋孝寬、浙陽の太守に除す、時に獨孤信、新野の太守と爲る、政術俱に美なり、吏人號して聯璧と爲す、杜詩に、能吏聯璧に逢ふと、此れ全く北史を用ふ、注に、岳湛を引くは誤れり。

王維の詩注、謬誤極めて多し、今、一二を舉ぐ、封太守を送る詩に、忽ち羊頭の削を解くと、注に、羊頭は車の名、削は韓なり、騎鼓なりと、按ずるに削、銷古字通用す、生鐵なり、淮南子に、苗山の鋌、羊頭の銷、水には龍髯を斷ち、陸には兕甲を剽ると、則、羊頭も亦車の名に非ざること明なり、不遇の咏に、百人會中身預からずと、此れ伏滔の事を用ゆ、晉書に孝武嘗て西堂に會す、滔、坐に預る、還りて車を下りて其子を呼んで謂つて曰、百人高會、天子先づ伏

其子謂曰、百人高會、天子先問、伏滔在坐不、此故未易得、爲人作父如、此定何如、注乃引、傳燈錄、盧行者事、與不遇無涉、賀員外藥園詩、香草爲君子、名花是長卿、長卿是徐長卿、藥草名、薊子雲賦、有長卿晚翠、蘭子秋紅之句、注乃云、借司馬長卿以比花美、何遜至注、金椀酒家胡、謂椀狀如胡人者、殊可嗤也。李賀塞上詩、天遠席箕愁、劉會孟注、席箕如箕踞、楊升庵駁之云、秦韜玉詩、席箕風緊馬蹶豪、此豈箕踞之義乎、恐塞上地名、按段成式續集、席箕一名塞蘆、生北胡地、引古詩千里席箕草爲證、然則箕其字訛、劉以爲箕踞、升庵以爲地名、竝失之矣、唐人此外尙用席箕者、張籍詩、席箕侵路暗、王建集、有席箕纒

沿、坐在在りや不やと問ふ、此れ故と得易からず、人の爲に父と作ること此の如きは定めて何如んと、注、乃ち傳燈錄、盧行者の事を引く、不遇と涉ることなし、賀員外藥園の詩に、香草君子と爲す、名花是れ長卿と、長卿は是れ徐長卿、藥草の名、薊子雲の賦に、長卿晚に翠に、蘭子秋紅なり、の句あり、注、乃云ふ、司馬長卿を借りて以て花の美に比すと、何ぞ謬れるや、金椀酒家の胡を注して、椀の狀、胡人の如しと謂ふ者に至りては、殊に嗤ふ可きなり。

李賀の塞上の詩に、天遠くして席箕愁ふと、劉會孟の注に、席箕は箕踞の如しと、楊升庵之れを駁して云ふ、秦韜玉の詩に、席箕風緊にして馬蹶豪なりと、此れ豈箕踞の義ならんや、恐らくは塞上の地名ならんと、按ずるに段成式續集に、席箕一名は塞蘆、北胡の地に生ず、古詩の千里席箕の草を引て證と爲す、然らば則箕は箕の字の訛なり、劉以て箕踞と爲し、升庵以て地名と爲す、竝に之れを失す、唐人此外尙、席箕を用ふる者、張籍の詩に、席箕路を侵して暗し、王建の集に、席箕纒あり、元稹の集に、席箕霽あり、席箕の狀、亦想ひ見る可し、升庵博大、此の數の者

元稹集、有席箕簞、席箕之狀亦可想見、升庵博、大、不引此數者、何也。

嘗讀韓偓詩、高視黑鞞翁、遙吞白騎賊、黑鞞翁不知何所指、後讀北史、方知用于栗磾黑鞞將軍之事、古人曰、讀詩者、不可不讀史、信矣、但換將軍爲翁字、竟不免人疑猜。

梁高祖、不讀謝朓詩、三日、便覺口臭、余讀近人詩、便覺三日口臭。

陸放翁詩云、得米還憂無束薪、今年真欲餓生塵、椎奴洗婢皆辭去、始覺盧仝未苦貧、近讀如亭貧居云、貧居除却吟哦外、一淪清泉學老盧、吹火添薪勞赤脚、無如遠汲欠長鬚、余哂曰、如亭之貧、可謂在季孟之間矣。

信人高魯聖誕、與木百年齊名、二人詩、皆有

を引かざるは何ぞや。

嘗て韓偓の詩を讀むに、高く視る黑鞞翁、遙に吞む白騎賊と、黑鞞翁とは何の指す所なるを知らず、後に北史を讀んで、方に于栗磾が黑鞞將軍の事を用ふることを知る、古人曰、詩を讀む者は、史を讀まずんばあるべからずと、信なり、但、將軍を換へて翁の字と爲す、竟に人の疑猜を免れず。

梁の高祖、謝朓の詩を讀まざること三日ならば、便ち口臭の臭を覺ゆと、余、近人の詩を讀めば、便ち三日口臭の臭を覺ゆ。

陸放翁の詩に云ふ、米を得て還て憂ふ束薪なきを、今年眞に餓に塵を生ぜんと欲す、椎奴洗婢皆辭し去る、始めて覺ゆ盧仝未だ苦貧ならざるを、と、近ごろ如亭の貧居を讀むに云ふ、貧居吟哦を除却する外、一淪の清泉老盧を學ぶ、火を吹き薪を添ふるは赤脚を勞す、如んともすることなし、遠汲の長鬚を欠くを、と、余哂つて曰、如亭の貧、季孟の間に在りと謂ふ可し。

信人高魯聖誕、木百年と名を齊らす、二人の詩、皆根抵あ

根柢亦山林中之麟鳳也、余已深知百年、今與聖誕把晤、可謂一恨不餘矣、聖誕來投一詩冊、且擲二首、過岩暗澤云、古木蕭森天似低、行人到此意淒迷、山深一路烟嵐暗、猿坎聲中日已西、夏夜云、池畔軒窓待月開、十分涼氣沁靈臺、微風坐久方纔定、一點流螢度水來、頗近放翁小品。

百年客都已四歲、今秋其妻深井氏訃至、遠托如亭爲其撰墓文、蓋以如亭嘗在信最久、相識之熟也、又自作詩十章悼之、茲抄其四、云、命薄於雲只自憐、別離已在四年前、如今君逝吾猶客、雙淚無由滴九泉、征衣不見寄清秋、無奈新寒透弊裘、開盡四鄰砧杵急、坐來明月下西樓、孤眠不著意紛如、心計百般

り亦山林中の麟鳳なり、余己に深く百年を知る、今聖誕と把晤す、一恨餘さずと謂ふ可し、聖誕來りて一詩冊を投ず、且二首を擲、岩暗澤を過ぐるに云ふ、古木蕭森、天、低に似たり、行人此に抵りて意淒迷、山深くして一路烟嵐暗し、猿坎聲中日己に西す、夏夜に云ふ、池畔の軒窓月を待ちて開く、十分の涼氣靈臺を沁す、微風坐久くして方に纔に定まる、一點の流螢水を度りて來ると、頗放翁の小品に近し。

百年、都に客たること己に四歲、今秋、其妻深井氏の訃至る、遠く如亭に托して、其れの爲に墓文を撰す、蓋、如亭嘗て信に在ること最久しく、相識の熟するを以てたり、又自ら詩十章を作りて之れを悼む、茲に其の四を抄す、云ふ、命は雲より薄く只自ら憐む、別離己に四年前に在り、如今君逝く吾猶客、雙淚由なし九泉に滴るに、征衣見ず清秋に寄するに、奈ともすることなし新寒の弊裘に透るを、四鄰砧杵の急なるを聞き盡して、坐來の明月西樓を下る、孤眠著せず意紛如、心計百般今、初に負く、半夜樓前雁の過ぐるを聞く、燈を吹きて起て讀む去年の書、

今負初、半夜樓前聞雁過、吹燈起讀去年書、  
雙燕呢喃近社期、羈人猶自滯天涯、故山縱  
是、歸得客裡窮愁話、向誰、清微委婉極寫  
性靈、百年壯氣勃勃勢欲搏虎、而深於性情、  
乃能如此、詩人敦厚、亦可以見。

麓谷初集二集、文晁先已入梓、翁以今秋沒  
矣、近讀其二集、覺更勝初集、皆有駘宕之致、  
余尤愛其自詠、云、心遊浮世外、齡出衆人先、  
一棹如江海、三杯到聖賢、漫吟雖得句、拗得  
不成聯、究竟求何事、祇應稱醉仙、信步近村  
云、稻田厚、水水盈溝、溝水流邊水馬浮、水馬  
浮遊能似我、幾回來去幾回留、他如鳩呼三  
四處、麥秀百千莖、胡蝶多尋露、薔薇半壓牆、  
山似開顏笑、人宜鼓腹歌、柯陰蟻王國、窓下

「雙燕呢喃社期に近し、羈人猶自天涯に滯る、故山縱は  
是れ今歸り得るも、客裡の窮愁話して誰に向はん、清微  
委婉極めて性靈を寫す、百年壯氣勃勃、勢、虎を搏たんと  
欲す、而して性情に深きこと、乃能く此の如く、詩人の敦  
厚、亦以て見る可し。

麓谷初集二集、文晁先に已に梓に入る、翁、今秋を以て沒  
す、近ごろ其の二集を讀むに、更に初集に勝るを覺ゆ、皆  
駘宕の致あり、余尤其自詠を愛す、云ふ、「心は浮世の外に  
遊ぶ、齡は衆人の先に出づ、一棹、江海の如し、三杯聖賢に  
到る、漫吟、句を得ると雖、拗聯を成さず、究竟何事を求  
む、應に醉仙と稱すべし、近村に信步するに云ふ、稻  
田水を厚して、溝に盈つ、溝水流る、邊水馬浮ぶ、水馬  
浮遊能く我に似たり、幾回か來去幾回か留まる、他、鳩は  
呼ぶ三四處、麥は秀つ百千莖、胡蝶多く露を尋ね、薔薇半  
は牆を壓す、山は顔を開いて笑ふに似たり、人は鼓腹の  
歌に宜し、柯陰蟻王の國、窓、薔薇の人の、老いて自ら三  
感なし、餐聊か五辛あり」の諸句の如き、亦老成の典刑な

養皇人老自無三惑、餐聊有五辛、諸句亦老成之典刑。

榮堂見示其病間諸作云、邪降今曉氣聊勻、閑極窓間似度春、學插細評花腰妾、問方漫配藥君臣、顏纔生喜同梅解、腰稍遭摩與柳伸、不似生平吾愛潔、案頭亂點鼠行塵、瘦骨最嫌霜信緊、蒙頭綿被只嚴防、自嗤愛物還成異、茉莉建蘭分半牀、除夜云、藥債全還盡、酒錢猶未債、二毛來得得、百稔去堂堂、祀竈窮須送、買梅貧詎妨、明朝初四十、投老是詩鄉、人日云、臘雪涉春猶七尺、寒威人日異常年、菜羹今曉隨時俗、一把青菘值百錢。

墨菊詩最佳者、如詩佛云、典午園陵無一杯、籬花不復舊時秋、塢噉黃綺出山去、陶令歸

り。

榮堂其病間の諸作を示さる云ふ、邪降りて今曉氣聊勻ふ、閑極まりて窓間春を度るに似たり、挿を學んで細に評す花の腰妾、方を問ふて漫に記す藥の君臣、細纔に喜を生ず梅と同じく解す、腰稍く摩に遭ふて柳と伸ぶ、似ず生平君が潔を愛するに、案頭亂點す鼠行の塵、瘦骨最嫌ふ霜信の緊なるを、頭を蒙ふ綿被只嚴に防ぐ、自ら嗤ふ物を愛して還て異を成すを、茉莉建蘭半牀を分つ、除夜に云ふ、藥債全く還し盡し、酒錢猶未だ債はず、二毛來りて得々、百稔去りて堂堂、竈を祀り窮須く送るべし、梅を買ふ貧詎ぞ妨げん、明朝初めて四十、老に投ず是れ詩鄉、人日に云ふ、臘雪春に涉りて猶七尺、寒威人日常年に異なり、菜羹今曉時俗に隨ふ、一把の青菘百錢に値る。

墨菊の詩、最佳なる者、詩佛云ふ、典午の園陵一杯なし、籬花復舊時の秋ならず、塢へたり黃綺の山を出で去るを、陶令歸り來りて猶黒頭、裕齋云ふ、冷淡の一枝籬落の

來猶黑頭、榕齋云、冷淡一枝籬、落頭匹如陶  
令始歸休、人間金紫無心慕、占斷荒園風雨  
秋、皆爲出色、余亦題云、緇衣獨立瘦何勝、不  
願黃金塔結層、只向陶家來一笑、前身知是  
六朝僧。

島梅外賦雪味云、雪壓梅花無點塵、卸來煮  
茗最清真、一杯已沁詩脾著、風味方知是苦  
辛、島弟子參櫻所、賦雪勢云、雪陣張皇勢欲  
摧、東馳西突合還開、酒城已被渠僂奪、風助  
寒鋒當面來、櫻所名龍、越水原人。

同鄉又有小翠塢者、名星、詩才尤健、夏雲云、  
忽攢忽疊忽逶迤、翻手雲峰即便移、獨有真  
山閑似我、依然峭碧不爭奇、早起云、昨夜頻  
聞葉下來、也無一箇點、莓苔家童未起、知誰

頭、匹如陶令の始めて歸休するに、人間の金紫慕ふに  
心なし、占斷す荒園風雨の秋、の如き、皆出色と爲す、余亦  
題して云ふ、緇衣獨立瘦何ぞ勝へん、願はず黃金塔、層を  
結ぶを、只、陶家に向つて來りて一笑す、前身知る是れ六  
朝の僧。

島梅外、雪味を賦して云ふ、雪は梅花を壓して點塵なし、  
卸し來りて茗を煮る最清真、一杯已に詩脾に沁し著す、  
風味方に知る是れ苦辛、島の弟子參櫻所、雪勢を賦して  
云ふ、雪陣張皇勢摧けんと欲す、東馳西突合して還を開  
く、酒城已に渠僂に奪はる、風は寒鋒を助けて面に當り  
て來る、櫻所、名は龍、越の水原の人。

同郷に又小翠塢といふ者あり、名は星、詩才尤健なり、夏  
雲に云ふ、忽ち攢り忽ち疊み忽ち逶迤、手を翻せば雲峰  
即便ち移る、獨、真山の閑我に似たるあり、依然たる峭碧  
奇を争はず、早起に云ふ、昨夜頻に聞く葉の下り來るを、  
也一箇の莓苔に點する無し、家童未だ起きず知る誰か管



管、風約、牖陰、紅作堆、二人之詩、余得之梅外北遊行李中。

綠陰一日詩會、題是春草、弘齋賦云、芊芊漢漠、又離離、春遍池塘、惹夢思、悵望王孫歸未得、更堪南浦送君時、蓋此時毛聖民將赴北越、劍仲孚尙滯彼方、弘齋兼寓此意、就以送毛寄劍也、余曰、諺云、一鸞炙享、三客殆謂此詩也、一座驪然。

弘齋題吳必成墨竹云、可惜吳生磊落才、酒懷詩思向誰開、且將三斗胸中墨、捲起湘江暮雨來、必成名其正、俊明之孫、其遠之昆也、書畫俱逸、又善詩、題畫云、藤隴山色欲無痕、汨汨溪流半已渾、小艇人撐鷗鷺外、一蓑烟雨正黃昏、湖水迸流噴白沙、陰陰翠竹路欲

する、風は牖陰に約して紅堆を作す、二人の詩、余之れを梅外北遊行李中に得たり。

綠陰、一日詩會題は是れ春草、弘齋賦して云ふ、芊芊漢漠、又離々、春は池塘に遍くして夢思を惹く、悵望す王孫歸ること未だ得ず、更に堪へんや南浦、君を送る時、蓋此の時毛聖民、將に北越に赴かんとす、劍仲孚、尙ほ彼方に滯る、弘齋兼ねて此の意を寓し、就いて以て毛を送り劍に寄するなり、余曰、く諺に云ふ、一鸞の炙、三客を享すと、殆、此の詩を謂ふなりと、一座驪然たり。

弘齋、吳必成の墨竹に題して云ふ、惜む可し吳生磊落の才、酒懷詩思誰に向つて開かん、且らく三斗胸中の墨を將て、湘江の暮雨を捲き起し來る、必成、名は其正、俊明の孫、其遠の昆なり、書畫俱に逸す、又、詩を善くす、題畫に云ふ、藤隴の山色痕無らんと欲す、汨々の溪流半已に渾る、小艇人は撐ふ鷗鷺の外、一蓑の烟雨正に黃昏、湖水迸流白沙に噴す、陰々の翠竹路欲斜、一竿釣り得たり、霜鱗の美、緩ふすべけんや村西に酒家を叩くを」と、二絶、眞に是

斜一竿釣得霜鱗美、可緩村西印酒家、二絕  
眞是詩中之畫、如此清才、亦復難得、不料今  
已赴玉樓也。

柳灣弘齋秋夜同讀亡友中野子徵遺稿聯  
句云、客舍蕭蕭落木愁、滿城風雨暗深秋、柳  
對牀漫說故山夢、篝燈挑盡夜悠悠、弘憶得  
同遊長招集、風中吹笛月中樓、柳故人零落  
誰最是、可憐東野號詩囚、弘家無白水田二  
頃、詩成自比千戶侯、柳興來狂歌驚滿座、醉  
墨縱橫走逸蚪、弘筆瓢屢空晏如也、曾無半  
語涉怨尤、柳一旦窮死人不識茫茫江水平  
自流、弘騎來耦耕青山底、此約堪嗟今則休、  
柳爲把遺編仔細讀、半是昔遊半唱酬、弘眼  
明認取寄我句、滿江夜月打魚舟、柳數行哀

れ詩中の畫、此の如き清才、亦復得難し料らざりき今已  
に玉樓に赴かんとは。」

柳灣弘齋秋夜同じく亡友中野子徵の遺稿を讀む、聯句  
に云ふ、客舍蕭々として落木愁ふ、滿城の風雨深秋に暗  
し、柳對牀漫に説く故山の夢、篝燈挑げ盡して夜悠々、弘  
憶ひ得たり同遊長く招集せしを、風中には笛を吹き月中  
には樓、柳故人零落誰か最是なる、憐むべし東野詩囚と  
號す、弘家に白水田二頃なし、詩成りて自ら比す千戶  
侯、柳興來りて狂歌滿座を驚かす、醉墨縱橫、逸蚪を走  
らす、弘筆瓢屢空しけれども晏如たり、曾て半語の怨尤  
に涉るなし、柳一旦窮死して人識らず、茫々たる江水平  
しく自ら流る、弘歸來耦耕す青山の底、此の約嗟するに  
堪へたり今則休す、柳爲に遺編を把りて仔細に讀む、半  
は是れ昔遊半は唱酬、弘眼明にして認取す我に寄する  
句、滿江の夜月打魚の舟、柳數行の哀雁時に叫び過ぐ、喚  
んで鴈鳴鶴聲の柔と作す、弘子徵名は穩、柳灣に寄する  
一絶あり、云ふ、強いて病骨を支へて、獨、樓に凭る、蘆葦  
寒は生ず水國の秋、人遠く天長くして、月、畫の如し、滿江

雁時叫過、喚作謳鷓、鷓聲柔、馮子徵名穆、有寄柳灣一絕云、強支病骨、獨凭樓、蘆葦寒生、水國秋、人遠天、長月如畫、滿江柔、鷓夜漁舟、即聯中所言及者、風格類晚唐、真不愧爲二子之友矣。

詩錯一字、意味索然、遂使作者地下銜冤、余自幼讀三體詩、熊孺登祇役遇風云、水生風熱、布帆新、只見公程不見春、應被百花撩亂笑、比來天地一閑人、漫然讀過殊不覺佳、頃閱讀書樂趣、作比來天地少閑人、方覺精神全出、風旨動人、凡古人詩、此類極多、舉以洗冤、不亦一大功德乎。

因是自負、讀唐詩當今一人、誦其近作云、寒食清明風雨頻、多情空爲惜青春、長堤十里

の柔鷓夜漁の舟、即聯中言及する所の者、風格晚唐に類す、眞に二子の友たるに愧ぢず。

詩、一字を錯すれば、意味索然として遂に作者をして地下に冤を銜ましむ、余幼より三體詩を讀むに、熊孺登の祇役して風に遇ふに云ふ、水生に風熱して布帆新なり、只公程を見て春を見ず、應に百花の撩亂たるに笑はるべし、比來天地の一閑人と、漫然と讀過し、殊に佳を覺えず、頃ろ讀書樂趣を閱するに、比來天地閑人を少々に作る、方に精神全く出で、風旨、人を動かすも覺ゆ、凡そ古人の詩、此類極めて多し、舉げて以て冤を洗ふ、亦一大功德ならずや。

因是自負す、唐詩を讀む、當今一人と其近作を誦するに云ふ、寒食清明風雨頻なり、多情空しく爲に青春を惜む、長堤十里新晴好し、堯底の殘花人を見んことを羞づ、關

新晴好、葉底殘花羞見人、題云、新晴墨田堤  
 看花、花已摧殘、且曰、今人無此等題樣、余謂  
 此非夸語、舊稱張祐善題、目佳境、此爲才子  
 之最也、古人重題如此、近日粗才家、輕易措  
 題、亦異於因是。

鞠塲道人、於白鬚左側、買某氏廢園、浚池、實  
 山、新開生面、又種梅花三百餘株、自稱梅屋、  
 每到春初、花放、遊人來往不絕、今春其母八  
 十生日、廣聘名流、遍徵壽詞、余贈以一絕、云、  
 不做尋常天保祝、梅花借隱舊知賢、只須三  
 百梅花樹、一樹梅花簪一年、借隱用左氏字  
 面、春海翁嘗有贈鞠塲長句、中六句云、兀然  
 驢首新衲衣、稱隱忽逃編戶籍、四民有業汝  
 無營、東走西奔任自適、朝伴豪家金玉饌、暮

に云ふ、新晴墨田堤に花を看る、花已に摧殘すと、且曰、今  
 人此等の題樣なしと、余謂へらく、此れ夸語に非ず、舊と  
 稱す張祐善く佳境を題目す、此れ才子の最と爲すなり、  
 古人題を重んずること此の如し、近日粗才家、輕易に題  
 を措く、亦因是に異なり。

鞠塲道人、白鬚の左側に於て、某氏の廢園を買ひ、池を浚  
 へ山を實して、新に生面を開く、又梅花三百餘株を種え、  
 自ら梅屋と稱す、春初花放つに到る毎に、遊人來往絶え  
 ず、今春其の母八十の生日、廣く名流を聘し、遍く壽詞を  
 徵す、余贈るに一絶を以てして云ふ、尋常天保の祝に做  
 はず、梅花借隱舊と賢を知る、只須らく三百梅花の樹、一  
 樹の梅花一年を簪すべし、と、借隱は左氏の字面を用ふ、  
 春海翁嘗て鞠塲に贈る長句あり、中の六句に云ふ、兀然  
 たる驢首新衲衣、隱と稱して、忽ち逃る編戶籍、四民業あ  
 り汝營するなし、東走西奔自適に任す、朝に伴ふ豪家金  
 玉の饌、暮に趁ふ僧門桃李の陌と、善く鞠塲の生平を概  
 すと謂ふ可し。

趁倡門桃李陌、可謂善概鞠塢生平。

上侯流落北總、書於淨國寺中、寺主卽爲  
 疊華上人、華初居靈巖、稱吾黨遠公、移住之  
 後、不聞消息、頃上侯傳其近詩、方知鉢帽無  
 恙、偶成云、寒村淡味有餘清、不似城中日困  
 醒、麥飯療飢茶破睡、梅花樹下坐、春晴上侯  
 又督課後生、新結詩社、名曰烟波吟社、錄二  
 人詩、見示、佐伯寧字子威、夏夜云、一庭涼月  
 白如鋪、且喜炎威入夜無、散步歸來燈下坐、  
 初知衣上露痕滯、宮內篤字竹馬、新秋云、獨  
 下涼階、覓句時、月明如水欲沾肌、新來秋氣  
 無人覺、早已莎雞聖得知、二詩風調頗相似、  
 上侯將刻其絕句、求余刪定、未及交付、先爲  
 存幾章、春雨云、三日東園雨和風、斜斜細細

上侯、北總に流落し、書を淨國寺中に讀む、寺主は、卽、疊華上人たり、華初め靈巖に居る、吾黨の公と稱す、移住の後、消息を聞かず、頃ごろ上侯其の近詩を傳ふ、方に知る鉢帽恙なきを、偶成に云ふ、寒村の淡味餘清あり、似す城中日に醒を困むに、麥飯は飢を療し茶は睡を破る、梅花樹下春晴に坐す、上侯又後生を督課し、新に詩社を結ぶ、名けて烟波吟社と曰ふ、二人の詩を録して示さる、佐伯寧字は子威、夏夜に云ふ、一庭の涼月、白、鋪くが如し、且喜ぶ炎威の夜に入りて無きを、散步歸り來りて燈下に坐す、初めて知る衣上露痕の滯ふを、宮内篤字は竹馬、新秋に云ふ、獨、涼階を下りて句を覓むる時、月明、水の如く肌を沾さんと欲す、新來の秋氣人の覺ゆるなし、早く已に莎雞聖得知す、二詩、風調頗相似たり。

上侯將に其の絶句を刻せんとす、余に刪定を求む、未だ交付するに及ばず、先爲に幾章を存す、春雨に云ふ、三日東園雨、風に和す、斜々細々又濛々、柳絲空地苔錢疊む、春

又濛濛、柳絲窳地、苔錢疊、春在、金黃銅綠中、  
 山中初秋云、山館新秋似暮秋、蕉窓夜雨滴、  
 詩愁、只言孤寂無人伴、我正吟時、蚤正酬寄、  
 妓云、章臺當日綠楊枝、可是青青似舊垂、  
 蟬折也、應屬他手、韓郎今已誤、歸期、偶感云、青  
 錢轉、眼已成空、坐送春光、古寺中、雙鬢未、絲  
 情已老、茶烟禪榻落花風。

寬齋先生傲具五十詩、自叙略云、余周旋高  
 人韻士之際、幾三十年、知友所贈、俸餘所購、  
 月獲歲斂、金玉瓦石、今已雜陳几案之間、而  
 幽憂之解、病苦之消、莫非得助於此物也、乙  
 丑冬杪、筆研無憊、因自焚香、每一物係以、一  
 絕、以報多年隨侍之勞、有賦有諷、有比興、有  
 感慨、但取之一時興趣、不必拘拘咏物也、詩

は金黃銅綠の中に在り、山中初秋に云ふ、山館の新秋、暮  
 秋に似たり、蕉窓の夜雨詩愁に滴る、只言ふ孤寂人の伴  
 ふ無しと、我正に吟する時蚤正に酬ふ、妓に寄するに云  
 ふ、章臺當日の綠楊枝、是れ青青舊に似て垂るゝ可けん  
 や、蟬折也、應に他手に屬すべし、韓郎今已に歸期を誤  
 る、偶感に云ふ、青錢眼を轉じて已に空と成る、坐して春  
 光を送る古寺の中、雙鬢未だ絲ならず情已に老ゆ、茶烟  
 禪榻落花の風。

寬齋先生傲具五十詩、自叙略に云ふ、余、高人韻士の際に  
 周旋すること幾んど三十年、知友の贈る所、俸餘の購す  
 る所、月に獲に斂む、金玉瓦石、今已に几案の間に雜陳  
 す、而して幽憂の解くる、病苦の消する、助を此の物に得  
 るに非ざるはなし、乙丑の冬杪、筆研無憊、因て自ら香を  
 焚き、一物毎に係るに一絶を以てし、以て多年隨侍の勞  
 に報ず、賦あり、諷あり、比興あり、感慨あり、但之れを一時  
 の興趣に取る、必しも咏物に拘々たらざるなり、詩も亦  
 備載するに及ばず、僅に八首を抄す、一、寶泓硯に云ふ、書  
 窓の紫玉久し、相俱にす、温潤常に點畫をして、暇ならし

亦不及備載、僅抄八首、一寶泓硯云、書窓紫玉久相俱、溫潤常敷、點畫映平素、交遊君獨健、毛生秃盡、陳生癩、紫石作筒瓦樣、堅潤發墨、蓋用鐵梨、金漆題曰寶泓、一漢青鸞六乳鑑云、百鍊精銅鑄、月光瑤臺會伴美人粧、如今却喜深青綠、免照衰翁雨鬢霜、背作青鸞六乳、製作精緻、花紋勻淨、銅色瑩潤、青綠徹骨、信千百年外之物、一明神宗宸翰妙沙經云、一卷紺金寸大字、難醫明季亂如麻、可憐四海兆民主、不寫典謨寫妙沙、紺紙金字、祭爛如新、凡二百三十八字、末題曰、大明萬曆辛丑年三月吉日、當今皇帝謹發誠心書寫金字佛說妙沙經、以此功德專祈天下安寧、雨暘時若、饑愆解厄、永壽消災、一文明古量

む、平素の交遊若獨健なり、毛生は秃盡し陳生は癩す、紫石筒瓦樣を作す、堅潤墨を澄す、蓋鐵梨を用ふ、金漆題して寶泓と云ふ、一漢の青鸞六乳鑑に云ふ、百鍊の精銅、月光を鑄る、瑤臺會て伴ふ美人の粧、如今却て喜ぶ深青綠、衰翁兩鬢の霜を照すを免る、背に青鸞六乳を作る、製作精緻、花紋勻淨、銅色瑩潤、青綠骨に徹す、信に千百年外之物、一明の神宗の宸翰妙沙經に云ふ、一卷の紺金寸大字、醫し難し明季亂れて麻の如くなるを、憐む可し四海兆民主、典謨を寫さず妙沙を寫す、紺紙金字、祭爛新なるが如し、凡そ二百三十八字、末に題して曰、大明萬曆辛丑の年三月吉日、當今皇帝謹んで誠心を發し、金字佛說妙沙經を書寫す、此の功德を以て専ら祈る、天下安寧、雨暘時に若がひ、愆を饒し厄を解き、壽を永くし災を消せんことを、一文明の古量に云ふ、稻稅梁租小吏に隨ふ、生民の辛苦玉堆え、知らず三百年の上、幾多の膏血を量得し來る、南都般若寺の舊物、拍版を用ひて造る、口稜するに紫竹を以てす、緣邊字を刻して曰、般若寺年預方文明

云、稻税梁租隨小吏、生民辛苦玉堆堆、不知  
 三百年之上、量得幾多膏血來、南都般若寺  
 舊物、用柏版造、口稜以柴竹、緣邊刻字曰、般  
 若寺年預方文明八丙申十一月二十日、一  
 鑿鑿壺云、鑿鑿纏腰呈鬼工、摩挲須與鼎彝  
 同、觀來漆古教人遠、思在夏廷周廟中、高七  
 寸許、腰腹飾以鑿鑿及卦文、勻淨可玩、一、茶  
 籠云、山遊到處自提攜、筠籠烟濃繞杖藜、不  
 買杏花村裏醉、松邊取石汲清溪、一、菊枕云、  
 東籬幽味不勝清、一枕秋香縫落英、自愧故  
 山歸未得、寒宵雨細夢淵明、一、鹿盧燈云、萬  
 卷堆中寄此身、吾伊相伴夜垂晨、分明看破  
 古今事、俯仰悠悠只任人。

米庵以書法盛開壇坫、一時從遊者如雲、其

八丙申十一月廿日と、一鑿鑿壺に云ふ、鑿鑿腰を纏ふて  
 鬼工を呈す、摩挲須く鼎彝と同じかるべし、觀來れば漆  
 古人をして遠からしむ、思は夏廷周廟の中に在り、高さ  
 七寸許、腰腹飾るに鑿鑿及び卦文を以てす、勻淨玩す可  
 し、一茶籠に云ふ、山遊到處自提攜す、筠籠烟濃にし  
 て杖藜を繞る、杏花村裏の醉を賣はず松邊石を取りて清  
 溪を汲む、一、菊枕に云ふ、東籬の幽味清に勝へず、一枕  
 の秋香落英を縫ふ、自ら愧づ故山歸ること未だ得ず、寒  
 宵雨細にして淵明を夢む、一、鹿盧燈に云ふ、萬卷堆中此  
 身を寄す、吾伊相伴ふて夜晨に垂んとす、分明に古今の  
 事を看破して、俯仰悠悠、只、人に任かす。

米庵書法を以て、盛に壇坫を開く、一時從遊の者雲の如



中悟吟詩者、僅得三人焉。源晴山郊行云、麥  
翠菜黃春幾畦、人家柳暗小橋西、一聲野雉  
無尋處、遙向晚烟深處啼、西櫟齋夏日云、手  
臨晉帖半時來、雨窓獨坐興悠哉、小紅忽映  
端池上、始認榴花際、綠開、島成齋雜興云、柳  
鎖柴門菊繞籬、小齋弄筆自題詩、忽聞鄰壁  
槽聲滴、喚作陶家酒熟時、晴山名譜、櫟齋名  
鏡、成齋名親長。

栗山先生贈米庵序云、其於筆札、出入百家、  
而歸宿大米、清雅妍麗、使人一見而慕、不能  
已焉、其取重於薦紳如此、余見米庵教人書  
法、不限一家、唐宋諸家、下至趙董、各從學者  
所好、人亦因得自竭焉、故其門筆迹多可觀  
者、竊謂此法雖曰始于米庵、其實胚胎寬齋

し、其中吟詩を悟る者僅に三人を得たり、源晴山の郊  
行に云ふ、麥翠菜黃春幾畦、人家柳暗小橋の西、一聲の  
野雉尋ぬる處なし、遙に晚烟深處に何つて啼く、西櫟齋  
夏日に云ふ、手づがら晉帖を臨すること半時來、雨窓獨  
坐興悠なるかな、小紅忽映す端池の上、始めて認む、榴花  
の綠に際て開く、島成齋の雜興に云ふ、柳は柴門を鎖し  
菊は籬を繞る、小齋筆を弄して自ら詩を題す、忽聞く鄰  
壁槽聲の滴るを、喚んで陶家酒熟する時と作す、晴山名  
は譜、櫟齋名は鏡、成齋名は親長。

栗山先生、米庵に贈る序に云ふ、其の筆札に於ける、百家  
に出入して、而して大米に歸宿す、清雅妍麗、人をして一  
見して慕ふて已むこと能はざらしむ、其重きを薦紳に取  
ること此の如し、余、米庵、人に書法を教ふるを見るに、一  
家に限らず、唐宋諸家、下、趙董に至るまで、各、學者の好  
む所に従ふ、人亦因て自ら竭すことを得、故に其門、筆迹  
觀る可き者多し、竊に謂ふ、此法、米庵に始まると曰ふと  
雖、其實は寬齋先生詩を教ふるの法に胚胎す、但自家局

先生教詩之法、但自家局定、游刃有地、而後可爲耳、米庵嘗有八法歌、津筏初學、如勸法、便是圓點橫、覆舟首尾要、相照、虛畫藏鋒、妙在茲、請看映日有、黑綫諸句、皆爲要訣、篇長故不全錄。

米庵西征小稿中、載藝海遇颶七古云、歸程已及赤馬關、駛風借便、差慰顏、片帆吹送三百里、荻渚蘆洲、夜色閑、曉雲黑、處風倏變、須臾浪起、白如卷、下碇且候天、霽威三日守盡孤島面、維時中秋、晦半宵、猛風生、勢駕怒潮、兩脚飛、彈天刷墨、一簇一颶、舟如飄、檣仆柁折、纜又斷、面面相向、只長歎、如聞暗中舟、輾沙、拌命投、浪僅身半、舟人肩我、上岸行、且拜天地、謝再生、淋淋漓漓、滴衣盡濕、急入漁家、苦

定まり、游刃有地ありて、而して後に爲すべきのみ、米庵嘗て八法の歌あり、初學に津筏す、勸法便ち是れ圓點横はる、覆舟首尾相照するを要す、虚畫藏鋒、妙、茲に在り、請ふ看よ日に映して黑綫あるの諸句の如き、皆要訣と爲す、篇長き故に全く録せず。

米庵西征小稿の中に、藝海颶に遇ふ七古を載す、云ふ、歸程已に及ぶ赤馬關、駛風便を借して差、顔を慰す、片帆吹送る三百里、荻渚蘆洲、夜色閑なり、曉雲黒き處、風倏ち變じ、須臾浪起りて白くが如し、碇を下して且候つ天の威を霽すを、三日守り盡す孤島の面、維れ時中秋、晦の半宵、猛風勢を生じて怒潮に駕す、雨脚彈を飛ばして天墨を刷す、一簇一颶舟飄へるが如し、檣仆れ柁折れて纜又斷つ、面々相向つて只長歎す、聞くが如し、暗中舟沙に輾るを、命を拌して浪に投すれば僅に身半、舟人我を肩して岸に上りて行く、且天地を拜して再生を謝す、淋々滴々衣盡く濕ふ、急に漁家に入りて、苦に情を訴ふ、地爐柴を燒きて衣を把りて燎る、一身回陽坐して曉を待つ、豪聲猶聞く大軍の奔るを、轟地宛も萬馬の矯るが如し、

訴情、地爐燒柴把、衣燂、一身回陽坐待曉、豪  
 聲猶聞大軍奔、轟地宛如萬馬矯、天色微白  
 雨小休、稍衰風伯與、陽侯岸崩舟碎茅屋倒、  
 景象滲漉滿目愁、土人殷動向我說、海立如  
 此真奇怪、居者猶自魂欲消、而況吾子、在行  
 邁、噫嘻遠客一身單、何圖忽逢此艱難、魚腹  
 之葬吾雖免、回首肌膚粟生寒、千金元自不  
 垂堂、况乃滄海付葦航、遠遊有方予負聖、此  
 事書紳不敢忘、善寫風濤之險、使人悚然、  
 加賀大地文實、字伯政、號蕙齋、人品高逸、尤  
 耽風雅、名迹奇玩、家藏極多、余所見者、林圀  
 墨竹、郝杰玉印、皆其選也、蕙齋於書、太道、又  
 善畫蘭、詩亦有風趣者、上毛道中云、布穀聲  
 中細雨天、轎間兀坐只貪眠、夢醒最喜明、人

天色微白雨小しく休む、稍衰ふ風伯と陽侯と、岸崩れ舟  
 碎けて茅屋倒る、景象滲漉として滿目愁ふ、土人殷動に  
 我に向つて説く、海立此の如き真に奇怪、居る者猶自ら  
 魂消せんと欲す、而るを況んや吾子行邁に在るをや、噫  
 嘻遠客一身單なり、何ぞ圖らん忽此の艱難に逢はんとは、  
 魚腹の葬、吾免ると雖、首を回せば肌膚、粟を生ず、  
 千金元自ら堂に垂せず、況んや乃滄海、葦航に付す、遠遊  
 方あり予、聖に負く、此事紳に書して、敢て忘れず、と、善  
 く風濤の險を寫し、人をして悚然たらしむ。

加賀の大地文實、字は伯政、蕙齋と號す、人品高逸、尤風雅  
 に耽る、名迹奇玩、家藏極めて多し、余が見る所の者、林圀  
 の墨竹、郝杰の玉印、皆其の選なり、蕙齋書に於て太道、又  
 畫蘭を善くす、詩も亦風趣の者あり、上毛道中に云ふ、布  
 穀聲中細雨の天、轎間兀坐只貪眠を貪る、夢醒めて最も喜  
 ぶ人眼を明にするを、井字の青苗、水、田に滿つ、冬日偶  
 作に云ふ、芭蕉葉破れて已に霜を經、硬黃を貯へ得て猶

眼、井字青苗水溝田、冬日偶作云、芭蕉葉破  
 已經霜貯得硬黃、猶滿箱、頗喜近來官事少、  
 又臨閣帖兩三行、得古硯云、妙姿絕代米家  
 珍、天付吾儂是舊因、月夕花晨情更密、真成  
 將汝當佳人、題牧淡山書房云、先生無竹亦  
 何俗、種竹先生奇更奇、醉後灑毫鸞鳳舞、滿  
 窓月影碎金時、淡山者蕙齋之僚友也、名忠  
 輔、書畫亦超、飄逸愛酒常帶一大骨董袋、筆  
 墨卷軸悉皆收入、腰間彭亨然、殆令人失笑、  
 其歸國日、余贈一絕云、腰間括得一囊肥、蕭  
 散澗材今始歸、李老松煤文老竹、家人不敢  
 認珠璣。

月池桂君、諱國瑞、字公鑑、學兼蕃漢、爲一代  
 名家、風流好事、自出天資、家所貯書畫鼎彝

箱に滿つ、頗喜ぶ近來官事の少きを、又臨す閣帖の兩三  
 行、古硯を得るに云ふ、妙姿絶代米家の珍、天、吾儂に付  
 す是れ舊因、月夕花晨情更に密なり、真成に汝を將て住  
 人に當つ、牧淡山の書房に題するに云ふ、先生竹なきも  
 亦何ぞ俗ならん、竹を種えて先生奇更に奇、醉後毫を灑  
 い、鸞鳳舞ふ、滿窓の月影金を碎く時、淡山は蕙齋の僚  
 友なり、名は忠輔、書畫亦超、飄逸、酒を愛す、常に一大骨  
 董袋を帶ぶ、筆墨卷軸悉皆收入す、腰間彭亨然、殆、人をし  
 て失笑せしむ、其國に歸る日、余、一絶を贈りて云ふ、腰間  
 括し得て一囊肥たり、蕭散の澗材今始めて歸る、李老の  
 松煤文老の竹、家人は敢て珠璣を認めず。

月池桂君、諱は國瑞、字は公鑑、學、蕃漢を兼ぬ、一代の名  
 家たり、風流好事、自ら天資に出づ、家に貯ふる所、書畫鼎  
 彝の屬、神品世に絶する者、一にして足らず、人をして流

之屬、神品絶、世者不一而足、使人流涎不已、余一見之後、豪其推獎、未一歲、竟臥病不起、悲夫、詩多散逸、因是爲余傳三首、謹載存以酬其知、書適云、蕭然水竹居、鏡與世塵疎、鄰客分家釀、村翁送野蔬、晚餐聊當肉、緩步不須輿、無事誰能似、閑雲自卷舒、幽居雜咏云、半畝小園成、趣宜窓間睡、足拽筇枝、新荷出水大如掌、瘦笋穿籬細似錐、半榻茶聲烟未散、一欄松影日初移、病來倍覺添疎懶、無意名山伴采芝、懶性從來不理家、紋楸綠綺是生涯、數竿修竹眞堪畫、一脈清泉恰可茶、坐愛茅簷添燕壘、行看藥圃散蜂衙、學閑還是身多事、掃徑澆花業日加。

藤堂良道字子基、號龍山、搦詩袖中見訪、余

涎已まさらしむ、余一見の後、其の推獎を蒙る、未だ一歲ならず、竟に病に臥して起たず、悲いかな、詩多く散逸す、因是余が爲に三首を傳ふ、謹んで載存して、以て其の知に酬ゆ、適を書するに云ふ、蕭然たる水竹の居、鏡に世塵と疎なり、鄰客、家釀を分つ、村翁野蔬を送る、晚餐、聊肉に當つ、緩歩輿を須ひず、無事誰か能く似たる、閑雲自ら卷舒、幽居の雜咏に云ふ、半畝の小園趣を成して宜し、窓間睡足りて筇枝を拽く、蕩荷水を出で、大ニ掌の如し、瘦笋籬を穿つて細錐に似たり、半榻の茶聲烟未だ散ぜず、一欄の松影日初めて移る、病來倍、覺ゆ疎懶を添ゆる、緑を、意なし名山采芝に伴ふに、懶性從來家を理せず、紋楸綺是れ生涯、數竿の修竹眞に畫くに堪へたり、一脈の清泉、恰茶に可なり、坐して愛す茅簷燕壘を添ゆるを、行て看る藥圃、蜂衙を散ずるを、閑を學んで還て是れ身多事、徑を掃ひ花に澆ぎ業日に加はる。

藤堂良道字は子基、龍山と號す、詩を袖中に搦めて訪は

讀之欽爲名手、咏燕云、年年春社約無違、舊  
 壘偏能認得歸、池上芹泥朝雨濕、簾間柳絮  
 午風微、昭陽殿裏人何在、王謝堂前事已非、  
 終日呢喃慰吾寂、不妨汚盡讀書幃、秋夜云、  
 銀河斜轉欲三更、月洗庭園夜色清、怪底奇  
 香來撲鼻、林間蕉樹有花生、其尊人君山先  
 生、其祖巴陵先生詩、毛聖民皆已收入、采風  
 集中、昇平日久、武弁之家、亦得逞才詩壇、真  
 可美也。

余在伊勢、大抵居北、故舉其人、多畧於南、北  
 勢最著者、藏書則高果亭吉、好事則伊筵亭  
 伴、二亭皆嘗爲余臯伯通、果亭有園池之勝、  
 其間起書樓、糊帙萬卷、井然倫次、清致殊可  
 喜、筵亭尤愛人物、客之東西上下者、來投刺

る、余之れを讀んで名手たるを欽す、燕を咏するに云ふ、  
 「年々春社、約違ふ無し、舊壘偏に能く認め得て歸る、池上  
 の芹泥朝雨濕ひ、簾間の柳絮午風微なり、昭陽殿裏人何  
 んか、在る、王謝堂前事已に非無り、終日呢喃吾が寂を慰  
 す、妨げず讀書幃を汚し盡すを、秋夜に云ふ、銀河斜に轉  
 じて三更ならんと欲す、月、庭園を洗ふて夜色清し、怪底  
 す奇香の來りて鼻を撲つを、林間の蕉樹花の生するあり、  
 其尊人、君山先生、其祖、巴陵先生の詩、毛聖民、皆已に  
 收めて采風集中に入る、昇平日久し、武弁の家、亦才を詩  
 壇に逞することを得、眞に美とすべきなり。

余、伊勢に在り、大抵北に居る、故に其人を擧ぐる、多く南  
 に略す、北勢に著る者、藏書は則高果亭吉、好事は則伊  
 筵亭伴、二亭皆嘗て余が臯伯通たり、果亭、園池の勝あり、  
 其間書樓を起す、糊帙萬卷、井然として倫次す、清致殊に  
 喜ぶべし、筵亭尤人物を愛す、客の東西上下する者、來り  
 て刺を其門に投ずれば、必、紙筆を置て以て其伎を要す、  
 賢と無く愚と無く、相對して驩然たり、故に其蓄ふる所、

其門必置紙筆以要其伎、無賢無愚、相對騷然、故其所蓄古今書畫、殆不勝鴻富、筵亭一兒名秀、距今六七年、尙在、誓齋、近日筵亭書來云、兒已十三矣、頗喜讀書吟詩、見寄示其山行一絕云、山深村遠見人稀、一徑穿雲度翠微、籜葉無風聲、荻葉撥鞭收豎出林歸、其名爲秀、詢不虛也。

迪齋春晴出遊云、村近一牛鳴、春雲始放晴、溪鶯如案譜、野草不知名、酒旆分林出、茶烟隔竹生、有花何處好、只趁蝶蜂行、初冬夜坐云、獨坐小齋中、竹爐星火紅、燈昏窓有月、葉脫樹無風、人定寒先動、酒醒愁復攻、苦吟全讓、我階下、斷鳴蟲、眞楊陸也。

紀國源衡字襄平、號春川、著作太富、丙寅歲

古今の書畫、殆鴻富に勝へず、筵亭一兒、名は秀、今を距今こと六七年、尙誓齋に在り、近日筵亭書來りて云ふ、兒已に十三、頗讀書吟詩を喜ぶ、其山行の一絶を寄せらる、云ふ、「山深く村遠くして人を見ること稀なり、一徑雲を穿ちて翠微を度る、籜葉風なくして聲、荻々、鞭を撥む牧豎林を出で、歸る、其名を秀と爲す、詢に虚からざるなり。

迪齋春晴出遊に云ふ、村近くして一牛鳴く、春雲始めて晴を放つ、溪鶯は譜を案するが如く、野草は名を知らず、酒旆林を分ちて出で、茶烟竹を隔て、生ず、花あり何れの處か好き、只、蝶蜂を趁ふて行く、初冬夜坐に云ふ、獨坐小齋の中、竹爐星火紅なり、燈昏くして窓に月あり、葉脱して樹に風な、人定まりて寒先づ動き、酒醒めて愁復攻む、苦吟全く我に讓る、階下鳴蟲を斷つ、と眞に楊陸なり。

紀國の源衡字は襄平、春川と號す、著作太富言む、丙寅の

掌教松阪學院、余偶理舊篋、得其手書、朝熊  
 嶽五排云、僂僂攀躋苦、羊腸記、幾程、青岑收、  
 宿霧、玉洞積寒雲、磴道懸、巖泉滴且鳴、  
 豈無濟勝具、聊遂好奇情、老樹無知歲、奇花  
 不辨名、風迴雲脚斷、水洗石根清、家倚曠、航  
 險路、因斧鑿、平嵐滋、常欲滴、苔滑故難行、佛  
 坐龍圍繞、僧扉犬送迎、金丹尋道士、碧顆拾  
 星精、山亞峰聲企、海環帆鳥征、晴川綠、練帶、  
 綠野畫棋枰、豁達觀何極、蒼茫句未成、薜蘿  
 如可結、吾欲換、簪纓、何等莊雅、頃又見、示春  
 盡新作云、東園春事太忽忽、陰雨才晴還暴  
 風、箕、斂群芳一時盡、李花、白杏花紅、亦復  
 可愛。

柴允升字東霞、號碧海、栗山先生之長子、余

歲松阪の學院に掌教たり、余偶、舊篋を理して、其手書、朝  
 熊山の五排を得たり、云ふ、僂僂攀躋、苦み、羊腸幾程を記  
 す、青岑、宿霧を收め、玉洞、寒雲を積む、磴道懸けて還曲る、  
 巖泉滴りて且鳴る、豈、濟勝の具無らんや、聊、好奇の情を  
 遂ぐ、老樹歳を知ること無く、奇花名を辨ぜず、風迴りて  
 雲脚斷え、水洗ふて石根清し、家は曠、航の險に倚り、路は  
 斧鑿に因りて平なり、嵐滋して常に滴らんと欲す、苔滑  
 にして故に行き難し、佛坐龍圍繞し、僧扉犬送迎す、金丹  
 道士を尋ね、碧顆、星精を拾ふ、山亞して峰聲企し、海環り  
 て帆鳥征す、晴川、練帶を綴らし、綠野、棋枰を畫す、豁達觀  
 何んぞ極らん、蒼茫句未だ成らず、薜蘿如し結ぶ可くん  
 ば、吾れ簪纓に換えんと欲す、と、何等の莊雅ぞ、頃ごろ又  
 春盡の新作を示さる、云ふ、東園の春事太だ忽々、陰雨才  
 かに晴れて、還た暴風、群芳を箕斂して、一時に盡く、李花  
 は白を移し、杏花は紅、と、亦復た愛す可し。

柴允升、字は東霞、碧海と號す、栗山先生の長子、余始め京



始在京相共筆硯、後碧海徒居阿波、余遊歷日久、不相見者垂二十年、今年再得會晤、豈非天假之緣耶、一日泛舟牛島、一道路故、悲喜交至、碧海賦一律云、去向橋頭買小船、輕風嫩日弄清妍、抽身脆管嬌絃底、洗眼紛紅駭綠邊、杯酒笑談今有日、江湖流落昨非天、窓間絕喜無塵到、壹永偏宜說廿年、碧海今專攻經史、而罕作韻語、余獨愛其題李白圖云、放歌宮錦謫仙才、磊落豪情三百杯、一事只留千載恨、匡山頭白不歸來、極爲清拔、丁巳歲、余病疥疔、臘月不起、中村進甫者、居最相近、日來慰問、屢蒙饋贈、余感其意、至今不忘、進甫今爲昌平學小吏、頗好吟詩、驟雨云、夕雨跳珠小池上、蘋花荇葉水橫縱、兒童

に在りしとき、筆硯を相共にす、後、碧海徒りて阿波に居る、余遊歴日久し、相見ざる者二十年に垂とす、今年再び會晤を得、豈、天假の緣に非ざらんや、一日舟を牛島に泛ぶ、一道路故を道ふ、悲喜交、至る、碧海一律を賦して云ふ、去りて橋頭に向つて小船を買ふ、輕風嫩日清妍を弄す、身を抽んづ脆管嬌絃の底、眼を洗ふ粉紅駭綠の邊、杯酒笑談今、日あり、江湖流落、昨、天に非ずや、窓間絶喜ぶ塵の到ることなきを、壹永くして偏に宜し廿年を説くに、碧海、今専ら經史を攻む、而して韻語を作ること罕なり、余獨愛す、其李白の圖に題るすに云ふ、放歌宮錦謫仙の才、磊落の豪情三百杯、一事只留む千載の恨、匡山頭白くして歸り來らず、極めて清拔と爲す。

丁巳の歲、余、疥疔を病む、月を躑えて起たず、中村進甫といふ者、居最相近し、日、に來りて慰問す屢、饋贈を蒙る、余其意に感じ、今に至るまで忘れず、進甫、今昌平學の小吏たり、頗、吟詩を好む、驟雨に云ふ、夕雨、珠を跳らす小池の上、蘋花荇葉水橫縱、兒童也た是れ癡談甚し、只、怕

也是癡甚、只怕金魚化赤龍、其他句云、楓葉孤村晚、菊花蕭寺秋、榴花紅照水、蕉葉綠成林、溪客烟昏初罷釣、鄰翁月上未收棋、皆佳。

緣陰告余云、吾黨攻訓詁之學、旁能詩者、今得三人、澤景秀字子有、藤孝誼字子孝、關忠光字量平、藥籠中亦似不應少此種物、余爲點頭、已而三人見投詩章、澤睡起云、睡起家童未送茶、庭陰小立日西斜、翩翩蛺蝶籬角、倦眼看來喚作花、藤春夜云、促漏丁丁夜正中、臥聞春雨滴簾櫺、細衾軟暖伸雙脚、不比寒宵曲似弓、暮春山園云、午睡初醒欲夕、險山園曳杖弄風光、昨來積雨添新趣、穆得松花滿地黃、關夜雨云、占盡茅簷點滴聲、小

る金魚の赤龍に化せんことを、其他の句に云ふ、楓葉孤村の晩、菊花蕭寺の秋、榴花、紅、水を照し、蕉葉、綠、林を成す、溪客烟昏くして初めて釣罷む、鄰翁月上りて未だ棋を收めず、皆佳なり。

緣陰、余に告げて云ふ、吾が黨訓詁の學を攻めて、旁ら詩を能くする者、今三人を得たり、澤景秀字は子有、藤孝誼字は子孝、關忠光、字は量平、藥籠中、亦應に此種の物を少くべからざるに似たりと、余爲に點頭す、已にして三人詩章を投ぜらる、澤の睡起に云ふ、睡起家童未だ茶を送らず、庭陰小立、日西に斜なり、翩翩たる蛺蝶、籬の角、倦眼看來りて喚んで花と作す、藤の春夜に云ふ、促漏丁々として夜正中す、臥して聞く春雨の簾櫺に滴るを、細衾軟暖、雙脚を伸ばす、比せず寒宵曲げて弓に似たるに、暮春山園に云ふ、午睡初めて醒めて夕陽ならんと欲す、山園杖を曳いて風光を弄す、昨來の積雨新趣を添ふ、穆し得たり、松花滿地の黃、關の夜雨に云ふ、占盡茅簷點滴の聲、小窓若を吸りて清に堪へず、心頭一洗す、繁華の事、始めて省す、同參夜雨の情、

窓隙茗不堪情、心頭一洗繁華事、始省同參  
夜雨情。

詩令人笑者必佳、子有咏茄云、紫茄味美勝  
梁肉、九夏三秋日佐餐、他到老成人益賞、兀  
頭恰作者儒看、真可捧腹、然宋人咏茄詩云、  
青紫皮膚類宰官、光圓頭腦作僧看、如何緇  
俗偏同嗜、入口元來總一般、古人諧謔如此、  
未可獨笑子有也。

黑崎貞孝字子順、挾一詩卷特來見訪、自云、  
詩佛同里、余意謂已生佛國、其詩必不凡、讀  
之果然、松蘿云、積雨晴時、葦子新、酥莖入口、  
勝吳蕻、莫將真率山家味、分與城中肉食人、  
蟋蟀云、憶昨城中爲客日、雕籠盛得聽蟲聲、  
歸來更覺田園樂、蟋蟀籠頭取次鳴。

詩人をして笑はしむる者は必佳なり、子有茄を咏じて  
云ふ、紫茄味美にして梁肉に勝れり、九夏三秋日に餐を  
佐く、他、老成に到りて人益賞す、兀頭恰も晉儒の看を  
作す、真に捧腹す可し、然れども宋人茄を咏する詩に云  
ふ、青紫の皮膚類に類す、光圓の頭腦僧と作して看る  
如何ぞ緇俗偏に同じく嗜む、口に入れば元來總て一般、  
古人諧謔此の如し、未だ獨、子有を笑ふ可からざるなり。

黑崎貞孝、字は子順、一詩卷を挾んで特に來りて訪はる、  
自ら云ふ、詩佛の同里と、余意に謂ふ、已に佛國に生る其  
詩必凡ならずと、之れを讀むに果して然り、松蘿に云ふ、  
「積雨晴るゝ時葦子新なり、酥莖口に入りて吳蕻に勝れ  
り、真率山家の味を將て、城中肉食の人に分與すること  
莫れ、蟋蟀に云ふ、憶ふ昨城中客と爲りし日、雕籠盡り得  
て蟲聲を聽く、歸來更に覺ふ田園の樂しきを、蟋蟀籠頭  
取次に鳴く。」

詩佛索畫於第五隆寄七古云、南宗畫家論  
 妙手、海內唯推第五隆、不知爲我許寫否、千  
 里寄書遠煩公、不願落墨畫花卉、不願設色  
 畫禽蟲、只願淡筆以渲法、收拾江山極精工、  
 魚莊鱗舍參差接、茅屋柴門屈曲通、夾門疎  
 松五六本、擁屋脩竹兩三叢、雲壓山頭天欲  
 雪、潮吞浦口波生風、漁艇歸炊洲渚外、燈隔  
 蘼蕪烟淡籠、此景詩中妄想耳、不知果能入  
 畫中、我住城市塵滿履、九轉金丹治無功、觀  
 畫愈病古有例、倩君妙筆一洗空、君且莫惜  
 爲我寫、寫成須速付郵筒、寫到斷橋流水處、  
 梅邊宜著簡詩翁、偶讀蓮坡詩話、有越僧索  
 畫於沈石田一絕云、寄將一幅剡溪藤、江面  
 青山畫幾層、筆到斷崖泉落處、石邊添箇看

詩佛、畫を第五隆に索め、七古を寄せて云ふ、南宗の畫家  
 妙手を論ず、海内唯推す第五隆、知らず我が爲に寫すこ  
 とを許さんや否や、千里書を寄せて遠く公を煩はす、願  
 はす落墨花卉を畫くを、願はず設色禽蟲を畫くを、只願  
 くは淡筆渲法を以て、江山を收拾して精工を極む、魚莊  
 鱗舍參差として接し、茅屋柴門屈曲通す、門を夾む疎松  
 五六本、屋を擁する脩竹兩三叢、雲は山頭を壓して天、雪  
 ならんと欲し、潮は浦口を吞んで波風を生ず、漁艇歸り  
 炊ぐ洲渚の外、燈は蘼蕪を隔て、烟淡く籠む、此景詩中  
 の妄想のみ、知らず果して能く畫中に入らんや、我、城市  
 に住して塵、履に滿つ、九轉の金丹治するに功なし、畫を  
 觀て病を愈す古、例あり、君が妙筆を倩ふて、一に洗空せ  
 ん、君且つ惜む莫れ我が爲に寫せ、寫し成りて須く速に  
 郵筒に付すべし、寫して斷橋流水の處に到りて、梅邊宜  
 しく箇の詩翁を著くべし、偶、蓮坡詩話を讀むに、越僧畫  
 を沈石田に索むる一絶あり云ふ、一幅剡溪の藤を寄せ  
 將て、江面の青山幾層を畫く筆、斷崖泉落る處に到りて、  
 石邊に箇の雲を看るの僧を添へよ、と意正に相同じ、但、  
 詩佛は則善く巨矛を舞はし、越僧は、則寸錢、人を打す。

雲僧意正相同、但詩佛則善舞、巨矛、越僧則寸鐵打人。

桐生詩人、除淡齋外、有井文房、宇穎父、號雨亭、余曩覓其詩、適去在京、不可得、今年歸故里、抄其京中諸作見寄、東山晚興云、歌舞東山醉未歸、層樓危閣靄餘暉、元知勝地真難得、況是佳期動易違、座裏螺鈿山色斂、簾明翡翠蠟烟飛、不須詩賦淡生活、玉盞縱橫打妓圍、秋日遊高臺寺云、繡榻哦詩日易斜、秋光一味在僧家、暮風吹亂紅瓔珞、開遍滿庭天竺花、清新超雋、自然成家。

島棕軒、鴨東雜咏二十首、詩極清婉、雖有繼者、竟不能出其右、今錄其五云、陂陀山色翠如流、花氣晴薰晚更浮、最是家家繡簾影、引

桐生の詩人、淡齋を除くの外、井文房は穎父あり、雨亭と號す、余曩に其詩を覓む、適去りて京に在り、得べからず、今年故里に歸り、其京中の諸作を抄して寄せらる、東山の晚興に云ふ、歌舞東山醉ふて未だ歸らず、層樓危閣餘暉靄たり、元知る勝地眞に得難きを、況や是れ佳期動もすれば違ひ易し、座裏くして螺鈿山色斂まり、簾明にして翡翠蠟烟飛ぶ、須ひず詩賦淡生活、玉盞縱橫、妓圍を打す、秋日高臺寺に遊ぶに云ふ、繡榻詩を哦して日斜なり易し、秋光一味僧家に在り、暮風吹き亂す紅瓔珞、開き遍し滿庭の天竺花」と、清新超雋、自然に家を成す。

島棕軒、鴨東雜咏二十首、詩、清婉を極む、繼ぐ者ありと雖、竟に其右に出づること能はず、今其五を録す、云々、陂陀の山色翠流るゝが如し、花氣晴薰晚更に浮ぶ、最是れ家々繡簾の影、人の春夢を引て樓頭に到る、繡花を著けず

人春夢到樓頭不著藕花不受舟樓樓住在  
岸東頭只應萬斛胭脂水瀉作潺湲一道流  
春風簾外賣花聲睡起佳人妝未成笑袖金  
錢街上去踉蹌漆屐拖來輕新瓜上市入清  
秋翻暑殭人猶未收盤中剖得蒼龍卵幾片  
紅冰凝不流樓燈無影水聲饒一片殘蟾在  
柳梢小女十三能慣客不辭風露送過橋

老友藥桃宜報知棕軒今僑居根津繼爲致  
寄懷二律詩云自憐落魄老生涯占得頽茅  
類鷓鴣觸物易揮懷舊淚逢人先誦解嘲詞  
雲埋古刹鐘來遠雪滿疎松月上遲不恨寒  
厨鮓菜少幾回下酒讀君詩鶴夢空林覺每  
遲癡心久已許君知苦吟徒費殘生力補過  
深欽一字師近水幽居須自愜鄰山冷巷頗

舟を受けず、樓々住して岸の東頭に在り、只應に萬斛胭脂の水瀉いで潺湲一道の流と作りしなるべし、「春風簾外、花を賣る聲、睡起の佳人妝未だ成らず、笑て金錢を袖にして街上に去る、踉蹌の漆屐拖き來りて輕し」、「新瓜市に上り、清秋に入る、剩暑人を殭して猶未だ收まらず、盤中剖き得たり蒼龍卵、幾片の紅冰凝りて流れず」、樓燈影無く水聲饒し、一片の殘蟾柳梢に在り、小女十三能く客に慣る、風露を辭せず送りて橋を過ぐ。

老友藥桃宜報知す、棕軒、今根津に僑居す、繼で爲に寄懷の二律の詩を致す、云ふ、「自ら憐む落魄生涯を老ゆるを、頽茅を占め得て鷓鴣に類す、物に觸れて揮ひ易し懷舊の淚、人に逢ふに先づ誦す解嘲の詞、雲は古刹を埋めて鐘來ること遠し、雪は疎松に滿ちて月上ること遅し、恨みず寒厨、鮓菜の少きを、幾回か酒を下して君が詩を讀む、「鶴夢空林覺むること毎に遲し、痴心久しく已に君の知を許す、苦吟徒に費す殘生の力、過を補ふて深く欽す一字の師、水に近き幽居須く自ら愜ふべし、山に鄰る冷巷頗相宜し、若し能く雪裡來りて興に乗せば門、銀沙を掃ふ

相宜、若箇雪裡來、乘輿門掃銀沙、何敢辭、前年詩話所收、其竹夫人詩中、末路歎、數字、原作悔字、余爲改之、所謂一字師者、蓋指此也、棕軒又嘗有見、寄一絕云、憶在江樓賦、竹枝、滿筵紅粉受、君知風流元屬王之渙、傳得新聲更有誰、亦是知己之言、

竹庵有婢、字桃面、有慧性、特善女工、余欲贖以爲小妻、未諧而亡、乃哭以詞云、板橋霜、怎生見、現便消亡、人世無憑、情多最怕、易成傷、往事在目前、旋移針線、自商量、不知著甚、噴意、紅絨嚼盡、唾紗窓、有情無情、把眉兒蹙、只麼惱、殺人腸、司空會見慣、渾說管、劓却勝、姬羨、病來、掩暖容光、霧鬢鬆絲、綠不復理、殘粧、玉纖瘦、那勝、金斗、懶、髮衣裳、五更風、驀地恣

何ぞ敢て辭せん、前年詩話に收むる所、其竹夫人の詩中、「末路の歎」の歎の字、原と悔の字に作る、余爲に之れを改む、謂はゆる、一字の師とは蓋此を指すなり、棕軒又嘗て寄せらるゝ一絶あり云ふ、憶ふ江樓に在りて竹枝を賦す、滿筵の紅粉君が知を受く、風流元と王之渙に屬す、新聲を傳へ得るは更に誰か有る、と、亦是れ知己の言、

竹庵婢あり、字は桃面、慧性あり、特に女工を善す、余贖ふて以て小妻と爲さんと欲す、未だ諧せずして亡す、乃哭するに詞を以てして云ふ、「板橋の霜、怎生ぞ現を見て便ち消亡す、人世憑るなし、情多くして最怖る傷を成し易きを、往事目前に在り、旋針線を移して自ら商量す、知らず甚の噴意を著す、紅絨嚼み盡して紗窓に唾す、有情無情眉兒を把りて蹙す、只麼人腸を惱殺す、司空會て見て慣れ、渾て管劓、説く、卻て姬妾に勝れり、病來掩暖たる容光、霧鬢鬆絲、復殘粧を理せず、玉纖瘦す、那ぞ金斗に勝へん衣、裳を脱すに懶し、五更の風、驀地猖狂を恣にし、得奈ともするなし、李仆れ桃僵る、心消遣し難し、此恨誰か

得猖狂、無奈李仆桃僵、心難消遣、此恨誰知、  
 驚雲歸去高唐、一面菱花鏡、青銅斑點、猶  
 剩脂香、何不留婦娥影、朦朧無色、向篋中藏、  
 自家一點癡腔、西樓月落、酒醒燈花冷情之  
 所鍾、亦何能已、惆悵那處去尋芳、心諾空負  
 無中債、薄倖杜牧、夢也茫茫、雲愁海思、許多  
 懊惱、淚落成雙。

涌金門外柳如金、三日不來成綠陰、折取一  
 枝城裡去、教人知道是春深、顧嗣立元詩選  
 爲貢性之詩、錢謙益列朝詩以爲日本貢使  
 作、未知孰是、味其詞意、當屬性之作。

謝在杭云、嘗爲人作志傳矣、一字未獲、必祈  
 改焉、嘗預修郡志矣、世官不入名賢、不已也、  
 娓娓相勸不已、余作詩話、亦不能無慨焉、有

知らん、驚雲歸り去る高唐、一面菱花の鏡、青銅斑點、猶  
 脂香を剩す、何ぞ婦娥の影を留めざる、朦朧色なく、篋中  
 に向つて藏む、自家一點の癡腔、西樓月落つ、酒醒めて燈  
 花冷なり、情の鍾まる所、亦向んぞ能く已まん、惆悵す那  
 の處にか去りて芳を尋ねん、心諾空しく負きて償ふに由  
 なし、薄倖の杜牧、夢也茫茫、雲愁海思、許多の懊惱、淚落  
 ちて雙を成す。

涌金門外、柳金の如し、三日來らず綠陰を成す、一枝を折  
 取して城裡に去る、人をして是れ春深を知道せしむ、と  
 顧嗣立の元詩選に貢性之の詩と爲し、錢謙益の列朝詩に  
 以て日本の貢使の作と爲す、未だ孰れか是なるを知ら  
 ず、其詞意を味ふに、當に性之の作に屬す可し。

謝在杭云、嘗て人の爲に志傳を作る、一字未だ獲せざ  
 れば必改を祈む、嘗て郡志を修するに預る、世官名賢に  
 入らざれば已まざるなりと、娓娓として相勸りて已ま  
 ず、余、詩話を作る、亦慨するなきこと能はず、句あり云々、



五山堂詩話卷四  
終

日本詩話叢書

句云、弄筆非爲、倭著書却近諛。

三六

筆を弄す倭を爲さんと化せず、書を著して卻て諛に近し。

## 五山堂詩話卷五

娛庵居士著

近時京中名碩、前有洪園、繼有栲亭、洪園雖以經術自任、其說係一家私言、其所長却在文章上、至氣局闊大、韻度卓越、則非復今日俗儒之流矣、栲亭淹通博雅、長于考據、亦曠世之才也、二家之詩、皆出緒餘、然其集已刊、則不容不商榷焉、大抵洪園詩、雄大華贍、其流失於笨、其高者如「過雨湖南草、斜陽越北山、林禽聽屢換、澗蕁雨還芳、魚躍池光動、鹿鳴山色幽、落日天邊樹、炊烟山下村、剪燈金錯落、頽酒玉傀俄、薄酒嘗春控、困棋覆昨圍、

近時京中の名碩、前に洪園あり、繼いで栲亭あり、洪園、經術を以て自ら任ずと雖、其說、一家の私言に係る、其所長は卻て文章の上になり、氣局闊大、韻度卓越に至りては、則復今日俗儒の流に非ず、栲亭は、淹通博雅、考據に長ず、亦曠世の才なり、二家の詩、皆緒餘に出づ、然れども其集已に刊す、則商榷せざる容からず、大抵洪園の詩は、雄大華贍、其流、笨に失す、其高き者は、「過雨湖南の草、斜陽越北の山、林禽聽て屢、換ふ澗蕁雨ふりて還て芳し、魚躍りて池光動き、鹿鳴いて山色幽なり、落日天邊の燈、炊烟山下の村、燈を剪りて金錯落、酒に頽して玉傀俄、薄酒、春控を嘗め、困棋、昨圍を覆す、詩書會て奮はんことを思ふ、筋力老來微なり、この諸句の如き、皆眞に少陵に逼る、而して其下なる者、直率平淺、殊に人意に慄らず、栲亭の詩は、縝密委婉、其流、滯に失す、下なる者も亦皆誦す可

詩書曾思奮筋力老來微諸句皆逼真少陵而其下者直率平淺殊不懽人意栲亭詩縝密委婉其流失於澁下者亦皆可誦而求其超脫什無一二但雷震近鄰云銀竹千條打草扉陰雲如夜電光飛霹靂一聲天貼地驚龍欬捧火珠歸一氣呵成精神流動雪意云篔溜乾不響徑竹叩風扉時聽行人語月陰綉鏡飛亦爲渾成譬之佳人淇園詩如千金小姐自然品高恨有些呆氣栲亭詩如曲中名姬雖嬌利可愛不免粧腔傲態偶有竇二家集索品隴者故提出而竝論

淇園紫驢馬云朝跨紫驢行踏春郊花看遍小平津歸來欲及朱城暮綉髮風生柳陌塵情態如畫自非諳京中況味難與論此詩之

し、而して其超脫を求むるに、什に一二なし、但、雷近鄰に震するに云ふ、銀竹千條、草扉を打つ、陰雲夜の如く電光飛ぶ、霹靂一聲天、地に貼し、驚龍欬ち火珠を捧げて歸ると一氣呵成、精神流動す、雪意に云ふ、篔溜乾いて響かず、徑竹、風扉を叩く時に行人の語を聽けば、月陰りて綉鏡飛ぶ、と、亦渾成と爲す、之れを佳人に譬ふるに、淇園の詩は千金の小姐の如し、自然に品高し、恨らくは些の呆氣あり、栲亭の詩は、曲中の名姬の如し、嬌利、愛す可しと雖、粧腔傲態を免れず、偶々二家の集を竝して品隴を案ぶる者あり、故に提出して竝論す。

淇園の紫驢馬に云ふ、朝に紫驢に跨りて行、春を踏む、郊花見て遍し、小平津、歸來、朱城の暮に及ばんと欲す、綉髮風は生ず、柳陌の塵、情態畫の如し、京中の況味を諳んずるに非ざるよりは、與に此詩の妙を論じ難し。

詩人不可無正大之氣、乃如老杜忠憤憂國、一字一淚、此則無論已、下至韓蘇范楊、義膽所出、詞氣峻贖、讀之可以敦薄立懦矣、吾人時遭昇平、身在草莽、千句萬篇、不過嘲弄風月、然一點此氣亦不可欠也、豈可輕薄媚嫵、與諛歌者流比而不羞哉。

子厚之於任文、意在攀附以行己也、所謂枉尺而直尋者也、放翁之於侂冑、身被牽挽以徇人也、所謂同流而合汚者也、二公詩文、與日月爭光、尙自貽茲累、名之不可全者如此、今日文士、有氣者、趁熱求用、無氣者、苟且雷同、無二公之棄、而有二公之累、瓦而不全、吾未見其可也。

詩人は正大の氣なくんばあるべからず、乃、老杜の忠憤國を憂ひ、一字一淚の如き、此れ則論無きのみ、下、韓蘇范楊に至るまで、義膽の出す所、詞氣峻贖之れを讀んで以て薄を敦くし懦を立たしむ可し、吾人、時、昇平に遭ひ、身、草莽に在り、千句萬篇、風月を嘲弄するに過ぎず、然れども一點此氣亦欠く可からざるなり、豈、輕薄媚嫵、諛歌者流と比して羞ぢざる可けんや。

子厚の任文に於ける、意、攀附して以て己を行ふに在るなり、謂はゆる尺を枉げて尋を直ふする者なり、放翁の侂冑に於ける、身、牽挽せられて以て人に徇ふ、謂はゆる流に同して汗に合する者なり、二公の詩文、日月と光を争ふ、尙自ら茲の累を貽す、名の全くす可からざる者此の如し、今日の文士、氣ある者は、熱を趁ふて用を求め、氣なき者は、苟且雷同す、二公の棄無くして、而して二公の累あり、瓦にして而して全からざる者、吾未だ其可なるを見ざるなり。

誠齋集、紀各年詩、以甲子係首篇題上、歷歷可徵、宋史本傳曰、開禧元年、召復辭、明年卒、年八十三、按、荆溪集、戊戌下感秋詩云、今歲五十二、戊戌、是淳熙五年、推至開禧二年、合年八十、侂胄以三年誅、公卒在誅侂胄之前、則其曰二年卒者、不乖、而曰年八十三者、誤、又書李顯忠事、與史不合、大抵宋史蕪穢、不可憑信、依家乘而得其實者多矣。

蘭庭飯田侯、韓爰字景和、木芙蓉極言、公儒雅、延余入謁、公爲政之暇、詩出新裁、春曉閑步云、疎鐘響、斷散林鴉、吟杖先移、野水涯、殘影暫留、山上月、暗香時動、霧中花、松杉陰合、疑無路、雞犬聲幽、知有家、衣袖不妨行露濕、一生痼疾在、煙霞境、致清遠、有風騷之旨、使

誠齋集、各年の詩を紀す、甲子を以て首篇の題上に係く、歴々後す可し、宋史本傳に曰、開禧元年、召されて復た辭す、明年卒す、年八十三と、按するに、荆溪集、戊戌の下、秋を感ずる詩に云ふ、今歲五十二、戊戌と、是れ淳熙五年より推して開禧二年に至る、合に年八十なるべし、侂胄三年を以て誅せらる、公の卒するは侂胄を誅するの前に在り、則其二年卒すと曰ふ者は乖かず、而して年八十三と曰ふ者は誤る、又李顯忠の事を書する、史と合はず、大抵、宋史は蕪穢にして、憑信す可からず、家乘に依りて其實を得る者多し。

蘭庭飯田侯、諱は爰字は景和、木芙蓉極めて公の儒雅を言ふ、余を延きて入りて謁せしむ、公爲政の暇、詩、新裁を出だす、春曉閑歩に云ふ、疎鐘響、斷えて林鴉散す、吟杖先づ移す、野水の涯、殘影暫く留む、山上の月、暗香時に動く、霧中の花、松杉陰合して踏なきかと疑ひ、雞犬聲幽にして家あるを知る、衣袖妨げず行露の濕ふを、一生の痼疾は烟霞に在り、と、境致清遠、風騷の旨あり、讀者をして其貴を忘れしむ。

讀者自忘其貴。

芙蓉登富山、矚目云、祕景一傾爭得、怪龍宮是處隔塵寰、居然下瞰羣仙戲、無數浮來鼈背山、後二句、是一幅松島傳神、社日云、松膠新熟芋魁肥、笑語家家沸、竹扉、村犬慣知秋社散、殷動尾得醉人歸、後二句、是一幅自家傳神。

仕宦遊山、極又不便、呵殿之聲、既殺風景、冠裳之體、復難相跣、與人從者憚於遠涉、羽士僧衆、但欲速了、相率導引於常所、經行而止、在杭此言、極合今日宦況、竹所牧君、一年作監使、巡行京畿、余賦三絕句奉別、其一首云、使節西爲一歲留、名山石室日窮搜、橫中若遇蘭亭祕、君亦傷廉欲賺不、如亭亦在京師

芙蓉の富山に登る矚目に云ふ、祕景一傾争でか怪龍宮とを得ん、龍宮是の處塵寰を隔つ、居然として下瞰す羣仙の戲、無數浮び來る鼈背の山、後の二句、是れ一幅松島の傳神、社日に云ふ、松膠新に熟して芋魁肥えたり、笑語家々竹扉に沸く、村犬慣れて知る秋社の散ずるを、殷動に醉人に尾し得て歸る、後の二句は、是れ一幅自家の傳神。

仕宦の遊山、極めて又便ならず、呵殿の聲、既に殺風景冠裳の體、復た祖跣し難し、與人從者遠涉を憚り、羽士僧衆、但速に了るを欲す、相率ひて常所に導引して、經行して止むと、在杭が此言、極めて今日の宦況に合す、竹所牧君、一年、監使と作り、京畿を巡行す、余三絕句を賦して奉別す、其一首に云ふ、使節西、一歳の留を爲す、名山石室日に窮搜す、橫中若し蘭亭の祕に遇はと、君も亦廉を傷りて賺せんと欲するや不や、如亭亦京師に在りて調見す、自畫の山水の圖を獻じて其邊るを奉送す、係るに一絶を以てして云ふ、忽驛從を退けて杖を曳て行く、學び來る

謁見、獻自畫山水圖、奉送其還、係以一絕云、  
忽退騶從曳杖行、學來吟客一身輕、僕夫亦  
慣相公事、收得松間喝道聲、二詩透漏君心  
事、亦頗覺唐突。

梅所君諱成章、竹所之子、詩筆亦清、有夏日  
園中十詠、今錄其二、萱草云、嫩綠亭亭夏未  
深、淡黃鵝鶩破芳心、庭萱只道忘憂著、不爲  
吾儂療苦吟、新荷云、池頭雨過綠萍開、幾點  
荷錢水面堆、似爲醉人先作地、涼宵剪取碧  
筩杯、君家每夏日池上會飲、必用碧筩杯。

醉石與三詩友約遊梅園、會疾不赴、是日三  
人彷徨花下、俄有宮娃擁隊而至、內一人微  
吟扇上詩云、春風澹蕩暖烟凝、重到梅邊拄  
杖藤、憶得去年人日雪、寒侵吟帽髻生冰、三

吟客一身の輕きを、僕夫も亦相公の事に慣れ、收め得た  
り松間喝道の聲、と二詩君の心事を透漏す、亦頗唐突を  
覺ゆ。

梅所君諱は成章、竹所の子、詩筆亦清し、夏日園中十詠あ  
り、今其二を錄す、萱草に云ふ、嫩綠亭亭夏未だ深からず  
淡黃の鵝鶩芳心を破る、庭萱只道は憂を忘れ著すと、吾  
儂の爲に苦吟を療せず、新荷に云ふ、池頭雨過ぎて綠萍  
開く、幾點の荷錢水面に堆す、醉人の爲に先づ地を作す  
に似たり、涼宵剪取せん碧筩杯、君の家、夏日池上に會飲  
する毎に、必碧筩杯を用ふ。

醉石、三詩友と梅園に遊ぶことを約す、疾に會ひて赴  
かず、是日三人花下に彷徨す、俄に宮娃あり、隊を擁して  
至る、内一人、扇上の詩を微吟して云ふ、春風澹蕩暖烟凝  
る、重ねて梅邊に到りて杖藤を拄ふ、憶得たり去年人  
日の雪、寒は吟帽を侵して髻、氷を生ず、三人傾聽す、便是

人傾聽、便是醉石舊日重到。杉田之作、相共  
 夸豔上美人檀口、余戲贈醉石以一絕云、梅  
 花絕唱扇頭詩、著意愛吟知是誰、却自人間  
 到天上、官溝亦有倒流時。

石川漁字釣甫號滄浪、寓昌平疊舍、亦以詩  
 來、余愛其夏初一絕云、暗綠蕩紅蝶意撩、滿  
 園柳絮雪離條、茶前飯後身無事、閑檢牽牛  
 抽稚苗。

丙寅舞馬之變、北山先生宅亦罹其厄、自春  
 徂夏、僑居于今戶橋北、不數月、買得金杉里  
 某氏別墅、徙而居之、墅之所在、地名竹堤、宗  
 祇紀行中、已見此名、蓋當祇時、只一脈驛路  
 而已、今則松門花徑、稻畦藕渠、儼然一名園  
 也、先生通今戶金杉、所得雜咏一百首、其門

れ醉石舊日重ねて杉田に到るの作なり、相共に美人の檀  
 口に上ることを夸豔す、余戲に醉石に贈るに一絶を以  
 てして云ふ、梅花の絶唱扇頭の詩、著意愛吟す知る是れ  
 誰ぞ、却て人間より天上に到る、官溝も亦倒流の時あり。

石川漁、字は釣甫、滄浪と號す、昌平疊舍に寓す、亦詩を以  
 て來る、余其夏初の一絶を愛す、云ふ、暗綠蕩紅蝶意撩す、  
 滿園の柳絮雪、條を離る、茶前飯後身無事、閑に檢す牽牛  
 の稚苗を抽るを。

丙寅舞馬の變、北山先生の宅も、亦其厄に罹る、春より夏  
 に徂き今戶橋北に僑居す、數月ならずして、金杉の里某  
 氏の別墅を買ひ得て、徙りて之れに居る、墅の在る所、地  
 竹堤と名づく、宗祇の紀行中、已に此名を見る、蓋祇が時  
 に當りて、只一脈の驛路のみ、今は則松門花徑、稻畦藕渠、  
 儼然たる一名園なり、先生今戶金杉に通じて、得る所の  
 雜咏一百首、其門生刻して以て流傳す、余獨其一を愛す、  
 云ふ、窓下近來何の讀む所ぞ、花譜に非ざるよりは是れ



生刻以流傳、余獨愛其一、云、窓下近來何所讀、自非花譜、是農書、經史塵封君莫怪、閑人急務在耕鋤、真實際也。

比來閩秀鍾于北山先生一家、先生之室、繡桃女史、善畫、弁翎、女弟子文姬號小窓、聰慧能詩、摘句云、梅子欲肥先釀雨、竹孫稍長不禁風、瓶花改換經句水、綿服成褫連夜寒、皆嫺雅可愛、故詩佛贈詩云、莫把清愁吟向天、人間謫墮有深緣、如今誰怪香薰骨、元是玉皇前殿仙、又有雲章、年纔過笄、極愛誦書、不願適人、亦奇女子也、先生絳帷講書、此二人每捧冊侍側、殆有南郡家風。

竹堤社十才子詩集、今又已入刊、先生序文、大抵取有婦人九人而已之語、立意、蓋以文

農書、經史塵封す君怪む莫れ、閑人の急務は耕鋤に在り、と、眞に實際なり。

比來閩秀北山先生一家に鍾まる、先生の室、繡桃女史、善く弁翎を畫く、女弟子文姬小窓と號す、聰慧詩を能くす、摘句に云ふ、梅子肥えんと欲して先づ雨を醸し、竹孫稍、長じて風に禁へず、瓶花改換す經句の水、綿服成褫す連夜の寒、と、皆嫺雅愛す可し、故に詩佛、詩を贈りて云ふ、『清愁を把りて吟じて天に向ふこと莫れ、人間の謫墮深緣あり、如今誰か怪まん香、骨に薰するを、元是れ玉皇前殿の仙、又雲章あり、年纔に笄を過ぐ、極めて書を誦することを愛す、人に適くことを願はず、亦奇女子なり、先生、絳帷書を講ず、此二人毎に冊を捧じて側に侍す、殆、南郡の家風あり。

竹堤社十才子詩集、今又已に刊に入る、先生序文、大抵婦人あり九人のみの語を取りて、意を立つ、蓋、文姬其一に居るを以てなり、謂はゆる九人とは、繡齋石井、篁村

姫居其一也、所謂九人者、繩齋石井耕、篁村  
 宮本鉉、涼舟山窪、鷺南海稻葉龍、嵩山中尾  
 濤、鶴堂鹽谷松、寒谷松井樵、百夢正田梓、儲  
 堂齋藤誠、是也、篇什太多、拾收不盡、姑摘對  
 句之尤者、鶴堂云、啼鶯花外寺、乳燕柳邊家、  
 涼舟云、門徑無心掃、莓苔盡意封、南海云、檐  
 鐸風初定、池蓮露尚香、寒谷云、蟲聲秋四壁、  
 松影月三更、繩齋云、雨後青山近、霜前綠橙  
 香、篁村云、閑慣詩情淡、貧知道味安、儲堂云、  
 風搖嫩柳眠初起、雨洗天桃醉未醒、嵩山云、  
 槐花歷亂風前雪、竹影紛披月下雲、吉夢云、  
 簾收竹影知雲過、池送荷聲判雨來、聲調各  
 佳、讀之有絲竹迭奏之想。

梁卯字伯鬼、美濃人、亦來參竹堤社、青年好

本、鉉涼舟山窪、鷺南海稻葉龍、嵩山中尾濤、鶴堂鹽谷松、寒  
 谷松井樵、吉夢正田梓、儲堂齋藤誠、是なり、篇什太多く拾  
 收し盡さず、姑く對句の尤なる者を選び、鶴堂に云ふ、啼  
 鶯花外の寺、乳燕柳邊の家、涼舟に云ふ、門徑掃ふに心  
 なし、苔苔意を盡して封す、南海に云ふ、檐鐸風初めて定  
 まり、池蓮露尚香し、寒谷に云ふ、蟲聲秋四壁、松影月三  
 更、繩齋に云ふ、雨後青山近く、霜前綠橙香し、篁村に云  
 ふ、閑は詩情の淡きに慣れ、貧にして道味の安きを知る、  
 儲堂に云ふ、風は嫩柳を搖かして眠初めて起き、雨は天  
 桃を洗ふて醉未だ醒めず、嵩山に云ふ、槐花歷亂風前の  
 雪、竹影紛披月下の雲、吉夢に云ふ、簾は竹影を收めて雲  
 の過ぐるを知り、池は荷聲を送りて雨の來るを判す、聲  
 調各、佳なり、之れを讀んで絲竹迭に奏するの想あり。

梁卯、字は伯鬼、美濃の人、亦來りて竹堤社に參す、青年、

詩、才冠等夷、嘗有煙花之失、幡然改節、自覺以嘗、號曰詩禪、去入京師、詩禪之名稍著、未二年、而復東來、出新詩見示、春寒云、雀噪梅園、雪欲飛、黃昏酒力醒來微、春寒欺我、真無謂、已典還債一領衣、題畫云、白雨山前洗夕陽、晚風吹散藕花香、誰家樓閣無人倚、閑却闌頭一夜涼、不料別來無幾、詩之進境如此、詩禪談、其鄉有閩秀細香、名多保、字祿之、書畫俱佳、最善墨竹、詩亦清婉、幸見收錄、余使誦、詩、曉起云、長庚如李一星明、獨先啼鴉、繞砌行、知道夜來微雨過、芭蕉殘滴兩三聲、冬夜云、永夜如年對短檠、睡書課了未三更、紙窓移上梅花月、撩得詩愁睡不成、真乃絕世聰慧、已而扣之、知是江馬蘭齋之女、余客

詩を好む、才等夷に冠たり、嘗て煙花の失あり、幡然として節を改め、自覺して以て嘗ふ、號して詩禪と曰ふ、去りて京師に入る、詩禪の名稍著はる、未だ二年ならずして、而して復東に來る、新詩を出だして示さる、春寒に云ふ、「雀、梅園に噪いで、雪飛ばんと欲す、黃昏酒力醒め來りて微なり、春寒我を欺く、真に謂れ無し、已に典して還た債ふ一領の衣、題畫に云ふ、白雨山前夕陽を洗ふ、晚風吹き散す、藕花の香、誰が家の樓閣ぞ人の倚る無し、閑却す闌頭一夜の涼、不料らざりき別來幾も無く、詩の境を進む此の如くならんとは。

詩禪談す、其郷に閩秀細香あり、名は多保、字は祿之、書畫俱に佳なり、最、墨竹を善くす、詩も亦清婉、幸に收錄せられよと、余其詩を誦せしむ、曉起に云ふ、長庚李の如く一星明なり、獨、啼鴉に先きだち砌を繞りて行く、知道す夜來微雨の過ぐるを、芭蕉の殘滴兩三聲、冬夜に云ふ、永夜年の如く短檠に對す、睡書課了して未だ三更ならず、紙窓移し上す梅花の月、詩愁を撩し得て睡成らず、真に乃絕世聰慧、已にして之れを扣きて、是れ江馬蘭齋の女なるを知る、余、伊勢に客たる日、蘭齋書を寄せて意を道ひ、且、養老澤の碑本を貽る、今尙篋中に護藏す、書して以て

伊勢日、關齋寄書道意、且貽養老澤碑本、今尙護藏篋中、書以表兩重因緣。

今年庚午夏、同北山先生、綠陰榕齋、可庵諸人、過王子金輪寺、寺主欣上人號混外、款接甚殷、請各留題詠、上人詩素湛深、稱今寥可出、近作見示云、藤牀石枕冷難眠、蒼雪翠雲環、檻前山僧日午肌生粟、便是人間六月天、余云、今日亭上景況、已被道破盡、吾輩措語都屬添足、不如擱筆、相權而罷、他日重以詩草見寄、晚興云、一聲野雉隔烟呼、晚倚軒窓吟與孤、景隕前林月未上、辛夷開處白糝糊、夜意云、孤燈油盡向殘更、趺坐疲時眼尙明、忽聽竹叢風雨過、不勝冷氣野狐鳴、清新拔俗、令人更爽然。

兩重の因縁を表す。

今年庚午の夏、北山先生、綠陰榕齋、可庵諸人と全しく、王子金輪寺に過ぎる、寺主欣上人、混外と號す、款接甚殷なり、各、題詠を留めんことを請ふ、上人詩素より湛深、今の寥可と稱す、近作を出して示さる、云ふ、藤牀石枕冷にして眠り難し、蒼雪翠雲檻前を環る、山僧日午、肌粟を生ず、便ち是れ人間六月の天、余云ふ、今日亭上の景況、已に道破し盡さる、吾輩語を措くも、都て添足に屬す、如かず筆を擱せんにはと、相權して罷む、他日重ねて詩草を以て寄せらる、晚興に云ふ、一聲の野雉、烟を隔て、呼ぶ、晚に軒窓に倚りて吟與孤なり、景曠くして前林月未だ上らず、辛夷開く處白糝糊、夜意に云ふ、孤燈油盡きて殘更に向ふ、趺坐疲るゝ時眼尙明なり、忽聽く竹叢風雨の過ぐるを、冷氣に露へす野狐鳴く、清新拔俗人をして更に爽然たらしむ。

昔人云、拾人遺編斷句、而代爲存之者、比之  
 葬、暴露之白骨、功德極大、欣上人寄一詩冊  
 曰、是亡友飯田生之作也、生名忠肅、字共懿、  
 板橋人、受業北山先生、清才不壽、墓木已拱、  
 顧采一首登詩話中、乃錄以發其幽光、晚秋  
 雜咏云、寒烟如海欲沉樓、坐對西風暗結愁、  
 何處遠砧天向暮、聲聲敲老數村秋、滿眸秋  
 色畫圖間、驛樹無邊紅已殷、只有清霜收不  
 盡、依然黛碧筑波山、

膳所轉方勝、字士善、號毅齋、余屢就其邸舍、  
 爲詩酒之歡、今夏歸國、書至云、別來無他求、  
 只望見惠新詩話一部、未二三日、尋得、計云、  
 馬上嘔血而亡、余爲黯然者久之、記分手前  
 日、拉占春詩佛及余等數人、赴某家別宴、轟

昔人云ふ、人の遺編斷句を拾ふて、而して代りて爲に之  
 れを存する者、之れを暴露の白骨を葬るに比す、功德極  
 めて大なりと、欣上人一詩冊を寄せて曰、是れ亡友飯田  
 生の作なり、生名は忠肅、字は共懿、板橋の人業を北山先  
 生に受く、清才壽あらず、墓木已に拱す、願くは一首を采  
 りて詩話中に登せよと、乃録して以て其幽光を發す、晚  
 秋雜咏に云ふ、寒烟、海の如く樓を沉めんと欲す、坐して  
 西風に對して暗に愁を結ぶ、何の處の遠砧か天、暮に向  
 ふ、聲々敲き老ふ數村の秋、「滿眸の秋色畫圖の間驛樹無  
 邊紅已に殷たり、只、清霜の收め盡さざるあり、依然たる  
 黛碧筑波の山、

膳所の轉方勝、字は士善、毅齋と號す、余屢、其邸舍に就い  
 て、詩酒の歡を爲す、今夏、國に歸る、書至りて云ふ、別來他  
 求なし、只新詩話一部を惠まれんことを望むと、未だ二  
 三日ならず、尋で計を得たり、云ふ、馬上血を嘔て亡すと、  
 余爲に黯然たる者久し、記す、手を分つの前日、占春詩佛、  
 及び余等數人を拉して、某の家の別宴に赴く、轟飲酣嬉、  
 傍ら人なきが如し、席間に賦して云ふ、明朝應に白雲と

飲醅嬉傍如無人。席間賦云。明朝應作白雲飛。一句便覺不祥。果成永訣。欲錄其生平之作。搜索不可得。頃淺山生至。自膳所誦其秋夜泛湖一絕云。悽然風露欲沾衣。一棹扁舟夜未歸。又向荷花深處去。水禽帶夢月前飛。篁村兩國竹枝云。琉璃水碧暮風輕。轟鼓繁絃得氣行。中有樓船恣豪貴。紅燈無數照波明。雲斷晚天雷雨收。水光激澗冷於秋。挂燈連影橋邊宅。爭喚行人催上舟。頗爲梅外補逸。

弘齋送篁村歸潮來云。秋城社近燕飛飛。客夢連宵繞釣磯。書劍嗟余經歲滯。江湖美汝及時歸。且看今後興懷足。休說從前心事違。正好映門霞浦水。一條淨碧濯征衣。通首唐

作りて飛ぶべし」と、一句便ち不祥を覺ゆ、果して永訣と成る、其生平の作を録せんと欲す、搜索するに得べからず、頃ころ淺山生、膳所より至り、其秋夜泛湖の一絶を誦す、云ふ、悽然たる風露衣を沾さんと欲す、一棹の扁舟夜未だ歸らず、又、荷花深處に向つて去る、水禽夢を帯びて月前に飛ぶ。」

篁村の兩國竹枝に云ふ、琉璃水碧にして暮風輕し、轟鼓繁絃氣を得て行く、中に樓船の豪貴を恣にするあり、紅燈無數波を照して明なり、「雲斷えて晚天雷雨收まる、水光激澗秋よりも冷なり、挂燈影を連ぬ橋邊の宅、争ふて行人を喚んで舟に上ることを催す」と、頗、梅外の爲に逸を和ふ。

弘齋篁村の潮來に歸るを送るに云ふ、「秋城社近くして燕飛々、客夢連宵、釣磯を繞る、書劍嗟余が經歲滯るを、江湖美む汝が時に及んで歸るを、且看る今後興懷の足るを、説くことを休めよ從前心事の違ふを、正に好し門に映す霞浦の水、一條の淨碧征衣を濯ふに」と、通首唐調、又

調、又謝島梅外餉米云、寒釜近來稀、作粥、再過幾日、欲生魚、恣然一擔、堪多愧、不、躑、真卿乞米書、則隱然以一世魯公自命、其書矣、語氣亦稍落、宋晉。

愛蓮道士、名晃若、字藕孫、上毛人、好詩、善鐵筆、來寓于島梅外家、中秋無月云、疎雨梧桐滴有聲、今宵點點最關情、癡雲自妬娟娟影、每到中秋不放晴、夜聞治稻云、霜滿山村月欲沉、家家打稻隔疎林、牀敷和夢聽還好、不似寒砧搗客心、有詩如此、觀遠人以其所主信哉。

越後王詰、字不言、頗好吟咏、從余受業、湖上云、荻蘆花發雪成團、雁舞寒鴉帶雨飛、青笠綠蓑風又急、釣舟一棹不須歸、余昔在浪華、

島梅外が米を餉るを謝するに云ふ、寒釜近來粥を作る稀なり、再び幾日を過ぐれば魚を生ぜんと欲す、恣然一擔多愧するに堪へたり、真卿乞米の書を咲たす、則隱然として一世の魯公を以て自ら其書に命す、語氣亦稍落つ。

愛蓮道士、名は晃若、字は藕孫、上毛の人、詩を好み鐵筆を善す、來りて島梅外の家に住す、中秋無月に云ふ、疎雨梧桐滴りて聲あり、今宵點點最情に關す、癡雲自ら妬む娟々の影、中秋に至る毎に晴を放たず、夜、稻を治むるを聞くに云ふ、霜滿ちて山村月沉まんと欲す、家々打稻疎林を隔つ、牀敷夢に和して聽いて還りて好し、似ず寒砧の客心を搗くに、詩あること此の如し、遠人を觀るには其主とする所を以すと、信なるかな。

越後の王詰、字は不言、頗好吟咏を好む、余に從つて業を受く、湖上に云ふ、荻蘆花發きて雪團を成す、雁は寒鴉に雜はりて雨を帯びて飛ぶ、青笠綠蓑風又急なり、釣舟一棹須らく歸るべからずと、余昔、浪華に在る時、詩を學ぶ者

學詩者有高達、亡友梅崖嘗有歌後唐人在君門之語、今又得王譜、可謂添一箇空心唐人矣、書以爲笑柄。

善庵告余曰、生平作詩、筆剛而不能柔、易流晦澀、余謂經生詩、另自存氣魄、猶是僧家有蔬笋氣、女子有脂粉氣、祇足見其風格、廣平梅花、人人豈可望哉、誦其送人赴北邊詩云、北地承嚴命、堂堂一膽存、服人寧在力、治狄不須煩、四海原兄弟、群黎況子孫、祁寒良苦極、自愛答君恩、雄健乃爾、恐非軟弱詩人所能矣、又山櫻一絕云、落日風前輕似雪、清宵月下白於雲、偶然看做雲還雪、不道山櫻開十分、清真委婉、極摹櫻花之神、我知善庵竟非純乎剛者、其門吟詩者、却得三人焉。

友梅崖嘗て歌後の唐人君が門に在りの語あり、今又王譜を得たり、一箇の空心唐人を添ふと謂ふ可し、書して以て笑柄と爲す。

善庵、余に告げて曰、生平詩を作る、筆剛にして柔なること能はず、晦澀に流れ易しと、余謂へらく經生の詩、另に自ら氣魄を存す、猶是れ僧家に蔬笋の氣あり、女子に脂粉の氣あるがごとし、祇に其風格を見るに足る、廣平の梅花、人々豈望む可けんや、其人の北邊に赴くを送る詩を誦す、云ふ、北地嚴命を承く、堂堂一膽存す、人を服する寧ぞ力に在らんや、狄を治むる煩を須ひず、四海原と兄弟、羣黎況や子孫、祁寒良苦極まる、自愛して君恩に答へよ、雄健乃爾り、恐くは軟弱詩人の能くする所に非ず、又、山櫻一絶に云ふ、落日風前輕くして雪に似たり、清宵月下雲より白し、偶然看做す雲還た雪、道はず山櫻の開いて十分と、清真委婉、極めて櫻花の神を摹す、我知る善庵竟に剛に純なる者に非ざるを、其門に詩を吟する者、卻て三人を得たり。



一、泉澤充、字始達、號履齋、冬夜云、奇寒如鐵、五更天、聞微雪聲猶未眠、只把一經供咀嚼、更無詩句到梅邊、履齋刻苦讀書、未嘗須臾釋卷、此或紀實也。

其二、今井觀、字伯孝、號芹亭、近日下帷教授、春曉云、袖袵一幅曉寒輕、聽雨酣眠夢亦清、屏掩殘燈人未起、門前已賣杏花聲、余未見他作、此首稍有香奩氣。

其三、關達、字成章、號謙齋、白川道中云、稚松青十里、曉霧趁行消、塚立三叉路、沙埋獨木橋、微霜猶曬稻、晴日始收簪、秋程風物好、自然不覺遙、頗爲清雅、謙齋今遊駿中、讀書於巖淵大村氏家、其族有允字讓卿者、托謙齋見寄、示詩草、雜興云、滿畝春風麥浪齊、花陰

一、泉澤充、字は始達、履齋と號す、冬夜に云ふ「奇寒鐵の如し五更の天、雪聲を聞き徹して、猶未だ眠らず、只一經を把りて咀嚼に供す、更に詩句の梅邊に到る無し」、履齋刻苦して書を讀む、未だ嘗て須臾も卷を釋てず、此れ或は實を紀するならん。

其二、今井觀、字は伯孝、芹亭と號す、近日帷を下して教授す、春曉に云ふ「袖袵一幅曉寒輕し、雨を聽て酣眠夢も亦清し、屏、殘燈を掩ふて人未だ起きず、門前已に杏花を賣るの聲」と、余未だ他作を見ず、此首稍「香奩」の氣あり、

其三、關達、字は成章、謙齋と號す、白川道中に云ふ「稚松青十里、曉霧行を趁ふて消す、塚は立つ三叉の路、沙は埋む獨木橋、微霜、猶稻を曬し、晴日始めて簪を收む、秋程風物好し、自然、遙なるを覺えず」、頗清雅と爲す、謙齋今、駿中に遊ぶ、書を巖淵の大村氏の家に讀む、其族に允字は讓卿といふ者あり、謙齋に托して詩草を寄せらる、雜興に云ふ「滿畝の春風麥浪齊し、花陰雨を傲めて勃鳩啼く、村翁睡起情思なし、閑に兒童に伴ふて綠莢を摘む」、亦

敘雨鶯鳩啼、村翁睡起無情思、閑伴兒童摘、  
綠萼亦可誦也。

常陸平山貞、字子亮、號亮齋、孤冷能詩、縱步  
近村、云、珍重脚力未窮窮、步屣尋芳西又東、  
汀鶯斂翎新水外、村鶯哢舌暖烟中、從他白  
酒動留我、且喜青春不負公、滿朶梅花滿囊  
句、一雙擔得午時風。

詩佛畫竹、北原秦里題、七古一篇、來請跋語、  
余以畫詩兩佳、遂留不還、裝潢藏之、詩云、畫  
家自古難墨竹、怪底此翁特擅名、筆法知從  
書法得、與詩併來天下鳴、醉後臨紙時一掃、  
傍若無人意氣傾、自言我竹非有意、一竿兩  
竿隨手成、个个點來疎又密、已覺清風憂有  
聲、寫罷詩句題其上、五字七字玉崢嶸、墨痕

誦す可きなり。

常陸の平山貞、字は子亮、亮齋と號す、孤冷、詩を能くす、近  
村に縱歩するに云ふ、珍重す脚力未だ窮々せず、步屣芳  
を尋ねて西又東、汀鶯を斂む新水の外、村鶯舌を哢す  
暖烟の中、從かす他の白酒動に我を留むるに、且喜ぶ青  
春公に負かさざるを、滿朶の梅花滿囊の句、一雙擔ひ得た  
り午時の風。

詩佛、竹を畫き、北原秦里、七古一篇を題し、來りて跋語を  
請ふ、余、畫詩兩ながら佳なるを以て、遂に留めて還さず、  
裝潢して之れを藏む、詩に云ふ、畫家古より墨竹を難ん  
ず、怪底す此翁特に名を擅にするを、筆法知る書法より  
得るを、詩と併せ來りて天下に鳴る、醉後紙に臨んで時  
に一掃す、傍に人なきが如く意氣傾く、自ら言ふ我が竹意  
あるに非ず、一竿兩竿手に隨つて成る、个个點し來りて  
疎又密、已に覺ゆ清風の憂として聲あるを、寫し罷んで  
詩句其上に題す、五字七字玉崢嶸、墨痕未だ乾かず擔て  
且走る、人に奪はるゝを恐れて手高く擧ぐ、世間豈竹を

未乾捲且走、恐遭人奪、手高擊、世間豈無畫竹者、何如一幅三絕并、只道此翁真墨妙、誰知坡老是再生、秦里名成、字世民、土佐人、又春社云春社田園是樂鄉、雞豚分肉濁醪香、醉翁起舞郎當極、槌鼓聲中笑一場、抑何風趣、秦里鄉人箕浦橘、字香橘、號耕雨、忽貽書云、傾想多年未得一晤、拙詩一冊爲贄、幸賜披覽、余感其意、爲抄以傳、秋夜宿僧院云、夜深山月隱浮圖、砌竹庭松影欲無、鬪鼠聲中僧入定、長明燈照小文殊、山房冬夜云、鐘濕山房未卜晴、無端四壁峭寒生、料知細雨還成雪、簷竹聲收近五更、冬曉云、北風鳴戶曉、凄其被底夢回睡足時、昨夜山中盈尺雪、寒鴉一隊出巢遲、皆集中精華也、其他變句、如一

畫く者なからんや、何ぞ如かん一幅三絶并すに、只道ふ此翁眞に墨妙と、誰か知らん坡老是れ再生なるを、秦里名は成、字は世民、土佐の人、又春社に云ふ、春社田園是れ樂郷、雞豚肉を分つて濁醪香し、醉翁起舞郎當極まる、槌鼓聲中笑ふこと一場、と抑何ぞ風趣なる。

秦里の郷人箕浦橘字は香橘、耕雨と號す、忽書を貽りて云ふ、傾想多年未た一晤を得ず、拙詩一冊贄と爲す、幸に披覽を賜へと、余其意に感じ、爲に抄して以て傳ふ、秋夜僧院に宿するに云ふ、夜深けて山月浮圖に隱る、砌竹庭松、影無らんと欲す、鬪鼠聲中僧、定に入る、長明燈は照す小文殊、山房冬夜に云ふ、鐘濕ふて山房未だ晴をトせず、端なく四壁峭寒生す、料り知る細雨還て雪と成るを、簷竹聲收まりて五更に近し、冬曉に云ふ、北風戸に鳴りて曉凄其、被底夢回る睡足るの時、昨夜山中盈尺の雪、寒鴉一隊巢を出ること遲し、皆集中の精華なり、其他變句、一院の菩提杏花を隔つ、山に背く一路糴程の村の如き、皆佳なり。

院基聲隔杏花、背山一路穠穉村、皆佳。

狹實久家朗號暢齋、青年能詩、風流自賞、途中苦雨云、無限征途何日窮、松林竹塢雨濛濛、一聲杜宇過頭上、已落山雲滄淡中。

詩人無學、學人無詩、是今時通病、余讀柴碧海枕上集、特怪其不然、如五言云、江水多於地、青山欲到門、野徑垂楊外、人家亂水間、蹊回方學斗、潭轉欲成輪、七言云、風前林影藻荇動、露下蟲聲絡緯愁、真源在在無非水、覺路頭頭總是山、七十平分仍故我、尋常負債

又今春、諸句極有風味、不似平時勃窣談理、因是詠史詩云、慈雲悲雨十方界、玉柄香飄塵尾風、妙法蓮花花落後、空留八髻在龍宮、蓋詠稗史所載元楊璉真珈事也、真珈西蕃

狹實の久家朗、暢齋と號す、青年、詩を能す、風流自ら賞す、途中苦雨に云ふ、限り無き征途何の日か窮らん、松林竹塢雨濛々、一聲の杜宇頭上を過ぐ、已に落つ山雲滄淡の中。

詩人、學なく、學人、詩なし、是れ今時の通病、余、柴碧海の枕上集を讀んで、特に其然らざるを怪む、五言に云ふ、江水地よりも多し、青山門に到らんと欲す、野徑垂楊の外、人家亂水の間、蹊回りて方に斗を學び、潭轉じて輪を成さんと欲す、七言に云ふ、風前の林影藻荇動き、露下の蟲聲絡緯愁ふ、真源在々水に非ざるは無く、覺路頭々總て是れ山、「七十平分仍故我、尋常負債又今春」の諸句の如き、極めて風味あり、平時勃窣として理を談ずるに似ず。

因是史を詠するに云ふ、慈雲悲雨十方界、玉柄香飄る塵尾の風、妙法蓮花花落ちて後、空く八髻を留めて龍宮に在り蓋、稗史に載する所の楊璉真珈の事を詠するなり、真珈は西蕃の僧、世祖の時、江南の釋教總院と爲り、說法

價世祖時爲江南釋教總院、說法募緣、窮極土木之侈、密造洞房曲室、多招納宮嬪、日以肆淫毒、猥褻不可具狀、大德三年、事破遭刑、與正史差異。

池晉、字大進、濱田儒員、受業因是、春日路上云、于役逢春、心却輕、野桃村杏、總多情、香風得得來、無盡、馬尾相追、馬首迎、亦清才也。

唐人詩不勝學、宋人學不勝詩、唐詩溫潤、有春水四澤之象、宋詩磊砢、有冬嶺孤松之象、唐則滿朝詩人、宋則不過數家、只斯數家、優足與全唐詩人抵敵、此宋詩所以稱雄也。

唐宋之辨、人動問及、余亦難言之、近讀清蔣心餘集、得其辨詩五古、論得痛快、極獲我心、今抄傳以代鼓舌之勞、詩云、唐宋皆偉人、各

寡緣、土木の侈を窮極す、密に洞房曲室を造り、多く宮嬪を招き納れ、日に以て淫毒を肆にす、猥褻、具狀す可からず、大德三年、事破れて刑せらる、正史と差異なり。

池晉、字は大進、濱田の儒員、業を因是に受く、春日路上に云ふ、于役春に逢ふて心却て輕し、野桃村杏總べて多情、香風得々來りて盡くるなし、馬尾相追ふて馬首迎ふと、亦清才なり。

唐人は詩學に勝たず、宋人は學詩に勝たず、唐詩は溫潤、春水四澤の象あり、宋詩は磊砢、冬嶺孤松の象あり、唐は則滿朝詩人、宋は則數家に過ぎず、只斯の數家、優に全唐の詩人と抵敵するに足る、此れ宋詩の雄を稱する所以なり。

唐宋の辨、人動もすれば問及す、余亦之れを言ふに難んず、近ごろ清の蔣心餘の集を讀んで、其辨詩の五古を得たり、論じ得て痛快、極めて我が心を獲たり、今抄傳して以て鼓舌の勞に代ふ、詩に云ふ、唐宋皆偉人、各、一代の詩

成一代詩、變出不得已、運會實迫之、格調苟沿襲、焉用雷同詞、宋人生唐後、開闢實難爲、一代只數人、餘子故多疵、敦厚旨則同、忠孝無改移、元明不能變、非僅氣力衰、能事有止境、極詣難角奇、奈何愚賤子、唐宋分藩籬、哆口崇唐音、羊質冒虎皮、習爲靡落語、死氣蓋伏屍、撐架陳氣象、桎梏立威儀、可憐餒敗物、欲代郊廟犧、使爲蘇黃僕、終日當鞭笞、七子推王李、不免貽笑嗤、況設土木形、浪擬神仙姿、李杜若生晚、亦自易矩規、寄言善學者、唐宋皆吾師。

成す、變は已むを得ざるに出づ、運會實に之れに迫る格調苟沿襲せば、焉ぞ雷同の詞を用ひん、宋人唐後に生ず、開闢實に爲し難し、一代只數人、餘子、故と多疵、敦厚旨は則同じ、忠孝、改め移すことなし、元明變する能はず、氣力の衰ふのみに非ず、能事は止境あり、極詣は奇を角し難し、奈何ぞ愚賤の子、唐宋、藩籬を分つ、哆口唐音を崇び、羊質、虎皮を冒す、習ふて靡落の語を爲す、死氣、伏屍を蓋ふ、撐架、氣象を陳す、桎梏、威儀を立つ、憐む可し、餒敗の物、郊廟の犧に代へんと欲す、蘇黃の僕たらしめば、終日當に鞭笞せらるべし、七子、王李を推す、笑嗤を貽すを免れず、況や土木の形を設けて、浪りに神仙の姿に擬す、李杜若し生ずること晚くば、亦自ら矩規を易えん、賢を寄す善く學ぶ者、唐宋皆吾が師。

鴻巢の横田裕、字は好問、酒を醸して家富む、好問嘗て自ら醉郷董史若干卷を著す、考證遺さず、實に杜康の忠臣たり、性、吟詩を好む、宿悟あるが如し、初夏曉行に云ふ、「水田漠々、綠、波を生ず、濕は蓑衣に透りて冷を奈何、村莊

綠生波、濕透、蓑衣、奈冷何、出盡村莊、天未曙、  
 秧雞啼處、雨聲多、雪夜云、雪聲、簌簌、水聲、乾、  
 月黑、窓間、夜欲殘、喚起吾家、麴道士、爐頭相  
 對、護清寒、淡雅如此、不似、豪富、筆墨。

詩人有眼不識、盃鐘、而往往說酒者、如乃侯、  
 原非麴藥之才、而其獨醉七古云、胸中磊塊  
 苦不平、一瓮芳醴、獨自傾、案頭聖賢書、幾卷、  
 朗誦聊常、龍鳳藻、三酌陶然、便成醉、浩浩襟  
 懷似太清、獨樂却勝與衆樂、不覺爛醉過三  
 更、閃閃眼光透紙背、琅琅如發、金石聲、意氣  
 勃興、拍案叫、那管鄰人睡夢驚、不知天地爲  
 何物、四海之內無弟兄、伯倫王績今安在、我  
 將喚起共商評、則真似老於糟邱者語。

中村信綱、字壽王、號櫻窓、詩有奇氣、題赤壁

を出で盡して天未だ曙けず、秧雞啼く處雨聲多し、雪夜  
 に云ふ、雪聲簌々水聲乾く、月黒くして窓間、夜殘せんと  
 欲す、吾家の麴道士を喚起して、爐頭相對して清寒を護  
 す、淡雅此の如し、豪富の筆墨に似ず。

詩人、眼に盃鐘を識らずして、往々に酒を説く者あり、乃  
 侯の如き、原と麴藥の才に非ず、而して其獨醉七古に云  
 ふ、胸中の磊塊、不平を苦しむ、一瓮の芳醴、獨自ら傾く、案  
 頭聖賢の書幾卷、朗誦聊か龍鳳の藻に當つ、三酌陶然、便  
 ち醉を成す、浩浩たる襟懷、太清に似たり、獨樂却て衆と  
 樂むに勝れり、覺えず爛醉して三更を過ぐ、閃々たる眼  
 光紙背に透る、琅々として金石の聲を發するが如し、意  
 氣勃興、案を拍つて叫ぶ、那ぞ管せん鄰人睡夢の驚くを、  
 知らず天地の何物たるを、四海の内弟兄なし、伯倫王績  
 今安にか在る、我將に喚起して共に商評せんとす、と則  
 眞に糟邱に老する者の語に似たり。

中村信綱、字は壽王、櫻窓と號す、詩奇氣あり、赤壁の圖に

圖云、一輪明月萬層濤、千古江山屬兩豪、烈火張天還不及、洞簫孤鶴得名高、甲子年、余在伊勢、一來僑居、索序其尙書者、余雖不果、心固記之、今年與乃侯來、名字非窮、又不道有故、余只謂別人、已而知即前人、可謂前以經而後以詩者。

偶在路上拾得一扇、扇上蠅頭寫人影五排一首、如夕陽長且瘦、午景短而僕、暫向花邊別、又於月下扶、寒燈相伴、旅館未曾孤、照鏡何須問、落盃遮欲呼、無臭無聲也、不言不笑乎、諸句可謂巧而不纖矣、余愛而藏之、不復知何人筆也、後知是秋田詩人平澤通文所作。

余向在南部山中、竟歲、意頗不愜、有客自宮

題して云ふ、一輪の明月萬層の濤、千古江山兩豪に屬す、烈火天に張るも還た及ばず、洞簫孤鶴名を得るの高きに、甲子の歲、余、伊勢に在り、一たび僑居に來り、其尙書考に序せんことを索む、余果せずと雖、心固より之れを記す、今年、乃侯と來る、名字、舊に非ず、又故あるを道はず、余、只、別人と謂ふ、已にして即前人なることを知る、前には經を以てし、而して後には詩を以てする者と謂ふ可し。

偶、路上に在りて一扇を拾ひ得たり、扇上に蠅頭、人影の五排一首を寫す、夕陽長くして且瘦す、午景短くして僕す、暫く花邊に向つて別れ、又月下に於て扶く、寒燈、伴を相作し、旅館未だ嘗て孤ならず、鏡を照らして何ぞ問ふことを須ひん、盃に落ちて遽に呼ばんと欲す、臭なく聲もなし、言はず笑はざるか、の諸句の如き、巧にして纖ならずと、謂ふ可し、余愛して之れを藏む、復た何人の筆なるを知らず、後に是れ秋田の詩人平澤通文の作る所なるを知る

余向に南部に在りて、山中、歳を竟る、意頗愜はず、客の宮



古來者勸余一遊其地亦瀕海小都會房屋鱗次民俗太淳抱冊之士巖北溟木玄冲山禎伯以下每晚必至習文談詩頓忘身在遐陬臨去諸人相送至十里外馬前環立依依不捨余東別西離每慣割情獨當爾時實覺難堪毛今束脩餽問歲時不衰偶得木山二子詩特錄以示不諼木繁村道中云幾樹垂楊夾徑斜隔林香送野薔花居人棲在畫圖裏亂石清流三兩家山春草云不受香輪不作茵東風滿意翠茸勻此中生怪筆頭菜獨自書空似恨春木名宜盈山名吉興

仙臺滕珉字子璞號崑山年齒已高詩興不衰每至秋日輒設詩席延余及詩佛于其邸舍霜葉殘霞來射窓几殊覺助詩酒之賞其

古より來る者あり余勸めて一遊せしむ其地亦瀕海の小都會房屋鱗次民俗太淳なり抱冊の士巖北溟木玄冲山禎伯以下每晚必至習文談詩を談す頓に身の遐陬に在ることを忘る去るに臨んで諸人相送りて十里外に至る馬前環立依依として捨てず余東別西離毎に情を割くに慣る獨爾時に當りて實に堪へ難きを覺ゆ今に至りて束脩の餽問歲時衰へず偶木山二子の詩を得たり特に錄して以て諼れざることを示す木の繁村道中に云ふ幾樹の垂楊か徑を夾んで斜なり林を隔て香は送る野薔の花居人の棲は畫圖の裏に在り亂石清流三兩家山の春草に云ふ香輪を受けず茵と作らず東風滿意翠茸勻此中生怪筆頭菜獨自ら空に書して春を恨むに似たり木名は宜盈山名は吉興

仙臺の滕珉字は子璞崑山と號す年齒已に高し詩興衰へず秋日に至る毎に輒詩席を設けて余及び詩佛を其邸舍に延く霜葉殘霞來りて窓几を射る殊に詩酒の賞を助くるを覺ゆ其新歲に云ふ齊帝時を行ふ豈私あら

新歲云、青帝行時豈有私、今朝星暖袖先知、  
水浮鴨綠風披凍、柳蘸鵝黃煙弄絲、未必類  
齡歎、駒隙却緣新曆檢、花期全家迎歲傳、盃  
酒一笑屠蘇到手遲、燈花云、苦吟微倦夜方  
中、燈火無端綴玉蟲、一月幾回能得笑、不知  
何喜報、衰翁皆達者之言、亦自有味。

會津兒島翻、字冲夫、號楊阜、余邂逅于谷盤  
梯許、已而以詩來見、自云、苦吟半生、誤走旁  
蹊、今齡已過艾、願收之桑榆、誦詠蝶一律云、  
輕舉褊褊高又低、綠眠紅醉夢魂迷、暖烟蕙  
徑多舒翅、細雨花房暫借栖、戲舞自能存舊  
態、風流先已入新題、前身只合竊香掾、猶是  
尋芳近玉閨、可謂合作矣、楊阜精醫理、嘗著  
千年眼、痛斥古醫方之非、卓立如此、亦可想

んや、今朝星暖に袖先づ知る、水は鴨綠を浮べて風は凍  
を披く、柳は鵝黃を蘸して煙は絲を弄り、未だ必しも類  
齡胸隙を歎せず、却て新曆に縁りて花期を檢す、全家歳  
を迎へて盃酒を傳ふ、一笑屠蘇手に到るの遅きを、燈  
花に云ふ、苦吟微しく倦んで夜方に中す、燈火端なく玉  
蟲を綴る、一月幾回か能く笑を得る、知らず何の喜めつ  
て衰翁に報ず、と皆達者の言亦自ら味あり。

會津の兒島翻、字は冲夫、楊阜と號す、余、谷盤梯の許に邂逅す、已にして詩を以て來り見ゆ、自ら云ふ、苦吟半生、誤りて旁蹊に走る、今齡已に艾を過ぐ、願くは之れを桑榆に收めんと、蝶を詠する一律を誦す、云ふ、輕舉褊褊高くして又低し、綠眠紅醉夢魂迷ふ、暖烟蕙徑多く翅を舒べ、細雨花房暫く栖を借る、戲舞自ら能く舊態を存す、風流先づ已に新題に入る、前身只合に竊香の掾なるべし、猶是れ方を尋ねて玉閨に近づく、合作と謂ふ可し、楊阜、醫理に精し、嘗て千年眼を著して痛く古醫方の非を斥す、卓立此の如し、亦其不凡を想ひ見る可し。

見其不凡。

國華、西川翊、字子璉、淡海人、吐句如屑、累篇不倦、少受業野子賤、東下以後、以詩干諸名碩、所歷者、宮子亮、劉文翼、松君脩、谷文卿、安文仲、數家、皆以敏捷見稱、真可謂詩中馮道矣、年垂七十、又來交余社、自云比年所作、已過萬首、自今而後、更千更萬、不爲難也、平素嬰鏢、又有廉將軍之癖、故余贈詩有喫來一斗飯、吟了萬篇詩之句、其蓬蒿詩稿、高過尺許、余破數日之程、爲之翻攜、僅錄其江村夏雨一首、云、孤蒲深處雨聲喧、新漲看看喜柳根、漁艇相雜烟渚外、篝燈數點照黃昏、此最爲清絕、又如一徑通山郭、群峰擁水村、蛙鳴殘雨外、鶉響亂雲前、漣漪迎雨細、菡萏受風

國華、西川翊、字子璉、淡海の人、句を吐くこと屑の如し、累篇倦まず、少して業を野子賤に受く、東下以後、詩を以て諸名碩を干す、歷る所の者、宮子亮、劉文翼、松君脩、谷文卿、安文仲の、數家、皆敏捷を以て稱せらる、眞に詩中の馮道と謂ふ可し、年七十に垂として、又來りて余が社に交はる、自ら云ふ、比年の所作、已に萬首に過ぐ、今よりして後更に千更に萬難しと爲さざるなりと、平素嬰鏢、又、廉將軍の癖あり、故に余、詩を贈り、「一斗の飯を喫し來りて、萬篇の詩を吟了する」の句あり、其蓬蒿詩稿、高きこと尺許に過ぐ、余、數日の程を破りて、之れが爲に翻攜す、僅に其江村夏雨の一首を録す、云ふ、孤蒲深き處雨聲喧し、新漲看々柳根を喜む、漁艇相雜ぐ烟渚の外、篝燈數點黃昏を照す、此れ最清絶と爲す、又、「一徑、山郭に通じ、群峰水村を擁す、蛙は鳴く殘雨の外、鶉は響く亂雲の前、漣漪雨を迎へて細に、菡萏風を受けて香し、春雨、窓前の竹、歲寒、屋後の松」の如き、皆佳句なり。

香、暮雨窓前竹、歲寒屋後松、皆佳句也。

僧鴻漸、自以雲室爲號、蓋取精廬不住之意、今却住待西窪光明寺、先輩松窓、鬼道、有雲室記、太室、寬齋有雲室詩、又徵余詩、余竟不欲爲、狗尾之續、雲室生平喜談、儒家濂洛之言、又性嗜畫、每一援毫、寢食總廢、詩則一出、率意、絕句云、對景詩漫酬、遇勝圖可作、一圖還一吟、悠然意獨樂、僅僅廿字、胸襟畢露、雲室昔日唱小不朽社、當時訂盟者、桐君、蘭石、柏如亭、平梅溪、源臺山、邊赤水、高西巷、田好古等八人、輪流爲主、盛作詩畫之會、後如亭去、都梅溪下世、此會中絕、二三年來、雲室繼而新之、新參者、西圭齋、野西湖、藤琢齋、服古顛、藤三林、而臺山西巷、巋然尙在、數子皆

僧鴻漸、自ら雲室を以て號と爲す、蓋、精廬不住の意に取る、今却て西窪の光明寺に住持す、先輩松窓、鬼道、雲室の記あり、太室、寬齋、雲室の詩あり、又、余が詩を徵す、余竟に狗尾の續を爲すを欲せず、雲室、生平喜んで儒家濂洛の言を談す、又、性畫を嗜む、一たび毫を援る毎に、寢食總て廢す、詩は則一に率意に出づ、絶句に云ふ、景に對して詩漫に酬ふ、勝に遇ふて圖作る可し、一圖又一吟、悠然として意獨樂む、と僅々たる廿字、胸襟畢く露はる。

雲室昔日小不朽社を唱ふ、當時盟を訂する者、桐君、蘭石、柏如亭、平梅溪、源臺山、邊赤水、高西巷、田好古等八人、輪流、主と爲り、盛に詩畫の會を作す、後、如亭、都を去り、梅溪下世す、此會中ごろ絶ゆ、二三年來、雲室繼で之れを新にす、新に參する者、西圭齋、野西湖、藤琢齋、服古顛、藤三林、而して臺山西巷、巋然として尙在り、數子皆畫に累さる、詩を吟ずる者は唯臺山西巷、琢齋の三人のみ、今三人の詩を録す。

累于畫吟詩者唯臺山、西巷、琢齋三人耳、今錄三人詩

臺山名清風、字穆甫、體中三絕、謂畫絕、書絕、酒絕也、而詩亦不在三者之下、苦熱云、懶龍無賴奈驕陽、盤礴窓間汗似漿、垂柳不搖日當午、清風誰復傲羲皇、題畫云、風格荆關豈得倫、閑來信意寫鱗峒、不知身在書窓下、筆底青山我主人。

西巷名岱、字公嵩、枯瘦如腊、一望知是詩人、偶成云、冷官無事不知忙、睡覺春園欲夕陽、身後名聲何足問、世間富貴總如忘、未裁酒頰從他笑、每讀花經得我狂、二十四番今已遍、拾收紅紫滿詩囊。

琢齋名文卿、亦以爲字、小不朽社、唯此人爲

臺山、名は清風、字は穆甫、體中三絶、畫絶、書絶、酒絶を謂ふ、而して詩も亦三の者の下に在らず、苦熱に云ふ、懶龍無賴、驕陽を奈ん、盤礴窓間、汗、漿に似たり、垂柳搖かず日、午に當る、清風誰か復た羲皇に傲らん、題畫に云ふ、風格荆關豈倫するを得んや、閑來意に信せて鱗峒を寫す、知らず身は書窓の下に在るを、筆底の青山、我れ主人。

西巷、名は岱、字は公嵩、枯瘦腊の如し、一望して是れ詩人なるを知る、偶成に云ふ、冷官無事忙を知らず、睡覺めて春園夕陽ならんと欲す、身後の名聲何ぞ問ふに足らん、世間の富貴總べて忘れたるが如し、未だ酒頰を裁せず、他の笑に従ふ、花經を讀む毎に我が狂を得、二十四番今已に遍し、紅紫を拾收して詩囊に滿つ。

琢齋、名は文卿、亦以て字と爲す、小不朽社、唯此人を最

最少年送春云送春今曉出柴荆底事忽忽不待行里巷村園新綠遍殘紅纔在紫雲英品川竹枝云好個樓臺枕岸開暮山如畫紫成堆近帆影印春波面知是今宵釀雨來土人云帆影落波明必滂沱。

余酷喜誠齋詩而不敢勸人者只恐其因以傷指耳果能同臭味者吾其可不與哉今日吾所與者一爲伊勢原迪齋一爲越後西雪莊二人詩各有偏得不懈將及其成雪莊名皓字白卿聽蟲云兩處蟲聲和月明閑人判得一聲聲砌邊唧唧有時斷輪與牆陰盡意鳴秋雨云秋雨前宵較似晴今朝又是打窓聲菊花有宅句無那只怕禾頭有耳生晚眺云菊黃雲白葉如丹天與秋光偏要妍却是

年と爲す春を送るに云ふ春を送りて今曉柴荆を出づ底事ぞ忽々として待たずして行く里巷村園新綠遍し殘紅は纔に紫雲英に在り品川竹枝に云ふ好個樓臺岸に枕んで開く暮山畫の如く紫堆を成す近帆影は印す春波の面知る是れ今宵雨を釀し來るをと土人云ふ帆影波に落つれば明必滂沱たりと。

余酷喜誠齋の詩を喜ぶ而して敢て人に勸めざる者は只其の因りて以て指を傷つけんことを恐るゝのみ果して能く臭味を同じくする者は吾れ其れ與せざるべけんや今日吾が與する所の者一は伊勢の原迪齋と爲し一は越後の西雪莊と爲す二人の詩各偏得あり懈らずんば將に其成るに及ばんとす雪莊名は皓字は白卿蟲を聽くに云ふ兩處の蟲聲月明に和す閑人判し得たり一聲々砌邊唧々時ありて斷ゆ輪與す牆陰意を盡して鳴くに秋雨に云ふ秋雨前宵較し晴るゝに似たり今朝又是れ窓を打つ聲菊花宅あり那ともするなきを知る只怕る禾頭耳の生ずるあらんことを晚眺に云ふ菊黃に雲白く葉丹の如し天秋光の與に偏に妍を要す却て是れ冬來靑色を嫌ふ只這法を將て淡く烟を描くと皆

冬來嫌設色、只將渲法淡描烟、皆宛然誠齋口吻矣。

洞津田重鴈、字正夫、號雪坡、能畫耽詩、遊金福寺云、菜畦還麥隴、暖日景相牽、野雉驚人起、村童傍犢眠、踏苔登彼岸、出竹仰諸天、實閣真如畫、花梢露半顛、初夏幽居云、檀欒竹影上、窓紗小院日、長蜂報衙、怪底輕雷歇、還響山童和睡、磴新茶、春日云、微風花影碎、斜日漏聲遲、晚秋郊行云、十分秋色霜餘樹、一半斜陽雁外山、雪坡於詩最精、就余商榷、未嘗不降心相從、虛懷若谷、宜其造詣迥不猶人也。

蛙鼓蟬琴、從前有題、未聞咏刺笛者、餘家會、偶以此命題、梅屋一詩先獲驪珠、云、如訴如

宛然たる誠齋の口吻なり。

洞津の田重鴈、字は正夫、雪坡と號す、畫を能くし詩に耽る、金福寺に遊ぶに云ふ、菜畦還た麥隴、暖日景相牽く、野雉、人に驚きて起ち、村童犢に傍ふて眠る、苔を踏んで彼岸の岸に登り、竹を出で、諸天を仰ぐ、實閣真に畫の如し、花梢、半頭を露はす、初夏幽居に云ふ、檀の樂竹影、窓紗に上る、小院日長くして、蜂、衙を報す、怪底、才輕雷の歇んで還た響くを、山童睡に和して新茶を磴す、春日に云ふ、微風、花影碎け、斜日漏聲遲し、晚秋郊行に云ふ、十分の秋色霜餘の樹、一半の斜陽雁外の山、雪坡、詩に於ける最精し、余に就て商榷す、未だ嘗て心を降し相從はずんばあらす、虛懷、谷の若し、宜なり其造詣迥に人のごとくならざる。

蛙鼓蟬琴、從前、題あり、未だ刺笛を咏する者を聞かず、余が家の會、偶、此れを以て題に命ず、梅屋一詩先づ驪珠を得たり、云ふ、訴るが如く悲むが如く、總て情に管す、感蟲

「悲總管情、壤蟲作底不平鳴、瘞來細管元無孔、吹起纖腔乍有聲、小雨纔收泥正濕、嫵陰微散月將晴、不似錦城歌吹熱、閑中聽得耳偏清、梅屋近日得元謝宗可、明瞿宗吉、清張木威咏物詩、刻而行世、此首實足可駢跡三家矣。」

梅外題淵明圖歌云、無絃之琴世留聲、漉酒之巾今尙馨、門外五柳籬下菊、當時只道不害清、孰知却作畫圖地、多被凡工識姓名、自晉至今千餘歲、幾人迎來上丹青、恆沙隸素恆沙手、將此外物累先生、籬菊門柳琴與酒、先生今日若在應棄走、真所謂笑嘲恆爬痒者。

唐時、江陵裴氏有子、爲狐所魅、延術士治之、

底の不平の吟を作す、細管を瘞め來りて元と孔なし、纖腔を吹き起して乍ら聲り、小雨纔に收まりて泥正に濕ふ、嫵陰微しく散じて月將に晴れんとす、錦城歌吹の熱に似ず、閑中聽き得て耳偏に清し、梅屋近日、元の謝宗可、明の瞿宗吉、清の張木威の咏物詩を得て、刻して世に行ふ、此首實に跡を三家に駢ぶ可きに足る。

梅外の淵明の圖に題する歌に云ふ、「無絃の琴世に聲を留む、漉酒の巾今尙馨し、門外の五柳籬下の菊、當時只道ふ清を害せずと、孰か知らん却て畫圖の地を作して、多く凡工に姓名を識らる、晉より今に至る千餘歲、幾人か迎へ來りて丹青に上ばす、恆沙の隸素恆沙の手、此の外物を將て先生を累はす、籬菊門柳琴と酒と、先生今日若し在らば、應に棄てゝ走るべし」と、眞に謂ゆる笑嘲恆爬痒に恆ふ者なり。

唐の時、江陵の裴氏、子あり、狐に魅せらる、術士を延



有高生者、爲之醫治、居數日、又有王生至、見高曰、此亦狐也、少選、又有道士來、見二人曰、此皆狐也、閉戶相歐而死、則道士亦狐也、今日詩人率皆類此、有一人自負其詩爲真、有詆之者曰、此豈真詩、又有一人謂二人之詩皆非真、既而察之、則其所作亦復非真、展轉相攻、終無窮極、若遇真道士一睨、則無所逃其妖形矣。

董堂藏玄宰字幅、行書寫辛稼軒詞、云、千丈擎天手、萬卷懸河口、更弓刀千騎、揮霍遮前後、百計千方久、似鬪草兒童、贏得他家偏有、歸來說向山中叟、邱壘牛羊還辨賢愚否、且自栽花柳、怕有人來、但說與今朝中酒、尾畧丁未初夏書於青谿、尤爲適美、董堂亦

て之れを治めしむ、高生といふ者あり、之れが爲に醫治す、居ること數日、又王生ありて至る、高を見て曰、此れ亦狐なりと、少選くして又道士ありて來る、二人を見て曰、此皆狐なりと、戸を閉ちて相歐ちて死す、則道士も亦狐なり、今日の詩人率皆此れに類す、一人あり、其詩を自負して真と爲す、之れを詆る者あり曰、此豈真詩ならんや、又一人あり、二人の詩皆真に非すと謂ふ、既にして之れを察すれば、則其人の作る所、亦復真に非ず、展轉相攻め、終に窮極なし、若し真道士の一睨に遇はば、則其妖形を逃るゝ所なし。

董堂、玄宰の字幅を藏す、行書にて辛稼軒の詞を寫す、云ふ、千丈、天を擎ぐる手、萬卷、懸河の口、更に弓刀千騎、揮霍、前後を遮る、百計千方久し、似たり草を鬪はしむる兒童の個の他家の偏有を贏ち得るに、歸來說て向ふ山中の叟、邱壘の牛羊還て賢愚を辨せんや否や、且自ら花柳を栽ゆ、人の來るあるを怕る、但說與す今朝酒に中らると、尾に畧す丁未の初夏青谿に書すと、尤適美たり、董堂

自製一詞附後、云、春芳已歇、焚香獨坐、修竹影稀、稠名詞妙墨、一隻白壁、展取也消愁、鳳管鸞杯非我事、清味這中謀、未必閑身便懶去、古人竟日相酬。

谷文晁、嘗爲關其寧、寫真、適有黑宮生者來、谷舉以示之、生於關素未識、而却後數日、諸人會增上一子院、關先在座、生忽憶前者谷所圖、認關通姓名、且陳其由、彼此大笑、後谷聞之、貽生以詩云、衣巾瀟洒愜清臚、頰上三毛得似無、敢比傳神戴文進、金陵當日索人圖、此壬子夏中事也、追錄以存嘉話、戴事見五雜俎。

蘇州賴春水、杏坪、昆季二人、以儒起家、才名赫奕、海內以雙丁二陸待之、余童髫時、已聞

亦自ら一詞を製して後に附す、云ふ、春芳已に歇み、香を焚て獨坐す、修竹影稀稠、名詞妙墨、一隻の白壁、展取して也た愁を消す、鳳管鸞杯我事に非ず、清味這の中に謀る、未だ必しも閑身便懶去せず、古人竟日相酬ゆ。

谷文晁、嘗て關其寧の爲に眞を寫す、適、黑宮生といふ者あり來る、谷舉げて以て之れを示す、生、關に於て素より未だ面を識らず、却後數日、諸人、増上の一子院に會す、關先づ座に在り、生忽前者に谷が圖する所を憶ひ、關を認めて姓名を通じ、且、其由を陳す、彼此大に笑ふ、後、谷之れを聞いて、生に貽るに詩を以てして云ふ、衣巾瀟洒清臚に愜ふ、頰上の三毛似ることを得るや無や、敢て比せんや傳神戴文進、金陵當日人を索るの圖、此れ壬子夏中の事なり、追て錄して以て嘉話を存す、戴が事は五雜俎に見ゆ。

蘇州の賴春水、杏坪、昆季二人、儒を以て起家す、才名赫奕、海内、雙丁二陸を以て之れを待つ、余童髫の時、已に春水の名を聞く、今に至りて三十年、未だ相見ることを得ず

春水之名、至今三十年、未獲相見、杏坪則數  
 數出都、忝竊交歡、其人靜溫、盃酒之間、如坐  
 春風、詩極清矯、敲推最細、讀其兩船載鶴云、  
 白髮鬢鬢、兩裡船更安、一鶴載雙仙、短蓬聊  
 免玄裳溼、小隔不妨長頸延、貪看跳珠、翹足  
 立、閑聽點滴、俯頭眠、一聲汝亦思明月、啼破  
 青溪十里烟、山雲襯水暮滂沱、一葉輕舟載  
 鶴過、屋庫猶能庇丹頂、篷疎更欲借青囊、解  
 官白傅歸裝澹、泛棹逋仙隱趣多、爲怕湖心  
 風有力、柳灣伴汝弄微波、江干初雪云、夜灘  
 風死浪聲收、朝看瓊花集、釣舟、滕六度、江威  
 力薄、半灣蘆荻未低頭、皆可與宋元諸家頡  
 頏、名下無虛信哉。

春水之子襄、字子成、甲子歲、米庵西遊而歸、

杏坪は則數々都に出づ、交歡を忝竊す、其人靜溫、盃酒の  
 間、春風に坐するが如し、詩極めて清矯、敲推最細し、其兩  
 船に鶴を載するを讀むに云ふ、白髮鬢鬢たり兩袖の船、  
 更に一鶴を安して雙仙を載す、短蓬免る玄裳の濕ふ  
 を、小隔妨げず長頸の延ぶるを、跳珠を看ることを貪り  
 て足を翹て立つ、閑に點滴を聽て頭を俯して眠る、一聲  
 汝も亦明月を思ふ、啼破す青溪十里の烟、山雲水に襯し  
 て暮に滂沱、一葉の輕舟鶴を載せて過ぐ、屋庫くして猶  
 能く丹頂を庇す、篷疎にして更に青囊を借らんと欲す、  
 官を解く白傅歸裝澹く、棹を泛ぶる逋仙隱趣多し、湖心、  
 風に力あるを怕るゝが爲に、柳灣汝、伴ふて微波を弄  
 す、江干の初雪に云ふ、夜灘風死して浪聲收まる、朝に  
 看る瓊花の釣舟に集まるを、滕六江を度りて威力薄し、  
 半灣の蘆荻未だ頭を低れず、皆宋元諸家と頡頏す可し  
 と、名下、虚なしと、信なるかな。

春水の子襄、字は子成、甲子の歲、米庵、西遊して歸り、屢、

屢談其才穎、余橫胸中者久之、忽托叔杏坪寄書、亦道相慕之意、且示近業一冊、姑收、短句以誌一櫛之嗜、社日圖云、社鼓聲喧、戰鼓收、粉榆不復佩、耕牛幾家子弟齊扶、醉若箇當年曲逆侯、詠林逋云、澶淵胡馬、蔗塵埃、不到西湖讀易臺、湖畔落梅香滿地、也勝蠟淚積成堆、畫景云、山前一條水、山後幾家村、雲樹疑無路、遙聞水碓喧、頃又於米庵几上、見其戲文、蹲鴟子傳、諧謔可愛、如此才人、我將鑄黃金、事之也。

俗以柚子殼爲釜、煮胡麻、豉、香味竝佳、呼做柚子味、噲、杏坪戲咏云、素皇勅青女、黃金賜黎民、鳳卵膚無鬢、龍鱗面有皺、混成雖出化、妙用實憑人、勿頸還仍舊、抽腸更換新、空心

其の才穎を談ず、余胸中に横はる者久し、忽、叔杏坪に托して書を寄せ、亦相慕ふの意を道ひ、且近業一冊を示す、姑く短句を收めて以て一櫛の嗜を誌す、社日の圖に云ふ、「社鼓聲喧して戰鼓收まる、粉榆復た耕牛を佩ひず」幾家の子弟が齊しく醉を扶く、若箇か當年の曲逆侯、林逋を詠するに云ふ、「澶淵の胡馬、塵埃を蕪す、到らず西湖の讀易臺、湖畔の落梅香滿地、也た勝れり蠟淚の積んで堆を成すに、畫景に云ふ、「山前一條の水、山後幾家の村、雲樹、路なきかと疑ふ、遙に聞く水碓の喧を」と、頃ごろ又米庵の几上に於て、其戲文、蹲鴟子の傳を見る、諧謔愛す可し、此の如き才人、我將に黃金を鑄て之れに事へんとす。

俗、柚子殼を以て釜と爲し、胡麻豉を煮る、香味竝に佳なり、呼んで柚子味噲と做す、杏坪戲咏じて云ふ、「素皇青女に勅し、黃金黎民に賜ふ、鳳卵、膚、鬢なし、龍鱗、面、皺あり、混成化に出づと雖、妙用實に人に憑る、頸を刻て還たかに仍る、腸を抽て更に新に換ふ、空心紫豉を充つ、赤

充案破、赤髯坐烏銀、吳橋香焉借、胡麻脂可  
 因、玉臍方炙肚、金口漸開唇、霧起疑肌漏、雷  
 鳴識内腹、片時爭水火、一顆和酸辛、不憾分  
 量狹、已嘗氣味真、嘗餐廁膳豆、乍棄委埃塵、  
 雲膜敗難補、蠟皮焦既陳、負茲糜爛鼎、誰作  
 割烹臣、蒼髯首安在、黑髯軀此溷、芳魂猶旁  
 薄、忠膽本輪囷、併食何會惜、爲君固致身、語  
 語寫真、使人絕倒。

昔茶山題鐘馗詩、第一卷開首載之、其詩舊  
 得之浪華一書生、想作相、送、皆草書訛  
 傳、後余邂逅茶山於伊勢客次、僕馬俟門、殊  
 爲忽忽、不復及問其詳、遂致此粗鹵、特書以  
 補前過。

## 五山堂詩話卷五 終

髯、烏銀に坐す、吳橋香焉んぞ借らん、胡麻、脂因る可し、  
 玉臍方に肚を炙り、金口漸く唇を開く、霧起りて肌の漏  
 るゝかと疑ひ、雷鳴て内の腹を識る、片時、水火を争ひ、  
 一顆、酸辛を和す、分量の狹を憾みず、已に氣味の真を嘗  
 む、餐に當りて腸豆に廁はり、乍ち棄て、埃塵に委す、雲  
 膜敗れて補ひ難く、蠟皮焦て既陳、茲の糜爛の鼎を  
 負ふて、誰か割烹の臣と作る、蒼髯首安んか在る、黑髯軀  
 此に溷す、芳魂猶ほ旁薄、忠膽本と輪囷併せ食す何ぞ惜  
 て惜まん、君が爲に固より身を致す、と、語々真を寫す、  
 人をして絶倒せしむ。

昔茶山、鐘馗に題する詩、第一卷開首に之れを載す、其詩、  
 舊之れを浪華の一書生に得たり、想、相に作り、送、送に  
 作る、皆草書の訛傳、後、余、茶山に伊勢の客次に邂逅す、  
 僕馬門に俟つ、殊に忽々たり、復其詳なるを問ふに及ば  
 ず、遂に此の粗鹵を致す、特に書して以て前過を補ふ。

## 五山堂詩話卷六

娛菴居士著

天下才一石、子建得八斗、以今視之、其人疑有桀驚不屈之氣、而其與德祖書云、僕常好人譏彈其文、有不美應時改定、虛懷如是、此其所以爲子建、今人以庸庸之才、先自張大、滿腔客氣、不肯下人、強辭奪理、以掩己拙、聖益聖、愚益愚、不其然乎。

唐詩自有唐詩字面、宋詩自有宋詩字面、今人不擇隨手混用、殊爲欠鍊、譬之化飯、道人沿門乞米、鉢中所受、新舊精糲、紛然相糅、煮熟到口、只是救飢、不復知眞風味所在、此等

天下の才一石、子建は八斗を得と、今を以て之れを視れば、其人桀驚不屈の氣あるかと疑ふ、而して其の德祖に與ふる書に云ふ、僕常に人の其文を譏彈するを好む、不美あれば時に應じて改定すと、虚懷是の如し、此れ其の子建たる所以なり、今人、庸々の才を以て、先づ自ら張大す、滿腔の客氣、肯て人に下らず、強辭、理を奪ひ以て己が拙を掩ふ、聖は益、愚は益、愚なりと、其れ然らずや。

唐詩は自ら唐詩の字面あり、宋詩は自ら宋詩の字面あり、今人擇ばず、手に隨つて混用す、殊に欠鍊と爲す、之れを譬へば化飯、道人門に沿つて米を乞ふ、鉢中の受くる所、新舊精糲、紛然として相糅はる、煮熟して口に到り、只是れ飢を救ふ、復新風味の在る所を知らず、此等の詩

詩、余目爲化飯體。

阿波仁大夫名胤、號蓮花、風流醜藉、善與人交、嘗命木芙蓉作百老圖、栗山先生爲題、五古云、寫翁九十七、謂爲百老會、木叟進致辭、少三非無謂、蓮花邀先生、雍也傍一醉三澹、恰成百、何嘗少一位、栗翁聞未半、惘然言面、屬蓮花大國老、栗山天下士、兀那老畫師、冒瀆能無畏、木叟掩口笑、先生意何隘、下可陪乞兒、上可陪上帝、風流蘇東坡、出言有餘味、且此圖中人、先生能識未、中位我老彭、立圖自此始、二老周大老、柱下爲之次、三老四真人、加以商山四、洛陽耆英會、唐宋會有再、其侗諸年德、森然照百代、雍也引二君、參來入其隊、雖然云、賤役陪坐何足怪、雄辯驚四坐、

余目して化飯體と爲す。

阿波の仁大夫、名は胤、蓮花と號す、風流醜藉、善く人と交る、嘗て木芙蓉に命じて百老の圖を作らしむ、栗山先生爲に五古を題して云ふ、翁を寫す九十七、謂て百老會と爲す、木叟進んで辭を致す、三々少くは謂れなきに非ず、蓮花、先生を邀ふ、雍や傍に一醉、三澹恰も百を成す、何ぞ嘗て一位を少かん、栗翁聞て未だ半ならざるに、惘然として言面屬し、蓮花は大國の老、栗山は天下の士、兀那老畫師、冒瀆能く畏ることなし、木叟口を掩ふて笑ふ、先生意何ぞ隘なる、下は乞兒に陪す可く、上は上帝に陪す可し、風流の蘇東坡、言を出すこと餘味あり、且此の圖中の人、先生能く識や未しや、中位我が老彭圖を立ること此より始まる、二老、周の大老、柱下之れが次たり、三老四真人、加ふるに商山の四を以てす、洛陽の耆英會、唐宋會、再あり、其他諸年德、森然として百代を照す、雍や二君を引て、參し來りて其隊に入る、然く賤役と云ふと雖、陪坐何ぞ怪むに足らん、雄辯四坐を驚す、掌を抵て齊しく快と稱す、栗翁、倒せらる、木然として漫に字を題す、と直に一席の閒話を把りて、一篇の好詩と做せり。

抵、拿齊稱快、栗翁被辯倒、呆然漫題字、直把一席閒話、做一篇好詩了。

肥後辛伯彛嘗得鶴鳴溪月出句、以示栗山先生、先生極賞其清警、且思所以對之、後莅揮毫、展書此五字、歷三年、先生猛有所得云、猿挂嶺雲長、遂爲妙聯。

佛庵仲景選有硯名、蒸雲彫琢天然、海內無二、背鑄栗山先生銘云、天造地設、待仲景蓮、紫彥作鏡、皇寬政年、冉冉征途、來者何人、任爾千回、蒸出五雲、此其所以取名、阿波侯因先生致覽之、頗有傾奪之意、先生曰、此蓮最所珍重、操守已堅、換之以貴國之半、恐亦不可得矣、自後人以阿波半國目之、聲名傳播藝林、一時題者如雲、乃侯云、水濱雲蒸最

肥後の辛伯彛嘗得「鶴鳴いて溪月出づ」の句を得て、以て栗山先生に示す、先生極めて其の清警を賞す、且之れに對する所以を思ふ、後毫を揮ふに莅んで、屢、此五字を書す、三年を歷て、先生猛得る所あり云ふ、猿挂りて嶺雲長し、と、遂に妙聯と爲る。

佛庵仲景選、硯あり、蒸雲と名づく、彫琢天然、海内二なし、背に栗山先生の銘を鑄す、云ふ、天造地設、仲景蓮を待て、紫彥、銘を作る、皇寬政の年、冉冉たる征途、來る者何人ぞ、任す爾の千回、五雲を蒸し出だすに、此れ其の名を取るので、と、阿波侯嘗て先生に因て之れを致覽し、頗、傾奪の意あり、先生曰、此れ蓮が最、珍重する所、操守已に堅し、之れに換ふるに貴國の半を以てするも、恐らくは亦得べからずと、自後、人、阿波半國を以て之れを目す、聲名、藝林に傳播す、一時、題する者雲々如し、乃侯云ふ、水濱し雲蒸して長潤和、神鶴天鏤自ら磨するに堪へたり、研池墨を瀦ふ能く多少ぞ、片石半阿に換ふるに由



潤和神鑄天鏡自堪磨、研池瀝墨能多少、片石無由換半阿、米庵云、自耐一泓輪半國、猶能尺璧值連城、余云、學士出言非孟浪、古人換酒得涼州、饒齋又有雲、煙吞吐阿波海、句更妙。

竹庵市得古鏡、徑五寸五分、背作八乳、銘長宜子孫四字、外輪具鳥獸形、題句二十八字、有新有善、同出丹陽之語、文字透徹、秀潤可掬、真莽時物也、寬齋先生作歌贈云、竹庵主人篤好古、購買古鏡手摩撫、背有二十八字銘、知是製造出新莽、新莽篡賊不足論、唯愛此物百世存、鍊銅鎔範精且巧、不數周舜與商尊、何況唐家百鍊鏡、揚州長吏費使令、徒鑄飛天九五龍、古雅溫潤竟不競、我有同病

なし、米庵云ふ、自ら一泓の半國を輪するに耐へたり、猶能く尺璧連城に値す、余云ふ、學士言を出だす孟浪に非ず、古人酒に換へて涼州を得たり、饒齋又、雲煙吞吐す阿波の海の句あり、更に妙。

竹庵、古鏡を市ひ得たり、徑り五寸五分、背に八乳を作る、銘は長宜子孫の四字、外輪に鳥獸の形を具す、題句二十八字、新善同あり丹陽に出づの語あり、文字透徹秀潤掬す可し、眞に莽の時の物なり、寬齋先生、歌を作りて贈りて云ふ、竹庵主人篤く古を好む、古鏡を購買して手摩撫す、背に二十八字の銘あり、知る是れ製造新莽に出づるを、新莽は篡賊、論するに足らず、唯、愛す此の物百世存するを、鍊銅鎔範精にして且巧、數へず周舜と商尊と、何ぞ況や唐宋百鍊鏡、揚州の長吏使令を費す、徒に鑄る飛天九五龍、古雅溫潤竟に競はず、我に同病あり老ひて未だ休まず、收藏爲めに築く寶月樓、一十五鏡愧ちて死

老未休、收藏爲築寶月樓、一十五鏡愧欲死、  
野鶴雞羣豈、儻嗚呼他人稱好事、多蓄燕  
石矜俗子、安知主人眞賞鑒、心醉在此一小  
器。

老杜品鄭虔畫云、滄洲動玉陛、宣鶴誤一響、  
今畫院狩法眼寬信、蓋近焉、法眼陪侍無閒、  
歸家則畫絹塞屋、將應需之不給、猶能分意  
吟咏、使余削潤之、縱步近村云、煙淡春畦十  
里餘、拖筇閒步夕陽初、落梅疎竹田家裏、聽  
取琅琅兒誦書、春晚云、日射西窓送晚霞、焚  
香閒看篆煙斜、鈎簾欲放梁間燕、却怯傷心  
看落花、皆極可愛。

余叨蒙官醫竿齋石君知遇、一日告余曰、曩  
在峽時、有一門生喬貞寬字子宥、才敏言訥、

せんと欲す。野鶴雞羣豈に儻を同じくせんや、嗚呼他人  
好事と稱す、多く燕石を蓄へて俗子に矜る、安ぞ知らん  
主人眞の賞鑒、心醉此の一小器に在るを。」

老杜鄭虔の畫を品して云ふ、滄洲、玉陛に動く、宣鶴誤り  
て一響、今の畫院狩法眼寬信、蓋近し、法眼陪侍、閒なし、  
家に歸れば則畫絹屋に塞つ、將に需に應ずる之れ給せざ  
らんとす、猶能く意を吟咏に分つ、余をして之れを削潤  
せしむ、近村に縱步するに云ふ、煙は淡し春畦十里餘、筇  
を拖き閒歩す夕陽の初、落梅疎竹田家の裏、聽取す琅々  
として兒の書を誦するを、春晚に云ふ、日、西窓を射て晚  
霞を送る、香を焚て閒に看る篆煙の斜なるを、簾を鈎し  
て梁間の燕を放たんと欲す、却て怯る傷心、落花を看る  
を、皆極めて愛す可し。

余叨りに官醫竿齋石君の知遇を蒙る、一日余に告げて  
曰、曩に峽に在る時、一門生喬貞寬字は子宥あり、才敏言  
訥、忠を我術に専ふし、兼て文藻を愛す、齡縱に弱を過ぎ

厚思我術兼愛文、漢齡纔過弱、溢爲異物、其  
 父猶在、若能替予傳其遺詩、則請車之憾可  
 以小慰矣、余謹許諾、乃就其稿錄存二首、憶  
 友云、昨宵雲翳月、今曉雨滋苔、片片桃花落、  
 雙雙燕子來、音書半春阻、懷抱幾時開、誰識  
 蓬蒿裏、久埋仲蔚才、客至云、雨後千峯綠、斬  
 新入戶來、禽鳴藏密樹、花落印深苔、迎客移  
 菜局、呼童命酒盃、陶然對終日、幽興爲君開、  
 其人其詩、秀而不實、殊爲可惜、  
 北勢才子村田明、字月渚、號水菘、家資甚殷、  
 雅好文墨、以吟詩自娛、其百絕句、近已行世、  
 舉其尤者、惜花云、春來一日無晴好、一日纔  
 晴春欲空、又是閑愁亂難埋、小樓三面落花  
 風、秋曉云、蟲聲破夢喚清愁、殘月曉風涼意

溢として異物と爲る、其父猶在り、若し能く予に替りて  
 其遺詩を傳へば、則請車の憾、以て小しく慰す可しと、余  
 謹んで許諾す、乃其稿に就て二首を録存す、友を憶ふに  
 云ふ、昨宵雲、月を翳ふ、今曉雨苔を濕す、片々桃花落ち、  
 雙々燕子來る、音書半春阻つ、懷抱幾時か開かん、誰か識  
 らん蓬蒿の裏、久しく仲蔚の才を埋むるを、客至るに云  
 ふ、雨後千峯綠に、斬新、戸に入りて來る、禽鳴いて密樹  
 に藏れ、花落ちて深苔に印す、客を迎へて菜局を移し、童  
 を呼んで酒盃を命ず、陶然對して日を終ふ、幽興君が爲  
 に開く、其人其詩秀で、實のらず、殊に惜む可しと爲す。

北勢の才子村田明、字は月渚、水菘と號す、家資甚殷なり、  
 雅より文墨を好む、吟詩を以て自ら娛む、其百絕句、近こ  
 ろ已に世に行はる、其の尤なる者を擧ぐ、花を惜むに云  
 ふ、「春來一日晴の好なし、一日纔に晴るれば春空しから  
 んと欲す、又是れ閑愁亂れて理し難し、小樓三面落花の  
 風、秋曉に云ふ、蟲聲夢を破りて清愁を喚ぶ、殘月曉風  
 涼意稠し、巖桂未だ謝かず蓮已に謝す、秋空は只碧牽牛

稠、巖桂未開、遠已謝秋容、只在碧牽牛、鎌倉  
 山中云、健竹行行穿翠微、綠苔滿地履痕稀、  
 山深柳絮錯時節、過了三春、始解飛、今方弱  
 冠、而吐屬如此、特奉杜陸、手自糊、二家詩於  
 齋壁上、遂扁曰杜陸堂、蓋做袁氏白蘇齋也、  
 又倩因是爲作堂記、其趨向可想矣、余聞村  
 田氏家世崇佛、長齋、竟歲、素不喜儒者、而後  
 嗣生此等文種人、可謂五天出麟哉、但北勢  
 今日詩派多出、余及如亭兩人、獨月渚則出  
 於詩佛、未爲全無佛緣也、

月渚暮春云、孤鶯盡意喚幽叢、人坐書窓寂  
 寞中、垂柳溪頭朝雨綠、飛花門外晚風紅、一  
 春行樂多兒戲、近日詩情似夢空、挽住韶光  
 苦無術、不知何處覓神通、金澤總宜亭云、倚

に在り、鎌倉山中に云ふ、健竹行々翠微を穿つ、綠苔滿地  
 履痕稀なり、山深くして柳絮時節を錯まる、三春を過了  
 して始めて飛ぶを解す、いと、今方に弱冠、而して吐屬此の  
 如し、特に杜陸を奉ず、手自ら二家の詩を齋壁上に糊し、  
 遂に扁して杜陸堂と曰ふ、蓋、袁氏の白蘇齋に倣ふなり、  
 又、因是を倩ひ、爲に堂の記を作らしむ、其趨向想ふ可し、  
 余聞く村田氏、家世、佛を崇び、長齋、歲を竟る、素より儒  
 者を喜ばずと、而して後嗣此等の文種人を生ず、五天麟  
 を出だすと謂ふ可きかな、但、北勢今日の詩派、多くは余  
 及び如亭兩人に出づ、獨、月渚は則詩佛に出づ、未だ全く  
 佛緣なしと爲さざるなり、

月渚の暮春に云ふ、孤鶯意を盡して幽叢に喚ぶ、人は坐  
 す書窓寂寞の中、垂柳溪頭朝雨緑に、飛花門外晚風紅な  
 り、一春の行樂、兒戲多く、近日詩情、夢の空に似たり、韶  
 光を挽住せんに術なきを苦む、知らず何の處にか神通を  
 覓のん、金澤の總宜亭に云ふ、危樓に倚過して萬念空し、

遍危樓萬念空、簷高四面盡清風、崇山峻嶺  
常欄出、蟹舍漁家隔柳通、古寺亂鴉鐘響後、  
雙橋斜日水聲中、賞心知否還宜夜、煙淡渚  
汀新月籠、有此巨作、絕句累百、亦屬割雞。

又有鈴木翁者、近質詩於詩佛、春日云、搭欄  
垂柳綠參差、獨春光得句遲、霞裏暮山知  
欲雨、明朝辜負踏青期、雨後園中即日云、散  
策園中雨霽初、風吹新竹綠齊舒、活東得氣  
知多少、已看沈雲滿小渠、翁名千邑號蘆洲、  
余昔年屢經會面、今六旬餘、方始學詩、可云  
枇杷著花。

千德基字子恭、晚景云、數點牛羊分路回、寒  
鴉聲裏夕陽頽、一家老屋嫌頹敗、紅蕙還能  
設色來、平井珥字雙玉、秋雨歎云、終夕妨眠

簷高して四面盡く清風、崇山峻嶺欄に當りて出で、蟹  
舍漁家柳を隔て、通ず、古寺の亂鴉鐘響の後、雙橋の斜  
日水聲の中、賞心知るや否や還て夜に宜しきを、烟淡く  
して渚汀新月籠む、此の巨作あり、絶句、百を累ぬ、亦割雞  
に屬す。

又、鈴木翁といふ者あり、近ごろ詩を詩佛に質す、春日に  
云ふ、「欄に搭する垂柳綠參差、獨春光を弄して句を得る  
こと遅し、霞は暮山を裏んで雨ならんと欲するを知る、  
明朝辜負す踏青の期、雨後園中の即日云ふ、「散策園中  
雨霽るゝ初、風は新竹を吹いて綠齊しく舒ぶ、活東氣を  
得る知んぬ多少ぞ、已に看る沈雲の小渠に滿つるを、翁  
名は千邑、蘆洲と號す、余、昔年屢、會面を経、今六旬餘、方  
に始めて詩を學ぶ、枇杷、花を著くと云ふ可し。

千德基字は子恭、晚景に云ふ、「數點の牛羊、路を分つて回  
る、寒鴉聲裡夕陽頽る、一家の老屋、頹敗を嫌ふ、紅蕙還て  
能く設色し來る、平井珥字は雙玉、秋雨の歎に云ふ、「終夕  
眠を妨げて枕頭に響く、天窓微白未た會て休せず、世間

擣枕頭、天窓微白未食休、世間誰似秋霖惡、  
 籬菊無情亦自愁、安達岫字雲栖夜熱云、炎  
 蒸入夜有餘權、何肯微風到枕邊、無賴蒲葵  
 手中扇、百揮不博半時眠、三人皆迤齋社中  
 後進能詩者、駸駸如此、可前程萬里矣。

石士譽書來曰、我兄順卿、舊從先生受業、先  
 生去勢之後、出贅于山中氏、不幸病瘵、終至  
 不起、臨終猶命以其遺詩、寄送先生、蓋望他  
 日採摘也、今舉篋中剩草、一併封上、若蒙選  
 擇、則足慰冥漠矣、其言悽惋、讀之欲慟、乃  
 二首以換絮酒之奠、晚秋云、數點寒鴉散、晚  
 風黃牛帶犢自歸、宮山村秋老無多景、只見  
 楓林一樣紅、病中云、藥鼎孤燈伴枕頭、病軀  
 何耐度、三秋、東家砧杵西家笛、夜夜併來助。

五山堂詩話卷六

誰か秋霖の惡しきに似、籬菊情なきも亦自ら愁ふ、安達岫字は雲栖、夜熱に云ふ、炎蒸夜に入りて餘權あり、何んぞ肯て微風、枕邊に到らん、無賴蒲葵手中の扇、百揮半時の眠に博せず、三人は皆迤齋社中の後進詩を能くする者、駸々此の如し、前程萬里なる可し。

石士譽書來りて曰、我兄順卿、舊と先生に従つて業を受く、先生、勢を去るの後、出で、山中氏に贅す、不幸にして瘵を病み、終に起たざるに至る、終りに臨みて猶其遺詩を以て先生に寄送するを命ず、蓋他日の採摘を望むなり、今、篋中の剩草を舉げて一併に封上す、若し選擇を蒙らば、則冥漠を慰するに足らんと、其の言悽惋、之れを讀んで慟せんと欲す、乃二首を録して、以て絮酒の奠に換ふ、晚秋に云、數點の寒鴉晚風に散す、黃牛、犢を帶びて自ら宮に歸る、山村秋老ひて多景なし、只見る楓林一樣の紅、病中に云ふ、藥鼎孤燈枕頭に伴ふ、病軀何ぞ耐へん、三秋を度るに、東家の砧杵西家の笛、夜々併せ來りて我が愁を助く、士譽又極めて詩に耽る、夏日田家に云ふ、秋田千頃碧空に連なる、雨は暗し辛々漢々の中、只草人

我愁士譽又極耽詩夏日田家云秧田千頃  
 碧連空雨暗芊芊漠漠中只有草人堪寂寞  
 依然獨戴敗天公冬郊矚目云鷓鴣白鷺認  
 林隲柿葉霜風吹稍稀冬野陰晴無定準走  
 雲飛雨忽斜暉有弟如此順卿不死順卿名  
 時甫士譽名幹甫。

問嘉瑞字芝生號可亭亦勢人曾經受業者  
 客歲負笈東下余爲薦入竹堤社頗以詩稱  
 春日云釀暖東風自在吹石闌于外雨晴時  
 欲絨綠萼梅花綻天把青藍染柳絲夜景云  
 晚潮送月蘊蘆叢一面波紋細細風啾唧蹄  
 漁舟未遠清光碎在橈痕中。

宮本球字求玉號茶村篁村之弟詩最新穎  
 近出都下人比之孟家少孤見古塚云老樹

の寂寞に堪ゆる有りて、依然として獨戴く敗天公、冬郊  
 矚目に云ふ、鷓鴣白鷺、林を認めて歸る、柿葉霜風吹いて  
 稍く稀なり、冬野の陰晴定準なし、走雲飛雨忽ち斜暉、と、  
 弟あること此の如し、順卿死せず、順卿名は時甫、士譽、名  
 は幹甫。

問嘉瑞、字は芝生、可亭と號す、亦勢人、曾て業を受くるを  
 經る者、客歲笈を負ふて東下す、余爲に薦めて竹堤社に  
 入らしむ、頗詩を以て稱せらる、春日に云ふ、暖を釀す東  
 風自在に吹く、石闌于外雨晴る、時、綠萼梅花の綻ぶを  
 絨せんと欲して、天、青藍を把りて柳絲を染む、夜景に云  
 ふ、晚潮月を送りて蘆叢を蘊す、一面の波紋細々、の風、  
 啾唧の蹄漁舟未だ遠からず、清光は碎けて橈痕の中に在  
 り。

宮本球、字は求玉、茶村と號す、篁村の弟、詩最新穎、近ごろ  
 都下に出づ、人之れを孟家の少孤に比す、古塚を見るに  
 云ふ、老樹攫むが如し、古塚の巔、封狐穴處已に幾年、斷徑

如擢古塚巔、封狐穴處已幾年、斷徑荒涼無人跡、墓門鶴去竟不還、當時挂劍亦是誰、冥漠之君那得知、野草離離猶泣露、半林烟雨有雉飛、反游仙云、三編蟠桃不可嘖、若爲謫墜在紅塵、果然天上無公道、月裏却容偷藥人、咏笋云、眞成君似我、矗立世相違、知是當何債、朝來自脫衣、摘句云、逸牛原草長、鳴雉野風溫、螢流秋水冷、犬吠曉雲深、讀書舌猶在、對俗腹長捫、烹煉詩傳道、飛昇夢學仙、皆妙。

詩禪、山亭夏日云、山色映軒蒼翠深、風琴奏韻答溪音、人間豈有涼如許、赤日炎塵午鏢金、夜雨云、夜窓雨撲芭蕉樹、恰似蒸浮臘脚鳴、聞到三更四更際、被渠裂盡漸無聲、每一

荒涼人跡なし、墓門鶴去りて竟に還らず、當時劍を挂くる亦是れ誰ぞ、冥漠の君那ぞ知ることを得ん、野草離々猶露に泣く、半林の烟雨雉の飛ぶあり、反游仙に云ふ、三たび蟠桃を竊む嘖る可らず、若爲んぞ謫墜して紅塵に在る、果然として天上に公道なし、月裏却て容る藥を偷む人、笋を咏するに云ふ、眞成に君、我に似たり、矗立世と相違ふ、知る是れ何の債に當つ、朝來自ら衣を脱す、摘句に云ふ、逸牛原草長し、鳴雉野風温なり、螢流れて秋水冷に、犬吠へて曉雲深し、書を讀む舌猶在り、俗に對して腹長く捫す、烹煉詩道を傳ふ、飛昇、夢に仙を學ぶ、と、皆妙。

詩禪、山亭夏日に云ふ、山色軒に映じて蒼翠深し、風琴韻を奏して溪音に答ふ、人間、豈涼の許の如き有らんや、赤日炎塵、午、金を鏢す、夜雨に云ふ、夜窓雨は撲つ芭蕉の樹、恰、秤を擧る臘脚の鳴るに似たり、聞いて三更四更の際に到りて、渠に裂き盡されて漸く聲なし、一篇出づる



篇出、風味益饒、所謂一瓣不如一瓣者。善庵、新年作云、五雨十風春最温、太平有象亦何論、千門作節松篁綠、幾處趁朝車馬喧、不用畊田歌帝力、只須學道答天恩、自知福分吾能勝、且著菜衣侍二尊、藹然經儒氣象、其所著孝經私記、今歲入鶴佐藤大道爲作序贊、其有至性、觀此末句、詢不虛也、其門又有鈴木讓者、號恭齋、學有樹立、詩亦自潔、秋夕池上云、林鴉歸盡晚涼生、閑就池頭眼忽明、赤日茅檐已屏氣、清風竹榻最多情、烟昏荷外魚頻躍、露滴柳梢蟬一鳴、爲覓新詩端坐久、滿身微冷覺衣輕、客中至日云、佳節飄零猶作客、小窓對酒且吟哦、還愁心爾無由理、又是添來一線多。

毎に、風味益饒し、謂はゆる一瓣は一瓣に如かざる者。善庵、新年の作に云ふ、「五雨十風春最温なり、太平、象あり亦何ぞ論ぜん、千門節を作して松篁緑に、幾處か朝を趁ふて車馬喧し、用ひず田を畊して帝力を歌ふことを、只、須く道を學んで天恩に答ふべし、自ら知る福分吾れ能く勝れるを、且、菜衣を著て二尊に侍す、藹然たる經儒の氣象、其の著す所の孝經私記、今歲鶴に入る、佐藤大道爲に序を作りて其の至性あるを贊す、此の末句を觀れば、詢に虚ならざるなり、其門に又鈴木讓といふ者あり、恭齋と號す、學、樹立あり、詩も亦自ら潔し、秋夕池上に云ふ、「林鴉歸り盡くして晚涼生ず、閑に池頭に就て眼忽明なり、赤日茅檐已に氣を屏む、清風竹榻最多情、烟昏して荷外魚頻に躍り、露滴りて柳梢蟬一鳴、新詩を覓ぐるが爲に端坐久し、滿身の微涼衣の輕きを覺ゆ、客中至日に云ふ、佳節飄零猶客と作る、小窓酒に對して且吟哦す、還て愁ふ心、繭理するに由なし、又是れ添へ來る一線の多きを。」

秋田世家、松塘匹大夫、名定綱字伯紀、柳塘大夫之子、兩世好學、絕非今之從政者、己己出都、屢蒙接遇、別後今已三年、追思爾時文酒之會、如信宿耳、北山先生、爲余見、示其小詩、謹抄以寓不諼之意、春曉云、何處鶯簧向曙天、一聲聲裏喚回眠、欲尋殘夢茫無迹、芳草池塘雨若煙、夏夜云、風搖簷竹夜涼輕、月上軒松秋氣生、一枕不知三伏熱、臥聞桐院轆轤聲、清脆自佳、余遂覓先大夫之詩、未有得、將待他日而錄之。

商榷古今詩文、只須虛心靜氣、持論平穩、不至偏頗、然後人自服、苟挾私見、仇敵相視、則嘗罵詆訶、只恐聲低、不至攘臂相鬪者、幾希矣、不啻人不服、祇足招其激耳、近日此風儘

秋田の世家、松塘匹大夫、名は定綱字は伯紀、柳塘大夫の子、兩世、學を好み、絶えて今の政に従ふ者に非ず、己己都に出づ、屢、接遇を蒙る、別後今己に三年、爾時の文酒の會を追思すれば、信宿の如きのみ、北山先生、余が爲に其の小詩を示さる、謹んで抄して以て諼れざるの意を寓す、春曉に云ふ、何の處の鶯簧か曙に向ふ天、一聲々裏、眠を喚び回す、殘夢を尋ねんと欲するに茫として迹なし、芳草池塘、雨、煙の如し、夏夜に云ふ、風、簷竹を搖かして夜涼輕し、月、軒松に上りて秋氣生す、一枕知らず三伏の熱、臥して聞く桐院轆轤の聲、清脆自ら佳なり、余遂に先大夫の詩を覓む、未だ得ること有らず、將に他日を待ちて之れを録せんとす。

古今の詩文を商榷する、只須く虚心靜氣、持論平穩にして偏頗に至らざるべし、然して後人自ら服す、苟、私見を挾んで仇敵相視るときは、則嘗罵詆訶、只、聲の低きを恐る、臂を攘て相鬪ふに至らざる者幾んど希なり、嘗、人の服せざるのみならず、祇に其激を招くに足るのみ、近

有、太覺薄俗、昔錢虞山指、趙李何王李、信口屬盡、至謂讀書種子從此斷絕、虞山身後、其所鑿諸書、舉遭撕毀、雖是爲名教獲罪、亦不爲無恃言之陰報也、書以爲好屬者之戒。

箱根山中、所有溫泉、無慮六七、蘆湯最清奇、攢峰亂嶺、人居其間、殆有洞天之想、今辛未秋、詩佛、綠陰、淡齋諸人、拉可菴文一二畫客、去遊其處、綠陰、淡齋、相謀立石、勸同遊諸作、詩佛書字、石背作魁星像、二客各寫一星、更煩文晁補找一星、北山先生作文記其上面、亦韻事也、諸作不能悉錄、僅抄綠陰、淡齋二詩、淡齋云、涼意生時雨、政收逐風雲、脚去如流、東南一角山才缺、展出蒼波萬頃秋、綠陰云、雲影乍昏還乍明、山村一日幾陰晴、霏微

日此風儘、有、太だ薄俗を覺ゆ、昔、錢虞山、李何王李を指摘して、口に信せて罵盡す、讀書の種子此より斷絶すと謂ふに至る、虞山身後、其鑿する所の諸書、舉く撕毀せらる、是れ名教の爲に罪を獲ると雖、亦恃言の陰報なしと爲さず、書して以て罵を好む者の戒と爲す。

箱根山中、有る所の溫泉、無慮六七、蘆湯最清奇、攢峰亂嶺、人、其間に居る、殆んど洞天の想あり、今辛未の秋、詩佛、綠陰、淡齋諸人、可庵文一の二畫客を拉して、去りて其處に遊ぶ、綠陰、淡齋、相謀りて石を立て同遊の諸作を勸す、詩佛、字を書す、石背、魁星の像を作り、二客各、一星を寫す、更に文晁を煩はして一星を補找す、北山先生、文を作りて其上面に記す、亦韻事なり、諸作、悉く錄すること能はず、僅に綠陰、淡齋の二詩を抄す、淡齋に云ふ、涼意生する時雨政に收まる、風を逐ふ雲脚去りて流るゝが如し、東南一角山才に缺く、展し出す蒼波萬頃の秋、綠陰に云ふ、雲影乍昏くして還た乍明なり、山村一日幾陰晴、霏微たる空翠家々の雨、檐角時々滴りて聲を作す、綠陰歸途、又六合渡を過る一絶あり、云ふ、渡頭水退て、人渡を争ふ、一葉の舟危くして瞻察からんと欲す、驚き看る

○按、康  
熙字典、康  
熙字、康  
熙、俗音  
不足、  
曰找補

空翠家家雨、檐角時時滴。作聲綠陰歸、途又有過六合渡。一絕云、渡頭水退人爭渡、一葉舟危膽欲寒。驚看前回沽酒處、壁間半濕漲痕殘、亦自可喜。

余客遊關西數歲、丙寅治裝將歸、途稽吉田、月殆過兩輪、秋筠相知最深、提其後進、從余取調、詩酒談讌、無日不歡、其中高立卓公、龜遜脩來二子、才思出群、余已歸都、秋筠以已己來、托以二子詩、其稿未屆之間、秋筠聞母訃歸、尋而身亦殞、從此每念及吉田、胸襟作惡、擱筆不復問、今歲二子書至、輒然責余緩慢、餘整然自警、遂起錄其詩、以謝吾過、高久雨晚晴云、雨聲幾日繞簷聽、際晚西邊忽現青、捲盡癡雲天似洗、銀蟾閑伴兩三星、風雨

前回、酒を沽ふ處、壁間半ば濕ふて漲痕殘す、亦自ら喜ぶ可し。

余關西に客遊すること數歲、兩寅裝を治めて將に歸らんとす、途、吉田に稽すること、月、殆ど兩を過ぐ、輪秋筠相知ること最深し、其後進を提して余に従ひて調を取る、詩酒談讌、日として歡せざるはなし、其中高立卓公、龜遜脩來二子、才思出羣、余已に都に歸る、秋筠は已己を以て來る、托するに二子の詩を以てす、其稿未だ屆らざるの間、秋筠母の訃を聞て歸る、尋で身亦殞す、此より、念、吉田に及ぶ毎に、胸襟惡を作す、筆を擱して復問はず、今歲二子書至る、輒然として余が緩慢を責む、余整然として自ら警む、遂に起て其詩を録し、以て吾過を謝す、高の久雨晚晴に云ふ、雨聲幾日か簷を繞りて聽く、晚に際して西邊、忽青を現す、癡雲を捲き盡くして天洗ふに似たり、銀蟾閑に伴ふ兩三星、風雨重陽に近しに云ふ、茅堂獨坐昏黃を守る、奈ともせず東籬風雨の狂するを、天公に隨

近重陽云、茅堂獨坐守昏黃、不奈東籬風雨  
狂、賤訴天公須斂手、辛苦栽菊爲重陽、龜春  
晚出遊云、人家綠暗蝶猶飛、嫩日輕風適袂  
衣、怪底餘春還有雪、長堤開遍白薔薇、秋夜  
云、虛堂爽氣近三更、獨坐披書伴短檠、月影  
將生雲影淡、亂葦如雨滿階聲、高初名暹、號  
麴堂、余嘗爲其作堂記。

偶閱石湖集、將至吳中、親舊多來相逐、感懷  
有作云、望見家山意欲飛、古來燕晉一沾衣、  
回思客路豈非夢、乍聽鄉音真是歸、新事略  
從年少問、故人差覺坐中稀、不須更說桑榆  
晚、霜後鱸魚也自肥、情深之語、使人三覆、孰  
謂宋詩短於言情乎、諸抄不及、故表出之。

學詩有二多、多讀多作之謂也、然今日讀詩、

訴す須く手を斂むべし、辛苦して菊を栽るは重陽の爲なり、龜、春晚出遊に云ふ、「人家綠暗くして蝶猶飛ぶ、嫩日輕風、袂衣に適す、怪底、餘春還有雪あるを、長堤開き遍し白薔薇、秋夜に云ふ、「虛堂の爽氣三更に近し、獨坐書を披きて短檠に伴ふ、月影將に生ぜん」とす、雲影淡し、亂葦雨の如く階に滿つる聲」と、高初の名は暹、麴堂と號す、余嘗て其の爲に堂の記を作る。

偶、石湖集を閲するに、將に吳中に至らんするに、親舊多く來りて相逐ふ、感懷、作あり、云ふ、「家山を望み見て意飛ばんと欲す、古來燕晉一に衣を沾す、客路を回思すれば豈夢に非ずや、乍ち鄉音を聽て眞に是歸、新事略、年少に従つて問ふ、故人差、覺ゆ坐中に稀なるを、須ひす更に桑榆の晚を説くことを、霜後の鱸魚也自ら肥へたり」と、情深の語、人をして三覆せしむ、孰か宋詩、情を言ふに短なりと謂ふや、諸抄及ばず、故に之れを表出す。

詩を學ぶに二多あり、多讀多作を謂なり、然れども今日

徒有摘生奇語、思供作料、不問意興所托、不省格律所在者、作詩、徒有釘飯字句、毫無音節、不用烹煉之功、不求琢磨之益者、皆所謂雖多亦奚以爲者矣、故多讀不如精讀、多作不如精作也。

詩者情所由發、苟無所興、則一月可不作、境致一到、則一日累幾篇、亦不爲多、若必以詩爲課、則天閔性靈、桎梏才情、粗率牽強之病、亦隨生焉、有一冬烘先生、日課七律一首、除夕客至、先生方盛張燭、端坐思詩、客問其故、先生曰、今年詩什、課數不足、要今夕償還以勾帳耳、吁、愚亦甚矣。

或問、目今諸家詩力強弱、次及寬齋先生、余曰、只是算放翁什一、不知其他、其人問故、余

詩を讀むに、徒に生奇の語を摘し、作料に供せんことを思ひ、意興の托する所を問はず、格律の在る所を省せざる者あり、詩を作りて徒に字句を釘飯し、毫も音節無く、烹煉の功を用ひずして琢磨の益を求めざる者あり、皆謂はゆる多しと雖、亦奚を以てせんといふ者なり、故に多讀は精讀に如かず、多作は精作に如かざるなり。

詩は情の由て發する所、苟も興する所なければ、則ち一月、作らざる可し、境致一たび到れば、則ち一日、幾篇を累ぬるも、亦多と爲さず、若し必ず詩を以て課と爲さば、則ち性靈を天閔し、才情を桎梏す、粗率牽強の病、亦隨て生ず、一の冬烘先生あり、日に七律一首を課す、除夕客至、先生方に益に燭を張り、端坐して詩を思ふ、客其の故を問ふ、先生曰く、今年の詩什、課數足らず、今夕償還して以て勾帳せんと要するのみと、吁、愚も亦甚し。

或る人目今の諸家の詩力の強弱を問ふ、次に寬齋先生に及ぶ、余が曰く、只是れ放翁の什一に算するのみ、其の他を知らずと、其の人、故を問ふ、余が曰く、翁云ふ、六十年

曰、放翁云、六十年間萬首詩、先生乃云、六十  
 今春加四年、作詩長短過千篇、非什一而何、  
 其人大笑、然西川國華今垂古稀、一年所作  
 不下千四五百首、則放翁詩力、亦恐算國華  
 什一矣。

東奥熊阪秀、字君實、號盤谷、家資巨萬、累世  
 好施、大父霸陵山人、頗喜禪理、好誦蘇黃詩、  
 至酒翁台州嗜學益深、藏書殆萬卷、自稱邑  
 中文不識、海內知名之士、無不交、投稿紵、盤  
 谷能繼箕裘、家聲赫著、近因國華見貽詩冊、  
 多係唱酬唐和之作、僅錄中秋無月一律云、  
 雨冷風淒雲作堆、嫦娥潛影鎖瑤臺、苦吟懶  
 覓新詩句、薄醉強傾濁酒盃、園裏只聞梨葉  
 戰、天邊不見桂花開、通宵懊惱難成睡、又到

開萬首の詩」と、先生乃ち云ふ、「六十今春四年を加ふ、詩  
 を作りて長短千篇を過ぐ」と、什一に非ずして何ぞと、其  
 の人大に笑ふ、然れども西川國華、今古稀に垂んとす、一  
 年の作る所千四五百首に下らず、則ち放翁の詩力、亦恐  
 らくは國華の什一に算せん。

東奥の熊阪秀、字は君實、盤谷と號す、家資巨萬、累世、施を  
 好む、大父霸陵山人、頗る禪理を喜び、好んで蘇黃の詩を  
 誦す、迺翁台州に至て、學を嗜むこと益、深く、藏書殆んど  
 萬卷、自ら邑中の文不識と稱す、海内知名の士、稿紵を交  
 投せざるは無し、盤谷能く箕裘を繼ぐ、家聲赫著、近ごろ  
 國華に因て詩冊を貽らる、多く唱酬唐和の作に係る、僅  
 に中秋無月の一律を録す、云ふ、「雨冷に風淒にして雲、堆  
 を作す、嫦娥影を潛めて瑤臺を鎖す、苦吟覺るに懶し新  
 詩句、薄醉強いて傾く濁酒の盃、園裏只聞梨葉の戦ぐ  
 を天邊見ず桂花の開くを、通宵懊惱して睡を成し難し、  
 又、睡前曙色の回るに到る、亦善く唐明を學ぶ者なり。

簾前曙色回、亦善學唐明者。

余之遊奥、雖云竟歲、往來路上亦忽忽耳、名蹟韻士、一不及訪、悉付興夢之間、青木金山近遊其地、搜索殆遍、歸來屢笑余疎脫、其中今市東光寺斷碑與盛岡島子憲之詩、爲其最所夸稱、斷碑搨本、寬齋先生已取入金石目錄、子憲之詩、我不得、不奪置話中、亦聊存琴朕之意、云、子憲名文垂、號快齋、遊武南戶二絕云、霜晴喚我步山蹊、行度盤桓倚杖藜、忽到溪間天地別、人家住在水東西、山村冬暖不堪佳、一罩煙開畫裏家、將謂林櫛春正晚、風翻霜葉作飛花、又聞子憲唱和之友、更有木進卿茂德、未及得其詩、隴今已入手、明年亦將尋收蜀。

余の奥に遊ぶ、歳を竟ると云と雖、往來路上亦忽々のみ、名蹟韻士、一も訪ふに及ばず、悉く興夢の間に付す、青木金山、近ごろ其の地に遊ぶ、搜索始んど遍し、歸り來て屢、余が疎脫を笑ふ、其の中、今市東光寺の斷碑と盛岡の島子憲の詩とは、其の最夸稱する所と爲す、斷碑の搨本、寬齋先生已に取て金石目錄に入る、子憲の詩、我れ奪ふて話中に置かざることを得ず、亦聊、琴朕の意を存すと云ふ、子憲名は文垂、快齋と號す、武南戶に遊ぶ二絶に云ふ、霜晴れて我を喚で山蹊に歩せしむ、行、盤桓を度りて杖藜に倚る、忽ち溪間に到れば天地別なり、人家は住して水の東西に在り、山村冬暖かにして佳に堪へず、一罩煙は開く畫裏の家、將に謂はんとす、林櫛春正に晚しと、風は霜葉を翻へして飛花と作す、又た聞く子憲唱和の友、更に木進卿茂德有りと、未だ其の詩を得るに及ばず、隴、今已に手に入る、明年亦將に尋ねて蜀を收めんとす。



高田室方高字子山、刻苦作詩、自號詩瘦、吟筒相寄、殆無虛月、晚春雜興云、幽窓寂寞坐、春深、纔綴書、懶又侵、芥圃開花釀、辛味、梅園垂子結酸心、忘憂酒只宜微醉、得意詩來、自苦吟、日永如年消不得、更移茶竈就松陰、春寒云、惻惻春寒去復來、爐頭癡坐欲呼盃、一園紅紫無消息、三尺盆中出舊梅、皆爲平生出色之作。

桑原道、字文友、號琴水、阿波人、介木鳴門、從余學、詩、客夜云、燈前歌不寐、坐到五更頭、月落潮聲壯、雨淋蟲韻愁、歸兮菊存徑、倦矣客登樓、桂玉真無奈、經年嗟滯留、田家留客云、村酌聊復勸、三盃金橙堆盤欠、鱸材只有月光供、給客故將松影上牀來、文友又薦其鄉

高田の室方高、字は子山、刻苦して詩を作る、自ら詩瘦と號す、吟筒相ひ寄す、殆んど虚月無し、晚春雜興に云ふ、幽窓寂寞春深に坐す、纔に鎌書を綴めて、懶又た侵す、芥圃花を開いて辛味を釀し、梅園子を垂れて酸心を結ぶ、忘憂の酒は只微醉に宜く、得意の詩は苦吟より來る、日永くして年の如く消し得ず、更に茶竈を移して松陰に就く、春寒に云ふ、惻々の春寒去て復た來る、爐頭癡坐して盃を呼べんと欲す、一園の紅紫消息無し、三尺の盆中舊を出る梅、皆平生出色の作と爲す。

桑原道字は文友、琴水と號す、阿波の人、木鳴門を介して、余に從ふて詩を學ぶ、客夜に云ふ、燈前歌として寝ねられず、坐して五更の頭に到る、月落ちて潮聲壯に、雨淋りて蟲韻愁ふ、歸らんか菊、徑に存す、倦めり客、樓に登る、桂玉真に奈んともする無し、徑年、滯留を嗟す、田家、客を留るに云ふ、村酌聊か復た三盃を勸む、金橙盤に堆くして鱸材を欠く、只、月光の客に供給する有り、故に松影を將て牀に上せ來る、文友、又其の郷友福田延興字は

友福田延興字子功、來行東脩、未一月歸鄉矣、僅省記其客中之作一首、夏日泛舟云、買舟半日水雲鄉、苦熱羈愁兩欲忘、歡伯欺人樽易罄、歌兒媚客曲偏長、樓樓迎夜燈光鬧、院院借秋簾影涼、最是揚州腸斷處、橋頭烟淡月蒼茫。

山本清溪、投示一詩冊、曰、亡姪名正剛、字士毅、號筠溪、自幼嗜詩、蕪詞成堆、中年下世、詩多散失、其存者僅僅止此、一片心血、吾不忍埋沒、先生幸爲存之、余錄其春雨、云、昨來春雨鎖柴荆、泥巷無人絕送迎、香枕簾低籠霧氣、茶鑪室小送灘聲、山莊野寺花須綻、村路池塘草復生、明曉探芳曾有約、喜聞鳩婦喚新晴、冬日牡丹云、國色依然霜雪中、花開何

子功を驚め、來りて東脩を行ふ、未だ一月ならずして郷に歸れり、僅に其の客中の作一首を省記す、夏日泛舟に云ふ、舟を買ふ半日水雲の郷、苦熱羈愁ながら忘れんと欲す、歡伯人を欺いて樽罄き易し、歌兒、客に媚びて曲偏に長し、樓々夜を迎へて燈光鬧に、院々愁を借りて簾影涼し、最是れ揚州腸斷する處、橋頭烟淡くして月蒼茫。

山本清溪、一詩冊を投示して曰く、亡姪名は正剛、字は士毅、筠溪と號す、幼より詩を嗜む、蕪詞堆を成す、中年下世し、詩多く散失す、其の存する者僅々此に止る、一片の心血、吾れ埋没するに忍びず、先生幸に爲に之を存せよと、余其の春雨を録す、云ふ、昨來春雨柴荆を鎖す、泥巷人無く送迎を絶す、香枕簾低れて霧氣を籠む、茶鑪室小にして灘聲を送る、山莊野寺花須く綻ぶべく、村路池塘草復た生ず、明曉芳を探る會て約有り、聞くことを喜ぶ鳩婦新晴を喚ぶを、冬日牡丹に云ふ、國色依然たり霜雪の中、花開く何ぞ必しも春風を待たん、嬌紅粉白肌に粟無し、

必待春風、嬌紅粉白肌無粟、笑殺隋家裁剪工、客夜云、天外三秋鴈、燈前萬里人、湖上秋夕云、寒杵山村近、昏鴉城樹多。

醉石云、有閨秀多田氏者、安永間人也、名順字季婉、誦書吟詩、極有青衿風、常愛讀資治通鑑、其遺詩名綽約集、繡梓無人、將盡篋底、其及知季婉者、意欲情君手、提取數首、挿詩話中、以圖不朽、余遽取其集、讀之、眞女丈夫詩也、遂就中抄稍優柔者、以酬其意、夜坐云、靜夜憑軒坐、春風衣袖寒、孤貧人易厭、多苦自難寬、柳暗煙初淡、花明月未殘、笙歌何處起、空憶昔時歡、春日云、春風戶外一株梅、獨向花前吟幾回、自是無人問孤寂、鶯聲何事報優來、暮春有感云、憔悴花前自恨春、花開

笑殺隋家裁剪工、客夜に云ふ、天外三秋の鴈、燈前萬里の人、湖上の秋夕に云ふ、寒杵山村近し、昏鴉城樹多し」と。

醉石云ふ、閨秀多田氏といふ者有り、安永間の人なり、名は順字は季婉、書を誦し詩を吟じ、極めて青衿の風あり、常に資治通鑑を讀むことを愛す、其の遺詩を綽約集と名づく、繡梓、人無く、將に篋底に盡せんとす、其の季婉を、知るに及ぶ者、意、君の手を借ふて、數首を提取し、詩話中に挿み、以て不朽を圖らんと欲すと、余遽に其の集を取て之を讀むに、眞に女丈夫の詩なり、遂に中に就て稍、優柔なる者を抄して、以て其の意に酬ゆ、夜坐に云ふ、靜夜軒に憑て坐す、春風衣袖寒し、孤貧、人厭ひ易く、多苦自ら寬ふし難し、柳暗くして煙初めて淡く、花明にして月未だ殘せず、笙歌何の處にか起る、空しく憶ふ昔時の歡、春日に云ふ、春風戶外一株の梅、獨り花前に向つて吟すること幾回、自らはれ人の孤寂を問ふ無し、鶯聲何事ぞ儂に報じ來る、暮春感あるに云ふ、憔悴花前自ら春を恨む、花開き花落ちて白頭新なり、顛狂の柳絮今相似たり、昔日深窓雪を咏する人、秋日郊行に云ふ、一徑蕭條水に

花落白頭新顛狂柳絮今相似、昔日深窓咏  
 雪人、秋日郊行云、一徑蕭條沿水斜、炊煙遙  
 認兩三家、荒邨落日稀、人語無限秋風動、稻  
 花、其負抱可想者、偶成一絕云、嘗將筆硯、學  
 男兒、不趁春風試粉脂、天壤王郎空有恨、謝  
 家門巷落暉時。

麻姑以米擲地、皆成丹砂、方平笑曰、姑故年  
 少也、吾老矣、不喜復作如此狡獪變化也、是  
 上等仙人不貴奇也、今之詩流、只圖出奇以  
 嚇人、我恐被方平笑矣、王弇州云、奇過則凡、  
 知言哉。

周益公跋誠齋詩云、大篇短章七步而成、一  
 字不改、皆掃千軍、倒三峽之語、至于狀物姿  
 態、寫人情意、則鋪敘纖悉、曲盡其妙、筆端有

沿ふて斜なり、炊煙遙に認む兩三家、荒邨落日人語稀な  
 り、限り無き秋風稻花を動かす、其の負抱想ふ可き者  
 は、偶成の一絶に云ふ、嘗て筆硯を將て男兒を學ぶ、春風  
 を趁ふて粉脂を試みず、天壤王郎空しく恨み有り、謝家  
 の門巷落暉の時。」

麻姑、米を以て地に擲つに、皆丹砂を成す、方平笑つて曰  
 く、姑故に年少なり、吾れ老ひたり、復た此の如き狡獪變  
 化を作すを喜はざるなりと、是れ上等の仙人奇を貴はさ  
 るなり、今の詩流、只奇を出だして以て人を嚇せんこと  
 を圖る、我れ恐らくは方平に笑はれん、王弇州云ふ、奇過  
 ぐれば則ち凡と、知言なるかな。

周益公、誠齋の詩に跋して云ふ、大篇短章七步にして而  
 して成る、一字改めず、皆千軍を掃ひ三峽を倒するの語  
 なり、物の姿態を狀し人の情意を寫すに至りては、則ち  
 鋪敘纖悉、曲に其の妙を盡す、筆端口あり、句中眼ありと、

ノ口、句中有眼、可謂善論誠齋矣、余又謂、誠齋胸中別有一冶爐、金銀銅錫皆鎔而出之、但一氣所噓、間有鑄敗者、讀其全集、須以此意觀、今人學誠齋者、胸中初不具一爐、而漫然鑄物、宜其無一成形者也、

上毛河君、觀村莊、在南牧山中、園中有普巖室、獅子峰、園外有水、曰龍溪、皆爲潮音禪師栖迹、米菴少時有溪園、法苑龍蟠勢、峯擁佛門、獅踞姿之句、景象可想、愛蓮有題普巖室和音師韻二絕、云、開士說禪獅子巖、一聲獅吼震巉嵌、巖頭尙現當時相、落日秋風響老杉、一偈初開智慧花、定珠元是絕微瑕、普巖只逗真如月、不見枯禪打結腳、寬齋先生亦題云、一間禪室傍巖幽、此處潮公杖舊留、詩

善く誠齋を論ずとふ可し、余又謂へらく、誠齋胸中、別に一冶爐あり、金銀銅錫、皆鑄して而して之を出だす、但、一氣噓する所、間、鑄敗の者あり、其の全集を讀む、須らく此の意を以て觀るべし、今人の誠齋を學ぶ者、胸中初より一爐を具せずして、而して漫然、物を鑄る、宜なり其の一成形のもの無き、

上毛の河君、觀の村莊、南牧山中に在り、園中普巖室、獅子峰あり、園外水有り、龍溪と曰ふ、皆、潮音禪師の栖迹たり、米菴少時、溪は法苑を圍む龍蟠の勢、峯は佛門を擁す獅踞の姿、の句有り、景象想ふ可し、愛蓮、普巖室に題し、音師の韻を和する二絶有り、云ふ、開士、禪を説く獅子巖、一聲の獅吼、巉嵌に震ふ、巖頭尙は當時の相を現して、落日秋風、老杉に響く、一偈初めて開く智慧の花、定珠元是れ微瑕を絶つ、普巖只、真如の月を逗し、見す枯禪の結脚を打するを、寬齋先生も亦題して云ふ、一間の禪室、巖の幽なるに傍ふ、此の處潮公杖舊と留む、詩、偈猶ほ當日の韻を餘まして、夜風吹き落つ石溪の流、君觀の家は實に

偈猶餘。當日韻。夜風吹落石溪流。君設家實爲先生原族。其高祖某。湛深禪理。歸依音師。天享間人。

余昔歲有送島梅外遊信。中詩云。二瘦多年賦。北遊山奇水麗。總相酬。信中元與詩爲地。不遇島家。便得休。近今信中詩人之盛。雲蒸霞起。如江自芳蘭腸。山靜太古須田。勤子稷。國自有名手。不須假他。殆所謂江南金錫。不復爲用者矣。蘭腸春日云。日烘籬額。漏聲遲。一鼎茶煙細似絲。雪白梨花春寂寞。香風爛醉小貓兒。春夜云。玉蟲影冷枕屏寒。幽夢和詩未便殘。裂帛一聲天欲曉。杜鵑飛過小欄干。太古夏日云。亭午焦天日氣紅。槐西有路夢纔通。覺來窓下無殘照。綠動芭蕉一扇

先生の原族たり、其の高祖某禪理に湛深し、音師に歸依す、天享間の人なり。

余昔歲、島梅外の信中に遊ぶを送る詩あり、云ふ、「二瘦多年北遊を賦す、山奇水麗、總べて相ひ酬ゆ、信中元と詩と地を爲す、島家に遇はずんば便や、休することを得んや、」近今、信中詩人の盛なる雲蒸霞起、江自芳蘭腸、山靜太古須田、勤子稷の整の如き、國自ら名手あり、他を假ることを須ひず、殆んど謂はゆる江南の金錫、復た用を爲さざる者なり、蘭腸春日に云ふ、「日は籬額を烘りて漏聲遲し、一鼎の茶煙細くして絲に似たり、雪白の梨花春寂寞、春風爛醉、小貓兒、」春夜に云ふ、「玉蟲影冷にして枕屏和し、」幽夢詩に和して未だ便ち殘せず、裂帛一聲、天曉けんと欲す、杜鵑飛び過ぐ小欄干、「太古、夏日に云ふ、「亭午天を焦して日氣紅なり、槐西路有り夢纔に通ず、覺め來りて窓下殘照無し、綠は動く芭蕉一扇の風、秋晴に云ふ、「水天一色雨初て收る、天外の雲山水上に浮ぶ、今古幾人か此の景を同うす、閑吟倚り遍し夕陽の樓、」子稷、客中首夏に云ふ、「今朝早く已に春衣を換ふ、杜宇人を催して猶

風、秋晴云、水天一色、雨初收、天外雲山水上  
 浮、今古幾人同、此景、閑吟倚、遍夕陽樓、子稷  
 客中、首夏云、今朝早已換、春衣、杜宇催、人猶  
 未歸、只有薰風來解悶、舍前舍後野薔薇、睡  
 起六言云、夢回山月如洗、酒醒水風頓涼、知  
 是睡中過雨、秋生一面荷香、清詞腹句、皆越  
 流俗、聖誕每對、余稱、初此三人、實詩壇之選  
 也。

山極盤、字鴻人、號吉堂、上侯遊、信中、以詩爲  
 其館客、忽介、上侯來、蒙相見、春晚云、老白殘  
 紅、送寂寥、落花時節、雨連宵、何方、情得春寒  
 力、更駐韶光、三四朝、冬日遊、山寺云、寺前寺  
 後、削重峰、栖鶻歸來、雪後松、半日、浮生閑未  
 了、夕陽先報一聲鐘、清絕可愛、聞吉堂、驛鄉

二六  
 未だ歸らず、只、薰風の來て悶を解く有り、舍前舍後の  
 野薔薇、睡起六言に云ふ、夢回て山月洗ふが如し、酒醒  
 めて水風頓に涼し、知る是れ睡中の過雨、秋は生ず一面  
 の荷香、と、清詞腹句、皆流俗に越ゆ、聖誕、毎に余に對し  
 て此の三人を稱揚す、實に詩壇の選なり。

山極盤、字は鴻人、吉堂と號す、上侯、信中に遊ぶ、詩を以て  
 其の館客と爲る、忽ち上侯を介して來りて相見を蒙る、  
 春晚に云ふ、老白殘紅寂寥を送る、落花の時節、雨連宵、何  
 の方か春寒の力を情ひ得て、更に韶光を駐むること三四  
 朝ならん、冬日、山寺に遊ぶに云ふ、寺前寺後重峰削、  
 栖鶻歸り來る、雪後の松、半日浮生閑未だ了せず、夕陽先  
 づ報す一聲の鐘、清絶愛す可し、聞く吉堂、郷人を驅りて  
 文墨に就かしめ、誘掖置かずと、最美事たり、又其社に僧

人説文墨、誘掖不置、最爲美事、又其社有僧  
 拙庵、工詩善書、訪細庵客居、一絕云、枯藤踏  
 月夜敲門、一夜清吟、役盡魂、多謝春風吹不  
 斷、梅花香裏坐、輕溫、細庵上侯別號也。

上侯五律、有絕佳者、如秋夜云、夜靜人孤坐、  
 秋深衣未成、何堪青女冷、只愛素娥明、露草  
 寒蛩語、風林落葉聲、我心原匪石、萬感一時  
 生、客中歲晚云、豈無霜雪嘆、急景水東流、波  
 響頻妨夢、燈花暗結愁、客遊一年盡、旅食幾  
 時休、東道故人在、浮萍好暫留、寄兄云、團圓  
 能幾日、空度異鄉秋、采蕨期空在、陟岡詩未  
 酬、不知山路險、孰與世途憂、風雨相思夕、連  
 牀愧子由、皆得放翁神味。

百年、宿志不諧、動有翟公之歎、其感懷詩云、

拙庵有り詩を工にし書を善くす、細庵の客居を訪ふ一絶  
 に云ふ、「枯藤月を踏んで夜門を敲く、一夜、清吟、魂を役  
 し盡す、多謝す春風吹き断えず、梅花香裏に輕温に坐す、」  
 細庵は上侯の別號なり。

上侯五律、絶佳なる者有り、秋夜に云ふ、夜靜にして人孤  
 坐す、秋深くして衣未だ成らず、何んぞ堪へん青女の冷  
 なるに、只愛す素娥の明、露草寒蛩語り、風林落葉の聲、我  
 心原と石に匪ず、萬感一時に生ず、客中歲晚に云ふ、豈霜  
 雪の嘆無からんや、急景水東に流る、波響頻に夢を妨げ、  
 燈花暗に愁を結ぶ、客遊一年盡き、旅食幾時か休せん、東  
 道故人在り、浮萍好し暫留、兄に寄するに云ふ、團圓能く  
 幾く日ぞ、空くたる異郷の秋、采蕨期空しく在り、陟岡詩  
 風だ酬はず、知らず山路の險、世途の憂に孰與れぞ、風雨  
 相思の夕、連牀子由に愧づ、の如き、皆な放翁の神味を得  
 たり。

百年、宿志不諧せず、動もすれば翟公の歎あり、其の感懷の



華顛梳罷愧青銅、又是江城秋欲空、交態易  
疎才本拙、美言難、信計頻窮、暮雲家遠千山  
外、夜雨夢迷孤枕中、留滯七年歸未得、自甘  
身作寄居蟲、坎壤之情、隱然言外。

有人咏燕云、白玉堂前栖托穩、呢喃盡日復  
何愁、年年憐爾長爲客、不省人間夔頤侯、此  
用比體、蓋有所諷也。

柳灣讀隋紀云、千里春風堤柳斜、龍舟供奉  
盡宮娃、君王獨悔平陳日、枉剪青谿一朵花、  
音節風趣、自是中晚家數。

余嘗謂律詩猶古之雅頌也、七絕猶古之國  
風也、雅頌不如國風之感人之深也、大抵七  
絕之爲體、優游不迫、委婉有餘、性情之微、寄  
托之妙、外此而無可據者、風人之遺意、只此

詩に云ふ、華顛梳り罷んで青銅に愧づ、又是れ江城秋空  
しからんと欲す、交態疎なり易く才本拙に、美言信じ難  
し計頻に窮す、暮雲家は遠し千山の外、夜雨夢は迷ふ孤  
枕の中、留滯七年歸ること未だ得ず、自ら甘んず身は寄  
居蟲と作ることを、坎壤の情言外に隱然たり。

人あり燕を咏じて云ふ、白玉堂前栖托穩なり、呢喃盡日  
復た何んぞ愁へん、年々憐む爾が長く客と爲り、省せず  
人間の夔頤侯、此れ比體を用ふ、蓋し諷する所あるなり。

柳灣、隋紀を讀むに云ふ、千里の春風堤柳斜なり、龍舟供  
奉盡く宮娃、君王獨悔ゆ陳を平ぐるの日、枉げて剪る青  
谿一朵の花、音節風趣、自らはれ中晚の家數。

余嘗て謂へらく、律詩は猶ほ古の雅頌のごとく、七絶は  
猶ほ古の國風のごとし、雅頌は國風の人を感ずるの深き  
に如かざるなり、大抵七絶の體たる、優游にして迫らず、  
委婉餘り有り、性情の微、寄托の妙、此を外にして而して  
據ぶ可き者無し、風人の遺意、只此を近しと爲す、今日公

爲近焉。今日自公侯武夫、以及衲子妓流、亦皆可學而至、以故一枝片玉、世自不乏、余之採擷、多涉此體、亦復爲此、人或喜、綴巨篇、而以七絕爲小作、不復措意者、只知駝峯熊掌之爲美、未嘗知晨冕夜鯉自有真風味也。南谷瀧川君諱利雍、其父扶搖滕公子、風流儒雅、名傾當時、君出、冒他姓、頻經劇職、未嘗廢吟哦、詩律之細、殆過前人、源臺山嘗延余相見、自後受知最深、前席談論、輒至丙夜、君爲人謙虛、每獲一詩、必相咨詢、獨聽之言、多蒙嘉納、其玉芝園稿篇什太富、記其最雋者、秋日書懷云、不才逢盛世、何恨宦情違、東海鄉關遠、孤身兄弟稀、自存經濟意、未製薛蘿衣、十載青雲上、看他鵝鷺飛、秋曉云、陰蟲聲

侯武夫より、以て衲子妓流に及ぶまで、亦皆學んで至る可し、故を以て一枝片玉世自ら乏しからず、余の採擷多く此の體に涉るも、亦復此れが爲なり、人或は巨篇を綴るを喜んで、而して七絶を以て小作と爲し、復た意を措かざる者あり、只、駝峯熊掌の美たるを知つて、未だ嘗て晨冕夜鯉、自ら真風味有るを知らざるなり。

南谷瀧川君諱は利雍、其の父扶搖滕公子、風流儒雅、名當時を傾く、君出でて他姓を冒し、頻に劇職を経、未で嘗て吟哦を廢せず、詩律の細、殆んど前人に過ぐ、源臺山嘗て余を延いて相ひ見る、自後知を受けること最も深し、前席談論、輒もすれば丙夜に至る、君、人と爲り謙虛、一詩を獲る毎に、必ず相ひ咨詢す、獨聽の言、多く嘉納を蒙る、其の玉芝園稿、篇什太はだ富む、其の最雋なる者を記す、秋日書懷に云ふ、不才盛世に逢ふ、何んぞ恨まん宦情の違ふを、東海、鄉關遠く、孤身兄弟稀なり、自ら經濟の意を存す、未だ薛蘿の衣を製せず、十載青雲の上、看る他の鵝鷺の飛ぶを、秋曉に云ふ、陰蟲聲罷て苦堂幽なり、殘月窓間影半ば收る、寂寞たり山園假閑の後、牽牛花は綻ぶ、一箱の秋、鵝鷺逕に云ふ、鵝、仄て微逕を通じ、林深くして

罷草堂幽、殘月窓間影半收、寂寞山園微雨後、牽牛花綻一籬秋、鼯鼠逕云巖仄通、微逕林深望轉迷、欲尋幽處去、鼯鼠學人啼、皆不減、唐人諸作、他如梅影先知月、蛙聲已覺春、人煙村落曙、鶯語野亭春、午雨藤花舞、薰風竹氣移、文章終長物、事業奈空論、諸句亦足接武王岑。

詩會分韻今日率爲律令、雖是立脚先定、若便構思其實害詩非淺、江佳肴成韻局已狹、纒一落手牽扯附會、苟且塞責、縱有應劉之才、亦無可施、辭以我不能、則有示怯之嫌、即果作之、人只賞其兩履險耳、塞斷機括、莫此爲甚、其害一也、一相題目、新意頓生、退而檢韻、則字字柄鑿、一無足完意者、不得不割情

望轉た迷ふ、幽處を尋ねて去らんと欲す、鼯鼠人を學んで啼く、皆唐人の諸作に減ぜず、他、梅影先づ月を知り、蛙聲已に春を覺ゆ、「人煙村落曙く、鶯語野亭春なり」、「午雨藤花舞れ、薰風竹氣移る」、文章終に長物、事業空論を奈んの諸句の如き、亦武を王岑に接するに足る。

詩會に韻を分つ、今日率むね律令と爲る、是れ立脚先づ定り、構思に便なるが若しと雖、其の實は時を害すること淺きに非ず、江佳肴成、韻局已に狹し、纒に一たび手に落つれば、牽扯附會、苟且責を塞ぐ、縱ひ應劉の才あるも、亦施す可き無し、辭するに我れ能はざるを以てすれば、即ち怯を示すの嫌有り、即ち果して之を作るも、人只其の險を履むに耐ふるを賞するのみ、機括を塞斷する、此より甚しと爲す莫し、其の害一なり、一たび題目を相て、新意頓に生ず、退いて而して韻を檢すれば、則ち字々柄鑿、一も意を完うするに足る者無し、情を割いて之を擲たざる

而擲之、遂降一等以圖結構、使我才情不得展、其害二也、立意已定、然後覓好韻、猶擬遊某山、討某水、然後覓佳履、今先領韻、方纔立意、亦猶視履佳否、以定遊方之遠近、先受拘束、豈又有自適之理、其害三也、故席間無可傳之詩、人亦視爲芻狗、其原未必不由此、余每莅會、不肯狗韻以強作、以其徒勞神志、絲毫無益也。

詩中鋪叙、不可失實、今日作者、殆不勝其病、年齒方耆、而動有衰頹之語、不出闔閭、而便發倦遊之歎、四面無山、強稱青岑、一時有雨、猶說夕陽、嘯此不傳、驢我所無、而屢言不置、凡如此類、隨手濫用、不覺自陷於欺罔矣、余嘗春初侍、宴田邊侯、侯命賦詩、分得黃字、有

ことを得ず、遂に一等を降して以て結構を圖る、我が才情をして展ぶることを得ざらしむ、其の害二なり、意を立つること已に定り、然る後、好韻を覓む、猶ほ某の山に遊び某の水を討することを擬して、然る後佳履を覓るがごとし、今先づ韻を領して、方に纔に意を立つ、亦猶履の佳否を視て、以て遊方の遠近を定むるがごとし、先づ拘束を受く、豈又自適の理有らんや、其の害三なり、故に席間傳ふ可きの詩無し、人亦視て芻狗と爲す、其の原未必ずしも此に由らずんばあらず、余、會に莅む毎に、肯へて韻に拘つて以て強作せず、其の徒に神志を勞し、絲毫も益無きを以てなり。

詩中の鋪叙、實を失ふ可らず、今日の作者、殆んど其の病に勝へず、年齒方に耆にして、而して動もすれば衰頹の語有り、闔閭を出でずして、而して便ち倦遊の歎を發す、四面山無く、強いて青岑と稱す、一時雨あり、猶ほ夕陽を説く、嘯は此に傳はらず、驢は我が無き所、而して屢言ふて置かず、凡そ此の如きの類、手に隨て濫用す、自ら欺罔に陥るを覺えず、余嘗て、春初、宴に田邊侯に侍す、侯命じて詩を賦せしむ、黃の字を分ち得たり、垂楊池畔輕黃

垂楊池畔弄輕黃句、侯晒曰、詩則絕佳、只我園中原無一株垂楊樹、余遜謝而已、雖是點裝風光、不必窒礙、猶自悔立言之不覈。

詩中填塞故事、最爲下乘、此際享保餘裔、今尙奉明七子三尺者、舍草玄題鳳、投轄下榻、德星劍氣等字、而不能成詩、殊不知故事填塞、則癡重庸腐、絕無俊逸之氣、猶是木馬泥龍、祇增人厭耳、若夫作者有起號之手、把死作活、則念一史皆是詩料、隨用無所不可。

戊午歲、余客浪華、有雲臺叟、僑居極近、屢往參其詩社、一時相會者、今皆忘其姓名、獨記馬光昇字國瑞、不復知其存亡何如、今歲忽托南畝致書、具道故舊、餘情溢紙、余亦悵然有牙絃再續之想、乃錄其見寄近作、晚眺云、

を弄する、の句有り、侯晒て曰く、詩は則ち絶佳なり、只我が園中原キョト一株の垂楊樹無しと、余遜謝するのみ、是れ風光を點裝する必ずしも窒礙せずと雖、猶ほ自ら立言之覈ならざりしをを悔ゆ。

詩中、故事を填塞する、最下乘と爲す、此の際享保の餘裔、今尙は明七子の三尺を奉ずる者、草玄、題鳳、投轄、下榻、德星、劍氣等の字を合て、詩を成すこと能はず、殊に知らず、故事填塞するときは、則ち癡重庸腐、絶えて俊逸の氣無し、猶ほ是れ木馬泥龍の祇に人厭を増すがごときのみ、若し夫れ作者、起號の手有り、死を把て活と作さば、則念一史皆な是れ詩料たり、用に随つて不可なる所無し。

戊午の歲、余、浪華に客たり、雲臺叟あり、僑居極めて近し、屢、往て其の詩社に參す、一時相ひ會する者、今皆其の姓名を忘る、獨り馬光昇字は國瑞を記す、復た其の存亡如何なるを知らず、今歲忽、南畝に托して書を致し、具に故舊を道ふ、餘情紙に溢る、余も亦悵然として牙絃再續の想ひ有り、乃ち其の寄せらるゝ近作を録す、晚眺に云ふ、橋擔人は歸る紅樹の間、寒溪石出で、水聲環す、斜陽

櫓擔人歸紅樹間、寒溪石出水、縈環斜陽半、  
照柴門、雨、畫出范寬著色山、春江送別云、烟  
波渺渺、柳依依、望斷春帆帶、雨歸啼鳥一聲  
殘酒醒、江亭只有杏花飛。

國瑞又爲其友人山當庸字行謹傳致書問、  
且見投詩草、頗見景慕之意、郊行云、幾日愁  
霖、幾日風、出門今晚、暖如融、不看雪白梅花  
色、贏得野桃猩血紅、雨夜聞鴈云、淒涼夜雨  
已傷情、半夜孤燈夢未成、不分數聲天外、  
又來成陣掠愁城、可稱合作、余報二子以詩  
云、封書到手恨開遲、細讀銀鈎喜上眉、一喜  
却能添一喜、故人新友有溫知。

昔人云、文字之緣、比骨肉妻孥、尤爲真切、今  
日海內、非有平素、因詩話流傳、牽連相知者、

半は照らす柴門の雨、畫き出だす范寬著色の山、春江別  
れを送るに云ふ、烟波渺々として柳依依、望断えて春帆  
雨を帯びて歸る、啼鳥一聲殘酒醒む、江亭只杏花の飛ぶ  
有り。

國瑞、又其の友人、山當庸字は行謹の爲に、書問を傳致し、  
且つ詩草を投ぜらる、頗る景慕の意を見はす、郊行に云  
ふ、幾日の愁霖幾日の風門を出で、今晚暖、融するが如  
し、雪白梅花の色を看す、贏得たり野桃猩血の紅なる  
を、雨夜、鴈を聞くに云ふ、淒涼の夜雨已に情を傷まし  
む、半夜孤燈夢未だ成らず、不分なり數聲天外の鴈、又來  
て陣を成し、愁城を掠む、合作と稱す可し、余、二子に報  
ずるに詩を以てして云ふ、封書手に到て開くの遲きを  
恨む、細に銀鈎を讀みて喜び眉に上る、一喜却て能く一  
喜を添ふ、故人新友、溫知あり。

昔人云ふ、文字の縁は、骨肉妻孥に比すれば、尤も真切と  
爲すと、今日海内、平素有るに非ず、詩話流傳に因りて牽  
連相知る者、歲ごとに幾人に下らず、村瀬庸齋も亦其の

歲不下幾人、村瀬庸齋亦其一焉。庸齋名駿  
字子錦、美濃上有知村人也。冬夜五排云、急  
霰鳴、疎竹、陰風吼、老杉、孤燈、花數結、癡硯凍  
漸絨、刀絮知、寒緊、鱗肌判、雪衝、驅、眠、魔始伏、  
索、句、律、愈、嚴、耳、界、何、幽、闕、肩、山、自、險、峻、浮、生  
三、沸、茗、往、事、一、征、帆、身、已、歸、寬、褐、命、將、托、短  
鏡、只、須、安、淡、泊、無、意、問、甘、鹹、其、他、佳、句、云、水  
滿、秧、針、短、風、生、蒲、劍、柔、樹、底、蚊、成、市、沙、頭、鷺  
換、居、半、烟、茶、一、榻、夜、雨、竹、千、竿、眞、乃、錚、錚、詩  
人、矣、庸、齋、又、傳、其、鄉、善、應、山、住、僧、禪、智、詩、出  
村、云、出、村、又、入、村、嫩、日、杖、頭、溫、晴、柳、過、肩、軟  
風、梅、掠、面、翻、人、招、沙、際、渡、犬、吠、竹、邊、門、誰、寫  
吾、標、致、併、來、畫、裏、存、智、號、晦、巖、經、禪、之、暇、尤  
善、書、法、亦、鉢、盂、中、難、得、人、也。

一なり、庸齋名は駿、字は子錦、美濃上有知村の人なり、冬  
夜五排に云ふ、「急霰疎竹に鳴り、陰風老杉に吼ゆ、孤燈  
花數、結び、癡硯凍つて漸く絨す、刀絮、寒の緊なるを知  
る、鱗肌、雪の衝むを判す、眠を驅つて魔始めて伏し、句を  
索めて律愈、嚴なり、耳界何ぞ幽闕なる、肩山自ら險峻、浮  
生三沸の茗、往事一征帆、身は已に寬褐に歸す、命は將に  
短鏡に托せんとす、只須く淡泊に安んじて、甘鹹を問ふ  
に意無るべし、其の他の佳句に云ふ、「水滿ちて秧針短く、  
風生じて蒲劍柔かなり、」樹底、蚊、市を成し、沙頭、鷺、居を  
換ふ、「半烟茶一榻、夜雨竹千竿、眞に乃錚々たる詩人な  
り、庸齋又其の郷善應山の住僧禪智の詩を傳ふ、村を出る  
に云ふ、村を出で、又村に入る、嫩日杖頭に温なり、晴柳  
肩を過ぎて軟かに、風梅面を掠めて翻る、人は招く沙際  
の渡、犬は吠ゆ竹邊の門、誰か吾が標致を寫して併せ來  
つて畫裏に存せん、智は晦巖と號す、經禪の暇、尤も書法  
を善くす、亦鉢盂中、得難きの人なり。

會津佐藤載、宇大車、號雲居、善變、偽體、來受、  
 詩教、可謂、潔、已、以、進、矣、咏、櫻、云、稍、學、藐、姑、仙、  
 子、姿、還、嫌、顔、色、沈、燕、支、欄、開、淡、日、珠、千、顆、點、  
 落、輕、風、雪、萬、枝、喚、汝、海、棠、非、具、眼、笑、他、桃、李、  
 自、豐、肌、當、年、未、入、趙、昌、筆、管、領、春、光、特、地、奇、  
 又、書、懷、云、愁、城、築、得、將、過、雉、歡、伯、迎、來、也、要、  
 妖、真、警、句、也、

日光猿橋甲州、名信威、詩有清才、每以王務  
 出都、必蒙相訪、題友人山莊云、幽棲君卜得、  
 山色鎮縈回、瀑水千峯雨、松風萬壑雷、林深  
 人探藥、庭靜鶴眠苦、不道村醅薄、晚窓來共  
 杯、他如煙幽清磬動、月黑怪禽啼、落日人煙  
 白、斷鴻山色青、殘月楓林外、亂雞霜屋中、諸  
 句、皆、絕、

會津の佐藤載、宇は大車、雲居と號す、善く偽體を變じて、  
 來つて詩教を受く、已を潔して以て進むと謂ふ可し、櫻  
 を咏するに云ふ、稍、學ぶ藐姑仙子の姿、還りて嫌ふ顔色  
 の燕支に沈ざるを、欄開淡日珠千顆、點落輕風雪萬枝、汝  
 を海棠と喚ぶ具眼に非ず、笑ふ他の桃李自ら豐肌、當年  
 未だ趙昌の筆に入らず、春光を管領して特地に奇なり、  
 又書懷に云ふ、愁城築き得て將に雉を過ぎんとす、歡伯  
 迎へ來つて也、妖、真、警、句、なり、

日光の猿橋甲州、名は信威、詩、清才あり、王務を以て都に  
 出る毎に、必ず相ひ訪はる、友人の山莊に題するに云ふ  
 「幽棲君卜し得たり、山色、鎮、縈、回、瀑水千峯の雨、松  
 風萬壑の雷、林深くして人、藥を採る、庭靜かにして鶴、苦  
 に眠る、村醅の薄を道はず、晚窓來つて杯を共にす、他、  
 煙幽にして清磬動き、月黒くして怪禽啼く、落日人煙白  
 く、斷鴻山色青し、殘月楓林の外、亂雞霜屋の中」の諸句の  
 如き、皆な絶す、



常陸黑崎至純、其詩已入前年詩話矣。至純原作「子順」有避改焉。以其鄉產「硯石」又自號「璞齋」。取「老杜」巨璞禹鑿痕之語。近日見「南台遊紀」諸作、其中囊谷瀑布七古、最爲超雋。今茲采錄云。古木參天白日撐、怪底轟地奔。鷗鷺仰捫萬藟困、纒虺溼霧撲面氣似醒。躡攀纒極危險盡、天風颯颯吹袂輕。建瓶直下銀河水、峭峯高竝秀色橫。欲問源頭無去路、端坐貪看白雲生。我今似欲登仙去、一換凡骨神頓清。山靈元自深祕景、奇勝不許浪商評。只有土人相艷說、喚做天下第一。自注、土人稱此瀑爲天下第一。至純詩頗有率易之病。余屢規之、遂能刻意成功如此。至純在郷、主結樂山詩社、提倡不懈。詩盟可八九人、

常陸の黑崎至純、其の詩已に前年の詩話に入る。至純原と子順に作る、避くること有りて改む、其の郷、硯石を産するを以て、又自ら璞齋と號す。老杜「巨璞禹鑿の痕」の語に取る。近日南台遊紀諸作を示さる。其の中、囊谷瀑布の七古、最、超雋と爲す。今茲に采録す。云々。古木天に參して白日撐ふ、怪底す地に轟いて奔霆の驚くを、仰いで萬藟を捫して窺虺に困む、溼霧面を撲て氣醒に似たり、躡攀纒に極りて危險盡く、天風颯々袂を吹いて輕し、建瓶直に下る銀河の水、峭峯高く竝んで秀色横はる、源頭を問はんと欲するに去路無し、端坐貪り看る白雲の生ずるを、我れ今登仙し去らんと欲するに似たり、凡骨を一換して神頓に清し、山靈元と自ら深く景を祕す、奇勝評さず浪に商評するを、只土人の相ひ艷説する有り、喚び做す天下第一の名、自注に、土人此の瀑を稱して天下第一と爲す、至純の詩、頗る率易の病あり、余屢、之を規す、遂に能く刻意し功を成すこと此の如し、至純、郷に在る、主として樂山詩社を結び、提倡懈らず、詩盟八九人可り、今

飯村孫字子德、少年多才、輟耕之暇、孜孜讀書、自號曰三餘堂、最敏於詩、屢托至純、見投其草、余雖未一握手、文字之交已定、不得不出力相援也、春晚書適云、十畝清閑足、柴門久不開、山雨花低徑、林風笛破苔、香槐消殘霧、茶鑪送小雷、已忘城市路、養懶與悠哉、秋夜云、雲淡前峰月未生、山村擊柝殺寒更、松防一椀人無寐、隔水犬聲如豹聲、晚步山間云、得得尋詩樵路險、鶉鳩啼罷日將斜、亂山堆裏有人住、一綫炊煙隔杏花、寂寞荒村有、此佳詩、都下作手、愧者多矣。

安受道士號南臺山人、曾經出都、廁東龜年社、喜明七子體、老年稍變格、至純爲余傳其

二人を載す。

飯村孫、字は子德、少年多才、輟耕の暇、孜々として書を讀む、自ら號して三餘堂と曰ふ、最も詩に敏なり、屢、至純に托して其の草を投ぜらる、余未だ一たびも手を握らずと雖も、文字の交已に定まる、力を出して相ひ援けざることを得ず、春晚書適に云ふ、十畝清閑足、柴門久しく開かず、山雨花、徑に低れ、林風笛、苔を破る、香槐、殘霧を消し、茶鑪、小雷を送る、已に城市の路を忘れ、懶を養ふて興悠なるかな、秋夜に云ふ、雲淡くして前峰月未だ生ぜず、山村柝を擊て寒更を殺ぐ、松防一椀人寐ること無し、水を隔つる犬聲、豹聲の如し、晚に山間に歩するに云ふ、得々詩を尋ねて樵路險かなり、鶉鳩啼き罷んで日將に斜ならんとす、亂山堆裏人の住する有り、一綫の炊煙杏花を隔つ、寂寞たる荒村、此の佳詩有り、都下の作手、愧る者多し。

安受道士、南臺山人と號す、曾經て都に出で、東龜年の社に、明七子の體を喜ぶ、老年稍、格を變ず、至純余が爲に其の蘭を咏する一絶を傳ふ、云ふ、陶菊周蓮皆な主

咏蘭一絶云、陶菊周蓮皆有主、梅於君復又  
相親、芳蘭獨處君休怪、自別靈均不嫁人、頗  
得宋元風趣。

高須松尾世良、字子顯、號東萊、年過宿肉、詩  
力益健、梅雨云、輕黃梅已熟、窓下坐憑梧、蒼  
雨鳩追婦、梁泥燕養雛、徹將上衣桁、溼稍透、  
書厨却愛無人問、清吟與不孤、秋夜讀書云、  
雨聲點點滴芭蕉、窓下挑燈坐寂寥、讀史最  
耽遊俠傳、老來豪氣未全消。

僧理成字大靈、住品川正徳寺、托澤子有寄、  
致其詩、幽居云、柴戶何曾綠、客開小園漠漠、  
長莓苔、翠雲透屋千梢竹、盡是山僧手自栽、  
雨意云、潑墨油雲挾勢來、涼颺先自竹間回、  
劈棧早與新詩計、不待雨師勸被催、余之於

有り、梅は君復に於て又相ひ親しむ、芳蘭獨處君怪むこ  
とを休めよ、靈均に別れしより人に嫁せず、頗る宋元の  
風趣を得たり。

高須の松尾世良、字は子顯、東萊と號す、年、宿肉を過ぐ、詩  
力益、健なり、梅雨に云ふ、輕黃梅已に熟す、窓下坐して  
梧に憑る、蒼雨、鳩、婦を追ふ、梁泥、燕、雛を養ふ、徹は將に  
衣桁に上らんとす、溼は稍、書厨に透る、却て愛す人の問  
ふ無きを、清吟與孤ならず、秋夜書を讀むに云ふ、雨聲點  
々芭蕉に滴る、窓下燈を挑けて寂寥に坐す、史を讀みて  
最も耽る遊俠傳、老來豪氣未だ全く消せず。

僧理成、字は大靈、品川正徳寺に住す、澤子有に托して、其  
の詩を寄せ致す、幽居に云ふ、柴戶何ぞ曾て客に綠で開  
かん、小園漠々莓苔を長す、翠雲屋を透る千梢の竹、盡く  
是れ山僧手自ら栽う、雨意に云ふ、潑墨の油雲勢を挾ん  
で來る、涼颺先づ竹間より回る、棧を劈て早く新詩と計  
る、雨師の勸に催さるるを待たず、余の成に於ける、半面  
の讒無し、頗聞く才幽雨ながら富むと、近日緇流、詩無し

成、無半面之譏、頗聞才齒兩富、近日緇流無詩、我獨有望於斯人。

石川滄浪、今年重投其詩、以徵摘錄、比昨覺更進一步、春遊云、風光隨處便吾家、甞醉江頭到、日斜、肥得杜陵詩句好、蜻蜓點水蝶穿花、古寺云、老檜雲蒸晝不開、雨餘門逕滑蒼苔、類輒委地無人拾、恰有布紋堪硯材、滄浪又自號七癖、自貽云、一牀書畫一棊枰、石也怪奇琴也清、詩酒多年舊成癖、近來加五若爲情、此稍似放翁晚作。

余一切不喜選集、勸人讀詩、必就本集、大抵古今選者、各收合己格調之詩、如濟南選唐詩、世稱爲嚴刻、然其所謂唐詩盡於此者、亦濟南家法、唐詩盡於此也、延禮品彙、稍爲浩

我れ獨り斯の人に望む有り。

石川滄浪、今年重ねて其の詩を投じて、以て摘録を徵ひ、昨に比すれば更に一步を進むるを覺ゆ、春遊に云ふ、風光隨處便ち吾が家、醉を盡して江頭、日の斜なるに到る、肥し得たり、杜陵詩句の好きを、蜻蜓水に點じ、蝶花を穿つ、古寺に云ふ、老檜雲蒸して晝開かず、雨餘門逕滑蒼苔滑なり、類輒地に委して人の拾ふ無し、恰も布紋の硯材に堪ふる有り、滄浪、又自ら七癖と號す、自貽に云ふ、一牀の書畫一棊の枰、石也怪奇琴也清し、詩酒多年舊と癖を成す、近來五を加ふ若爲なる情ぞ、此れ稍、放翁の晚作に似たり。

余一切、選集を喜ばず、人に勸めて詩を讀む、必ず本集に就かしむ、大抵古今の選者、各、己が格調に合するの詩を收む、濟南の唐詩を選するが如き、世稱して嚴刻と爲す、然れども其の謂はゆる唐詩、此に盡くといふ者は、亦濟南家法の唐詩、此に盡るなり、延禮の品彙、稍、浩瀚と

翰但廷禮選詩、先立幾種階級、以區別四唐、任意黜陟、譬之一衙門分職擇人、曰某任某官、某充某職、一入其門、先視其頭銜何如、此豈選詩之道哉、凡讀唐詩、莫善於讀全唐詩、若或無書、則李杜王孟以下至義山樊川諸家、全集具存、讀之爲有餘師、其讀宋元諸詩、亦復如此、今讀高李諸選、謂唐詩如此、讀宋元諸抄、謂宋詩如此、管闕蠡測、我知其不可共語詩也。

滕東野遺稿所載、樂府白紵歌、全出太白集、蓋東野生前手、錄李詩者、編時不察、遂誤收之也、按山谷集、收賈至草色青青一絕、以爲谷詩、此亦因谷嘗自書唐詩而誤、古今事、固有同類者、但東野稿較正、出春臺手、春臺以

爲す、但、廷禮の詩を選する、先づ幾種の階級を立て、以て四唐を區別し、意に任せて黜陟す、之を譬ふるに一衙門職を分ち人を選び、某は某の官に任じ、某は某の職に充つと曰ふがごとし、一たび其の門に入れば、先づ其の頭銜何如を視る、此れ豈詩を選するの道ならんや、凡そ唐詩を讀む、全唐詩を讀むより善きは莫し、若し或は書無くんば、則ち李杜王孟以下、義山樊川の諸家に至るまで、全集具存す、之を讀めば餘師有りと爲す、其の宋元諸詩を讀むも、亦復た此の如し、今、高李諸選を讀みて、唐詩此の如しと謂ひ、宋元諸抄を讀みて、宋詩此の如しと謂ふ、管闕蠡測、我れ其の共に詩を語る可からざるを知るなり。

滕東野の遺稿に載する所、樂府白紵の歌、全く太白集に出づ、蓋、東野生前に李詩を手録する者、編する時、察せず、遂に誤つて之を收むるなり、按するに、山谷集に、賈至の草色青青たりの一絶を收めて、以て谷の詩と爲す、此れ亦谷が嘗て唐詩を自書するに因つて誤る、古今の事、固より類を同する者あり、但、東野稿の較正、春臺の手に出づ、春臺、稽核を以て自ら任じ、一字を假さず、而も此の

精核自任、不假一字、而致此踈脫、殊可笑也。晉書、董京至洛陽、被髮而行、逍遙吟社、常宿白社中、白社是洛陽所有、古詩所謂東北指青門、西南見白社者、案沈約賦、乍容身於白社、李義山詩、白社幽閒君暫居、皆襲董故事、至明人、乃云猶有逢迎白社僧、白社可容陶令酒、遂以白蓮社誤爲白社。

余擬古云、采葑又采葑、采葑何時止、今歲又采采、莫是近下體、忽得秦里詩、便覺余言未是、無題云、楊州孤鶴夢相牽、擲盡腰纏十萬錢、繡被暖生重閣雨、翠屏香鎖半籬煙、溫柔鄉裏身堪老、歌吹海中人欲仙、今日青春何負我、又浮一棹上觥船、有新甘美、余之采葑、曷可止乎。

踈脫を致す、殊に笑ふ可きなり。

晉書に董京洛陽に至る、被髮して行き吟社に逍遙す、常に白社中に宿すと、白社は是れ洛陽の有る所、古詩に謂はゆる、東北、青門を指す、西南、白社を見る」といふ者、案するに沈約の賦に、乍、身を白社に容る、李義山の詩に、白社幽閒君暫らく居る、皆董の故事を襲ふ、明人に至つて、乃云ふ、「猶、逢迎白社の僧有り」、「白社容る可し陶令の酒」と、遂に白蓮社を以て誤つて白社と爲す。

余の擬古に云ふ、「葑を采り又葑を采る、葑を采つて何時か止まん、今歲又采々、是れ下體に近づくこと莫らんや、忽ち秦里の詩を得て、便ち余が言未だ是ならざるを覺ゆ、無題に云ふ、楊州の孤鶴夢相ひ牽く、擲盡す腰纏十萬錢、繡被暖け生ず重閣の雨、翠屏香は鎖す半籬の煙、溫柔郷裏身老するに堪へたり、歌吹海中人仙ならんと欲す、今日青春何ぞ我に負かん、又、一棹を浮べて、觥船上る」と、斯の甘美あり、余の葑を采る、曷ぞ止む可けんや。

五山堂詩話卷六終

日本詩話叢書

四二